

茨城県教育財団文化財調査報告第227集

中山遺跡
福原打越塚群
上加賀田宮後東遺跡

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ

平成16年3月

日本道路公団
財団法人 茨城県教育財団

なか やま い せき
中山遺跡
ふく はら うち こし つか ぐん
福原打越塚群
かみ か が た みや うしろ ひがし い せき
上加賀田宮後東遺跡

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書VI

平成16年3月

日本道路公団
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めております。北関東自動車道建設事業も、その目的に添って計画されたものであります。

このたび、日本道路公団は、笠間市福原・上加賀田地区において、北関東自動車道（協和～友部）建設事業を決定いたしました。この事業地内には埋蔵文化財包蔵地である中山遺跡、福原打越塚群、上加賀田宮後東遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成15年7月から9月まで発掘調査を実施しました。

本書は、中山遺跡、福原打越塚群、上加賀田宮後東遺跡の調査成果を収録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である日本道路公団から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、笠間市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 齋藤佳郎

例 言

1 本書は、日本道路公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成14年7月1日から9月30日まで発掘調査を実施した、茨城県笠間市大字福原字八幡台536番地の1ほかに所在する中山遺跡、同市大字福原字横倉3755番地の8ほかに所在する福原打越塚群、同市大字上加賀田宮後1902番地の1ほかに所在する上加賀田宮後東遺跡の発掘調査報告書である。

2 各遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

中山遺跡

調査 平成14年8月1日～平成14年8月31日

整理 平成16年2月1日～平成16年2月29日

福原打越塚群

調査 平成14年9月1日～平成14年9月30日

整理 平成16年3月1日～平成16年3月31日

上加賀田宮後東遺跡

調査 平成14年7月1日～平成14年9月30日

整理 平成15年9月1日～平成15年10月31日

3 各遺跡の発掘調査は、調査第二課長鈴木美治のもと、以下のものが担当した。

中山遺跡

調査第1班長 萩野谷 悟 平成14年8月1日～平成14年8月31日

主任調査員 横倉 要次 平成14年8月1日～平成14年8月31日

主任調査員 榊 雅彦 平成14年8月1日～平成14年8月31日

福原打越塚群

調査第1班長 萩野谷 悟 平成14年9月1日～平成14年9月30日

主任調査員 横倉 要次 平成14年9月1日～平成14年9月30日

主任調査員 榊 雅彦 平成14年9月1日～平成14年9月30日

上加賀田宮後東遺跡

調査第1班長 萩野谷 悟 平成14年7月1日～平成14年9月30日

主任調査員 川上 直登 平成14年7月1日～平成14年9月30日

調査員 早川 麗司 平成14年7月1日～平成14年9月30日

4 各遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長鶴見貞雄のもと、以下のものが担当した。執筆分担は、以下の通りである。

横倉 例言、凡例、抄録、第3章、第4章

早川 第1章、第2章、第5章

5 上加賀田宮後東遺跡出土の墨書土器の判読については、国立歴史民俗博物館の平川南副館長兼教授に、中山遺跡、上加賀田宮後東遺跡の石器・石製品の石材については、茨城県立自然博物館の飯田毅主任学芸員、小池渉副主任学芸員にそれぞれ御指導をいただいた。

凡 例

1 各遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、中山遺跡は $X = +38,400\text{m}$ 、 $Y = +31,100\text{m}$ の交点を基準点(A 1 a₁)とし、福原打越塚群は $X = +37,840\text{m}$ 、 $Y = +31,800\text{m}$ の交点を基準点(A 1 a₁)とし、上加賀田宮後東遺跡は $X = +37,880\text{m}$ 、 $Y = +38,200\text{m}$ の交点を基準点(A 1 a₁)とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C..., 西から東へ1, 2, 3...とし、「A 1区」、「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c...j, 西から東へ1, 2, 3...0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a₁区」、「B 2 b₂区」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の欄には世界測地系に基づく緯度・経度を()を付して併記した。





3 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

住居跡—S I 土坑—S K 井戸跡—S E 溝跡—S D 掘立柱建物跡—S B
塚—T K 柱穴—P 攪乱—K

4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

5 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

6 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

焼土・旧表土・釉・赤彩  炉・火床面・繊維土器断面・石器使用痕・被熱痕 
竈部材・粘土・炭化材・黒色処理  油煙・煤・炭化物  硬化面 - - - - -
土器● 土製品○ 石器・石製品□ 金属製品△

7 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は中山遺跡が300分の1、福原打越塚群が200分の1、上加賀田宮後東遺跡が250分の1で掲載し、遺構は60分の1に縮尺して掲載したが、異なる場合もある。

(2) 遺物は3分の1に縮尺して掲載したが、異なる場合もある。

(3) 文字資料のうち、焼成前に線刻されたものを「へら書き」、焼成後に線刻されたものを「刻書」と分けて記述した。

8 「主軸方向」は、炉または竈の中心と出入り口を結んだ軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とみなし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例 N-10°-E)

9 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

(1) 計測値の単位は、cm及びgで示した。なお、現存値は()、推定値は[]を付して示した。

(2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号については通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。

10 遺構一覧表における計測値は、現存値は()、推定値は[]を付して示した。

抄 録

ふりがな	なかやまいせき ふくはらうちこしつかぐん かみがたみやうしろひがしいせき							
書名	中山遺跡 福原打越塚群 上加賀田宮後東遺跡							
副書名	北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	VI							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第227集							
編著者名	横倉 要次 早川 麗司							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和 1 丁目356番地の2 T E L 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和 1 丁目356番地の2 T E L 029-225-6587							
発行日	平成16(2004)年3月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
なかやまいせき 中山遺跡	いばらきけんかきましのおおあぎふくはら 茨城県笠間市大字福原 字八幡台536番地の1 ほか	08216 - 125	36度 20分 36秒 (36度 20分 47秒)	140度 10分 55秒 (140度 10分 43秒)	87 ~ 91m	20020801 ~ 20020831	1,850.58㎡	北関東自動車道(協和～友部)建設事業に伴う事前調査
ふくはらうちこしつかぐん 福原打越塚群	いばらきけんかきましのおおあぎふくはら 茨城県笠間市大字福原 字横倉3755番地の8 ほか	08216 - 041	36度 20分 24秒 (36度 20分 35秒)	140度 11分 17秒 (140度 11分 05秒)	79 ~ 82m	20020901 ~ 20020930	577.0㎡	
かみがたみやうしろひがしいせき 上加賀田宮後東遺跡	いばらきけんかきましのおおあぎかきか 茨城県笠間市大字上加 賀田宮後1902番地の1 ほか	08216 - 158	36度 20分 26秒 (36度 20分 37秒)	138度 55分 32秒 (138度 55分 20秒)	38 ~ 40m	20020701 ~ 20020930	861.68㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中山遺跡	狩猟場跡 集落跡 その他	縄文時代	竪穴住居跡 1軒 陥し穴 6基 土坑 8基		縄文土器(深鉢) 石器(石鏃, 石匙, 凹石, 石皿)		縄文時代から古墳時代までの複合遺跡である。縄文時代早期から前期にかけての狩猟場跡と集落の一部が確認された。	
		古墳時代	土坑 1基		土師器(埴)			
		時期不明	土坑 29基					

福原打越塚群	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 2軒	縄文土器（深鉢） 石器（石鏃）	旧石器時代から近世までの複合遺跡である。縄文時代前期の集落の一部と、近世以降に形成された墓域と塚群が確認された。
	塚群	近世	塚 4基	瓦質土器（鉢） 陶器（小皿）	
	墓域		墓壇 2基	金属製品（鉄釘、煙管） 古銭（寛永通寶）	
	その他	奈良・平安時代	土坑 1基	土師器（坏、甕） 須恵器（坏、高台付坏、蓋） 土製品（紡錘車）	
上加賀田宮後東遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 6軒	土師器（坏、碗、高台付皿、甑） 須恵器（坏、甕） 灰釉陶器（碗） 石製品（支脚、砥石） 土製品（支脚）	平安時代の集落跡と近世の建物跡が確認された。平安時代の竪穴住居跡からは、墨書土器が多数出土した。
			土坑 1基		
	その他	近世	土坑 47基		
		その他	ピット群 1か所		

目 次

序

例言

凡例

抄録

目次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 中山遺跡	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	11
1 縄文時代の遺構と遺物	11
(1) 竪穴住居跡	11
(2) 陥し穴	13
(3) 土坑	16
(4) 遺構外出土遺物	23
2 古墳時代の遺構と遺物	24
(1) 土坑	24
(2) 遺構外出土遺物	25
3 その他の遺構	26
第4節 まとめ	27
第4章 福原打越塚群	30
第1節 遺跡の概要	30
第2節 基本層序	30
第3節 遺構と遺物	32
1 旧石器時代の遺物	32
2 縄文時代の遺構と遺物	32
(1) 竪穴住居跡	32
(2) 遺構外出土遺物	36

3	奈良・平安時代の遺構と遺物	37
(1)	土坑	37
(2)	遺構外出土遺物	38
4	近世の遺構と遺物	39
(1)	塚	39
(2)	墓壙	43
(3)	遺構外出土遺物	45
5	その他の遺構	46
第4節	まとめ	47
第5章	上加賀田宮後東遺跡	50
第1節	遺跡の概要	50
第2節	基本層序	50
第3節	遺構と遺物	52
1	平安時代の遺構と遺物	52
(1)	竪穴住居跡	52
(2)	土坑	72
2	近世の遺構と遺物	73
(1)	掘立柱建物跡	73
(2)	井戸跡	78
3	その他の遺構と遺物	79
(1)	土坑	79
(2)	ピット群	81
(3)	遺構外出土遺物	82
第4節	まとめ	85
写真図版		

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

日本道路公団は、常陸那珂港と北関東の各主要都市を結ぶ北関東自動車道の早期開通をめざしている。

平成10年11月4日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、北関東自動車道建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成10年12月15日から12月18日に中山遺跡と福原打越塚群の現地踏査を、平成12年6月19日に上加賀田宮後東遺跡の現地踏査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成13年2月26～28日に中山遺跡と上加賀田宮後東遺跡の試掘調査を、平成13年7月12日に福原打越塚群の試掘調査を実施した。平成13年3月28日、茨城県教育委員会教育長は日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに事業地内に中山遺跡が、平成13年8月8日には、上加賀田宮後東遺跡と福原打越塚群が所在する旨回答した。

平成14年2月23日と2月25日に、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。平成14年2月29日、茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。平成14年3月1日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、北関東自動車道建設に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書が提出された。その結果、平成14年3月1日、茨城県教育委員会教育長から日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、中山遺跡、上加賀田宮後東遺跡、福原打越塚群について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成14年7月1日から9月30日まで上加賀田宮後東遺跡の、平成14年8月1日から8月31日まで中山遺跡の、平成14年9月1日から9月30日まで福原打越塚群の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

各遺跡の調査経過については、下表のとおりである。

工程	中山遺跡		福原打越塚群	上加賀田宮後東遺跡		
	年月	平成14年	平成14年	平成14年		
		8月	9月	7月	8月	9月
調査準備						
表土除去						
遺構確認						
遺構調査						
洗浄・注記・写真整理作業						

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

中山遺跡・福原打越塚群は茨城県笠間市大字福原に、上加賀田宮後東遺跡は茨城県笠間市大字上加賀田に所在している。笠間市は県中央部の西端、八溝山地の南西部に位置している。鶏足と筑波の二山塊に囲まれた盆地状の地形であり、市域の大部分が丘陵である。平地は涸沼川やその支流である中小河川沿いに形成されているが、市域の中で占める割合は少ない。

中山遺跡は笠間市南西部に位置し、吾国山（標高518m）から北西にのびる標高約90mの丘陵上にあり、谷津田を望む緩斜面に立地している。水田面との比高は約21mであり、調査前の現況は山林である。福原打越塚群は中山遺跡より東方約600mの標高約80mの丘陵上にあり、中山遺跡と同じく谷津田を望む丘陵緩斜面に立地している。水田面との比高は約13mであり、調査前の現況は山林である。上加賀田宮後東遺跡は笠間市南部に位置し、涸沼川右岸の丘陵上にある。この丘陵の最頂部の標高は約61mであり、今回の調査区は南斜面の標高約40m付近から標高約36mの平地であり、調査前の現況は畑地である。

第2節 歴史的環境

笠間市内の遺跡は、茨城県遺跡地図¹⁾に170遺跡が掲載されている。各遺跡の詳細については、笠間市史編さん事業の一環で、市内全域を対象とした分布調査が筑波大学によって実施され、遺跡地名表と遺跡地図、代表的な遺物も図示しながら詳細にまとめられている²⁾。この調査結果と発掘調査事例をもとに中山遺跡<①>、福原打越塚群<②>、上加賀田宮後東遺跡<③>の周辺遺跡について記述する。

中山遺跡は平成13年に発掘調査が行われ、縄文時代と平安時代から近世までの複合遺跡であることが判明した³⁾。縄文時代の遺構は確認されなかったものの、早期後半、前期後葉、中期、後期の遺物が出土しており、何らかの営みがあったことが想定される。本格的に集落が形成されたのは9世紀後葉からであり、11世紀前葉まで継続する。住居の規模・竈の向きや位置が時期ごとに変化しており、その変化は同時期では共通していることが分析されており、「同一郷内の動き」と報告されている。

中山遺跡から谷筋を挟んだ東方約1kmの標高約90mの丘陵上に福原原遺跡<12>が位置している。平成6年に奈良・平安時代の集落跡が調査され⁴⁾、8世紀代（2軒）、9世紀代（1軒）、時期不明（1軒）の竪穴住居跡、平安時代の掘立柱建物跡が確認されている。墨書土器が4点出土しており、釈文は「足」「足_ろ」「□」「□」⁵⁾と報告されている。谷筋を挟んで対峙するふたつの集落は、福原原遺跡が先に形成されるが、共存する時期があったものと考えられる。両地区は中世もしくは近世になると墓域として使用され、土地利用の変換が見られる。

平安時代の集落跡としては、上加賀田宮後東遺跡の東方約1kmに位置し、平成14年に発掘調査された小組遺跡<27>がある⁶⁾。調査では、涸沼川を望む東斜面から裾部にかけて竪穴住居跡が14軒確認され、出土土器に須恵器供膳具が無いことや土師器から、上加賀田宮後東遺跡の集落跡と同時期のものと考えられる。

上加賀田宮後東遺跡と小組遺跡から涸沼川に沿って平地をさかのぼると、直線距離で約5kmの所に石井遺跡群<27>が位置している。その中の石井台遺跡が昭和47年に調査され⁷⁾、竪穴住居跡29軒、掘立柱建物跡7棟、

土坑1基が確認されている。集落の変遷は6期に区分され、1期が8世紀中頃、2期が8世紀後半、3期が9世紀前半、4期が9世紀中頃、5期が10世紀中頃、6期が10世紀後半とされている。主な遺物としては、「中火殿」「中」「三和田」「三」と書かれた墨書土器、平瓦、陰刻花文が施された緑釉陶器碗が挙げられている⁸⁾。

石井遺跡群は平成14年にも茨城県教育財団が発掘調査を行い、遺物集中地点1か所、堅穴住居跡1軒を確認している。出土した須恵器が多種多様であり、坏底部に「厨」と刻まれていることや円面硯が出土していることから、官衙遺跡との関連性が考えられている⁹⁾。笠間市は律令期の行政単位でいうと、新治郡に属する。市内には東山道と東海道を結び、常陸国府に至る連絡路の起点である「大神駅家」が存在したと推定されている。その位置は諸説があり¹⁰⁾、発掘調査では確認されておらず不明な点が多い。駅家や古道の位置の考古学的な確認はもとより、石井台遺跡のような拠点集落および一般集落と、駅路の歴史的な位置づけが今後の課題である。

中山遺跡、福原打越塚群、上加賀田宮後東遺跡の周辺遺跡を、発掘調査された奈良・平安時代の遺跡を中心にみてきたが、その他の時代は筑波大学の分布調査報告を中心に時代順に概観していくことにする。

旧石器時代の所産と考えられる細石刃は、本戸城跡<34>、石崎遺跡<39>からそれぞれ1点ずつ採集されている。前者はチャート製、後者は頁岩製である¹¹⁾。西田遺跡からは神子柴型磨製石斧の未製品が1点報告されている。この石器は旧石器時代終末から縄文時代開始期の「神子柴・長者久保文化」の特徴的な石器のひとつである。

縄文時代の遺跡では、中山遺跡において縄文早期後半から前期前半の土器群が出土しており¹²⁾、石崎遺跡からは田戸下層式期、関山式期、蟹沢遺跡<45>からは関山式期の土器片が採集されている。また、周知の遺跡以外からも早期後葉や前期後葉の土器群も確認されており、山間部の縄文時代の資料が増えつつある。

弥生時代の遺跡では、上加賀田宮後東遺跡、蔵後遺跡<38>から中期後半の足洗式併行と考えられる土器が採集されている。上加賀田宮後東遺跡の平成14年の発掘調査では、この時期の土器は確認されていない。

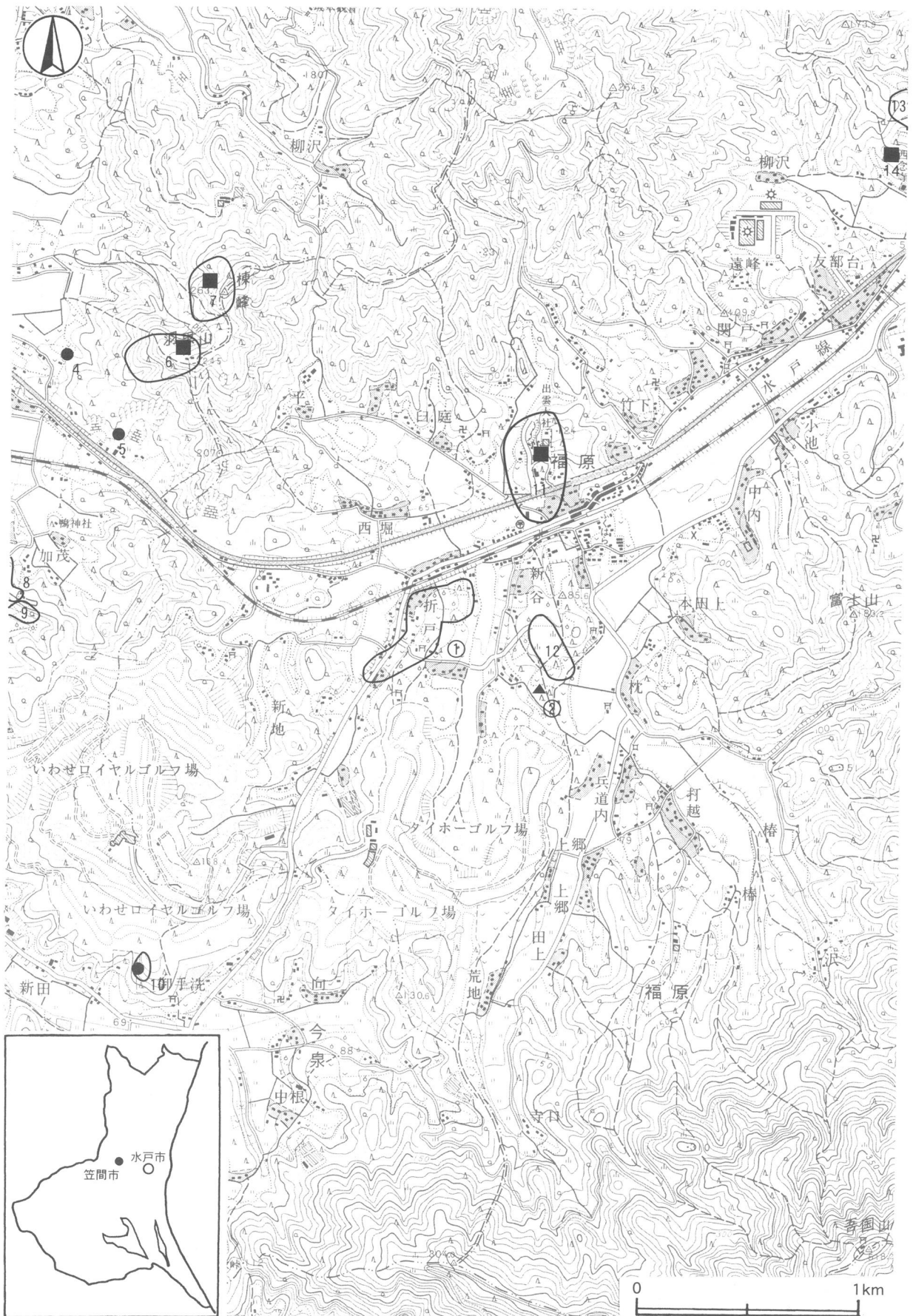
古墳時代の遺跡は、筑波大学の調査では、散布地11、古墳(群)16、計27遺跡が確認され、『茨城県遺跡地図』では36遺跡(うち古墳群11か所、古墳約56基)が掲載されている。

中世から近世にかけての遺跡は、城館跡、塚(塚群)などがあり、羽黒山城跡<6>、棟峯城跡<7>、福原城跡<11>、稲田城跡<14>、本戸城跡<34>、滝沢塚群<51>、麓城跡<54>、笠間城主下屋敷跡<57>、時習館跡<58>、天王塚<63>、荒地前塚<64>がある。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第1～3図、表1の遺跡番号と同じである。

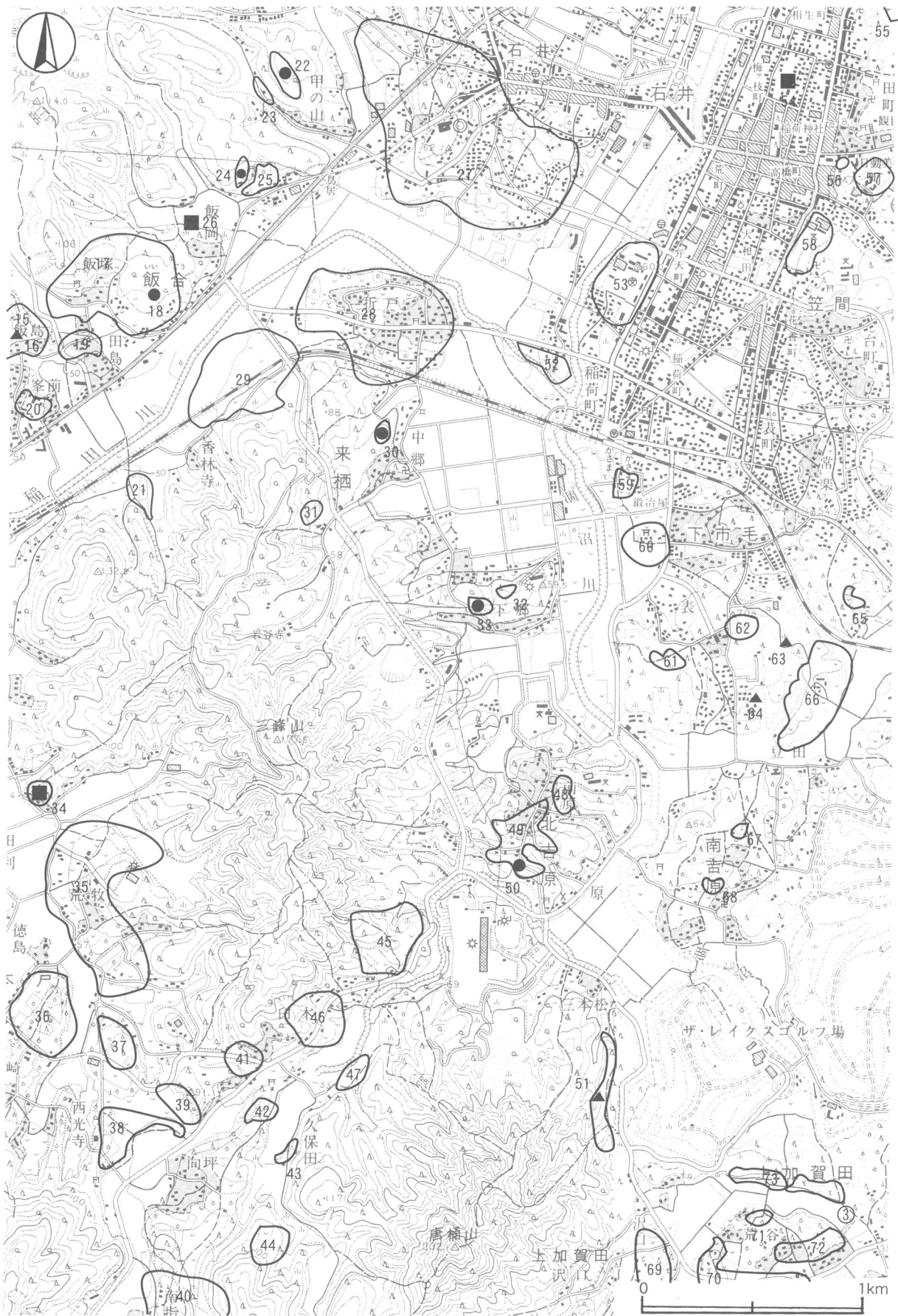
註

- 1) 茨城県教育庁文化課 『茨城県遺跡地図』 茨城県教育委員会 2001年3月
- 2) 西野 元 『笠間市遺跡分布調査報告書』 笠間市史編さん委員会 1992年3月
- 3) 成島一也 「中山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第204集 (財)茨城県教育財団 2003年3月
- 4) 萩原義照 「福原原遺跡」『笠間市埋蔵文化財調査報告書』第8集 笠間市教育委員会 福原原遺跡発掘調査会 1995年3月
- 5) 川井正一 白田正子他 「茨城県域における文字資料集成1」『研究ノート』9号 (財)茨城県教育財団 2000年6月
- 6) 茨城県教育財団 「平成14年度調査遺跡の概要 小組遺跡」『年報』22 (財)茨城県教育財団 2003年6月
- 7) 大川 清 「石井台遺跡」『考古学研究室報告』2種3冊 飛鳥書房
- 8) 川井正一 「主要遺跡 石井台遺跡」『茨城県史料考古史料編奈良・平安時代』 茨城県 1995年3月
- 9) 茨城県教育財団 「平成14年度調査遺跡の概要 石井遺跡群」『年報』22 (財)茨城県教育財団 2003年6月
- 10) 笠間市史編さん委員会 『笠間市史』上巻 笠間市 1993年12月
- 11) これらの細石刃の属する時代について註2文献の中で山田康弘氏は、「確実に旧石器時代の所産とは断言できかねるが一応ここに記しておく」と旧石器時代の節で扱っている。また、細石刃核が確認できてないことから、「形態上の特徴から細石刃と判断することは難しく、本資料も石器製作時の細部調整剥片である可能性も指摘しておきたい」と述べている。
- 12) 茨城県教育財団 「平成14年度調査遺跡の概要 中山遺跡」『年報』22 (財)茨城県教育財団 2003年6月



第1図 中山遺跡, 福原打越塚群周辺遺跡位置図

(図中の●は古墳(群), ▲は塚, ■は城館を示す。)

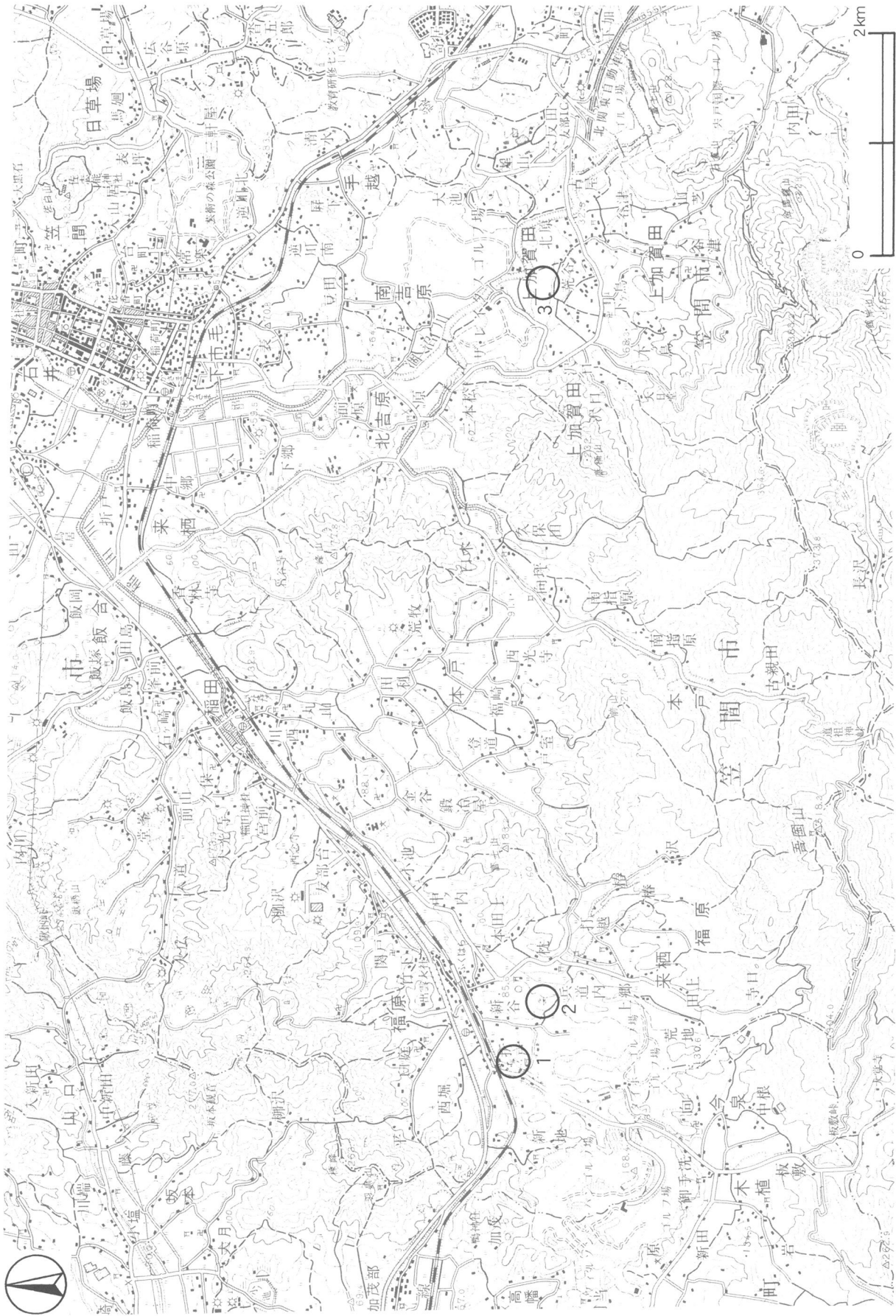


第2図 上加賀田宮後東遺跡周辺遺跡位置図

(図中の●は古墳(群), ▲は塚, ■は城館を示す。)

表1 中山遺跡，福原打越塚群，上加賀田宮後東遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世
①	中山遺跡		○			○	○	○	38	蔵後遺跡		○	○	○	○		
②	福原打越塚群							○	39	石崎遺跡	○	○			○		
③	上加賀田宮後東遺跡			○		○	○	○	40	向原遺跡					○	○	
4	諏訪古墳				○				41	大日後遺跡		○			○	○	
5	西沢古墳				○				42	本戸宮前遺跡		○			○		
6	羽黒山城跡							○	43	谷中遺跡					○	○	
7	棟峯城跡							○	44	木根平遺跡		○					
8	加茂遺跡		○	○	○				45	蟹沢遺跡		○					
9	加茂B古墳群				○				46	上ノ台遺跡		○			○		
10	木植古墳群				○				47	古坪遺跡		○			○		
11	福原城跡							○	48	尚塚原遺跡		○		○	○		
12	福原原遺跡		○			○			49	添川遺跡		○			○		
13	表遺跡		○			○			50	添川古墳				○			
14	稲田城跡							○	51	滝沢塚群							○
15	白石南遺跡							○	52	上坏遺跡				○	○		
16	白石塚							○	53	川東遺跡		○			○		
17	榎畑遺跡				○				54	麓城跡							○
18	大塚古墳				○				55	愛宕台遺跡		○					
19	森川遺跡		○						56	大石邸跡							○
20	峰前遺跡		○			○			57	笠間城主下屋敷跡							○
21	高坂遺跡					○			58	時習館跡							○
22	中野古墳群				○				59	鍛冶屋遺跡					○		
23	中野遺跡		○						60	竹ノ内遺跡				○			
24	上ノ平古墳群				○				61	鍛冶倉遺跡		○			○		
25	飯合宮前遺跡				○				62	向山遺跡		○					
26	飯岡館跡							○	63	天王塚							○
27	石井遺跡群		○	○	○	○			64	荒地前塚							○
28	十二書遺跡			○	○	○			65	下市毛逆川北遺跡							○
29	谷原遺跡					○	○	○	66	下市毛逆川遺跡					○		
30	稻荷古墳群				○				67	入台遺跡		○			○		
31	由池遺跡					○			68	久保遺跡					○		
32	鍛冶内遺跡		○						69	近藤峰遺跡		○			○		
33	鍛冶内古墳群				○				70	大平遺跡		○			○		
34	本戸城跡	○	○			○	○		71	荒谷北遺跡					○		
35	荒牧遺跡群			○		○	○		72	荒谷遺跡		○					
36	本戸堀ノ内遺跡					○			73	上加賀田宮後西A・B遺跡							
37	手越原遺跡		○			○						○					



第3図 中山遺跡、福原打越塚群、上加賀田宮後東遺跡位置図

第3章 中山遺跡

第1節 遺跡の概要

中山遺跡は、笠間市の南西部に位置し、吾国山から北西に延びる標高90m前後の丘陵性の台地上に立地している。調査面積は1,850.58㎡で、調査前の現況は山林であった。

今回の調査では、縄文時代早期後半から前期後半にかけての竪穴住居跡1軒、陥し穴6基、土坑8基、古墳時代中期の土坑1基、さらに、時期不明の土坑29基も確認された。住居跡と土坑は、調査区のほぼ中央部に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地していた。陥し穴は、主に調査区南部から西部にかけて位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面および緩斜面に立地していた。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に2箱出土している。縄文時代の遺物は、縄文土器片(深鉢)、石器(石鎌・石匙・凹石・石皿・剥片)である。古墳時代の遺物は、土師器片(埴・甕)、須恵器片(甕)である。

このように、当遺跡は縄文時代には狩猟場と集落の一部として、また、古墳時代にも生活の場として利用されていたことが確認され、縄文時代と古墳時代の複合遺跡であることが明らかになった。

第2節 基本層序

調査区北側中央部(J 4 i3区)に深さ約2mのテストピットを設定して、基本土層の観察を行った。(第4図)

第1層 褐色の表土層で、腐植土が混じる。層厚は20~40cmである。

第2層 灰褐色の旧表土層で、ローム粒子を少量含む。層厚は10~28cmである。

第3層 褐色のソフトローム層で、砂粒と軽石粒子を極微量含む。粘性と締まりはともに強い。層厚は5~15cmである。

第4層 褐色のハードローム漸移層で、軽石粒子を少量含む。粘性と締まりは強い。層厚は15~45cmである。

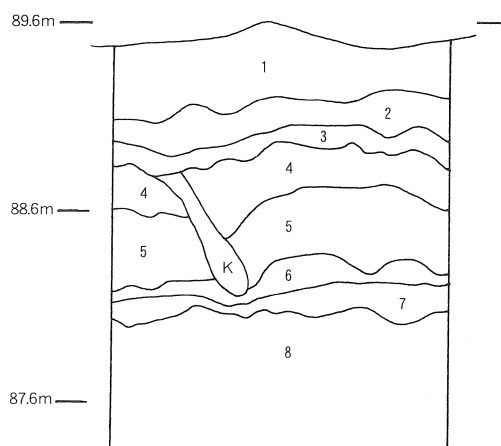
第5層 黄褐色のハードローム層で、赤色粒子を微量含む。粘性と締まりはともに強い。層厚は30~45cmである。

第6層 橙色のハードローム層で、鹿沼パミスを中量含む、鹿沼軽石層の漸移層と考えられる。粘性と締まりはともに強い。層厚は12~32cmである。

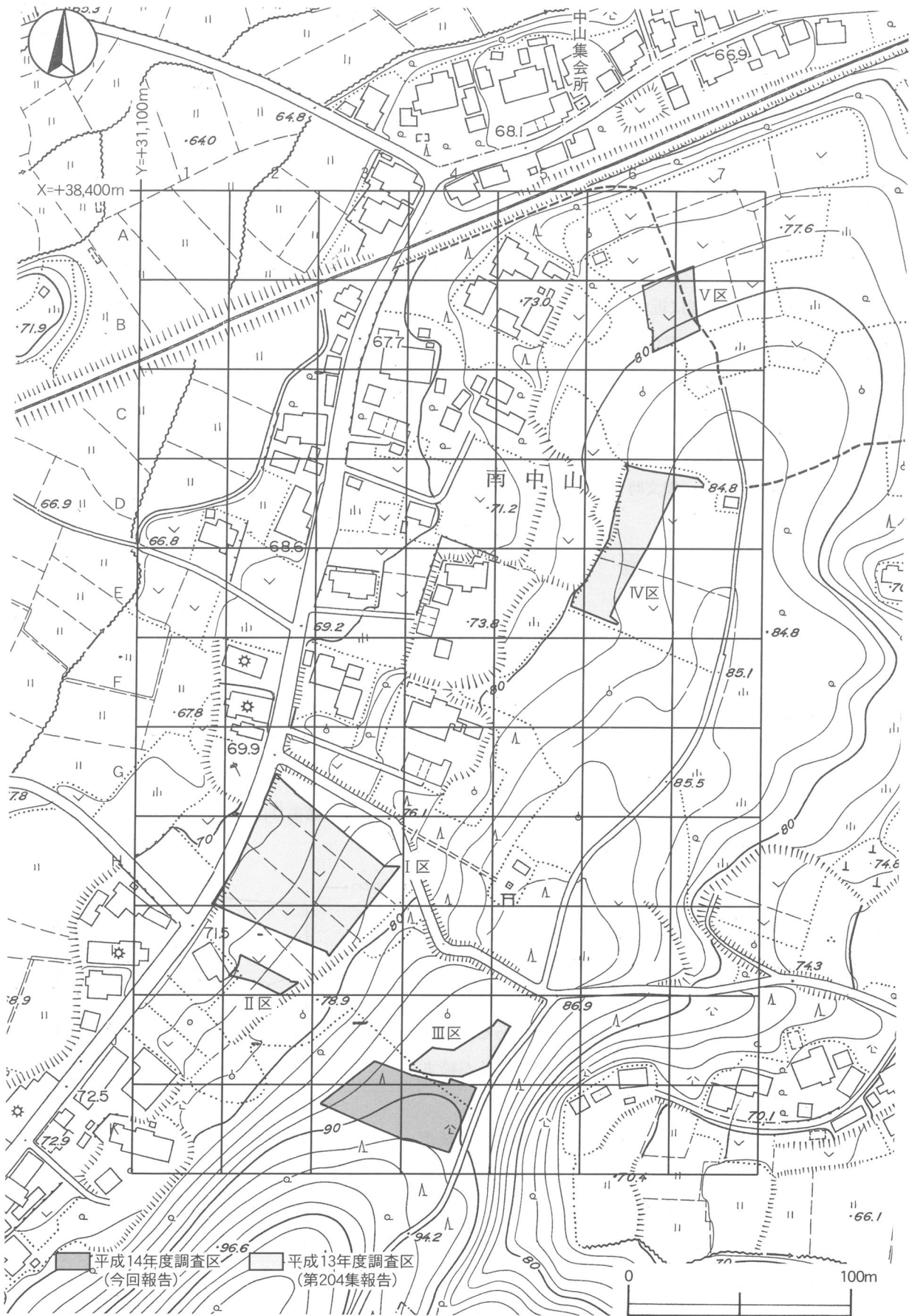
第7層 黄橙色の鹿沼軽石層である。粘性を欠くが締まりは極めて強い。層厚は36~60cmである。

第8層 にぶい褐色のハードローム層で、砂粒を微量含む。粘性と締まりはともに極めて強い。以下、未掘のため本来の層厚は不明である。

遺構の多くは、第3層から第4層上面で確認され、第3層から第6層を掘り込んでいる。



第4図 基本土層図



第5図 中山遺跡調査区設定図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で、竪穴住居跡1軒、陥し穴6基、土坑8基が確認された。住居跡と土坑は、調査区のほぼ中央部に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地していた。陥し穴は、主に調査区南部から西部にかけて位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面および緩斜面に立地していた。以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡(第6図)

位置 調査区中央部のK4a3区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

重複関係 南西部の壁と床の一部を、第33号土坑に掘り込まれている。南東側の一部は、攪乱を受けている。

規模と形状 南東側の壁は遺存していないが、長径4.95m、短径3.58mの楕円形と考えられる。長径をもとにした主軸方向は、N-35°-Eである。壁は外傾して立ち上がり、確認された壁高は5~10cmである。

床 南東側から北西側に向かって緩やかに傾斜している。柱穴と考えられるピットに囲まれた内側に、部分的に硬化面が確認された。

炉 確認されなかった。

ピット 8か所。P1~P7は深さ10~35cmで、その規模と配置から支柱穴と考えられる。また、P8は深さ12cmで、P6に沿った位置に存在することから補助柱穴と考えられる。

P1~P8土層解説

1 褐色	ローム粒子中量	3 にぶい褐色	ロームブロック多量
2 褐色	ロームブロック中量	4 灰褐色	ロームブロック少量

覆土 5層に分層される。全体的に褐色土を基調とし、粘性としまりは強い。壁際から中央部に向かってレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と考えられる。

土層解説

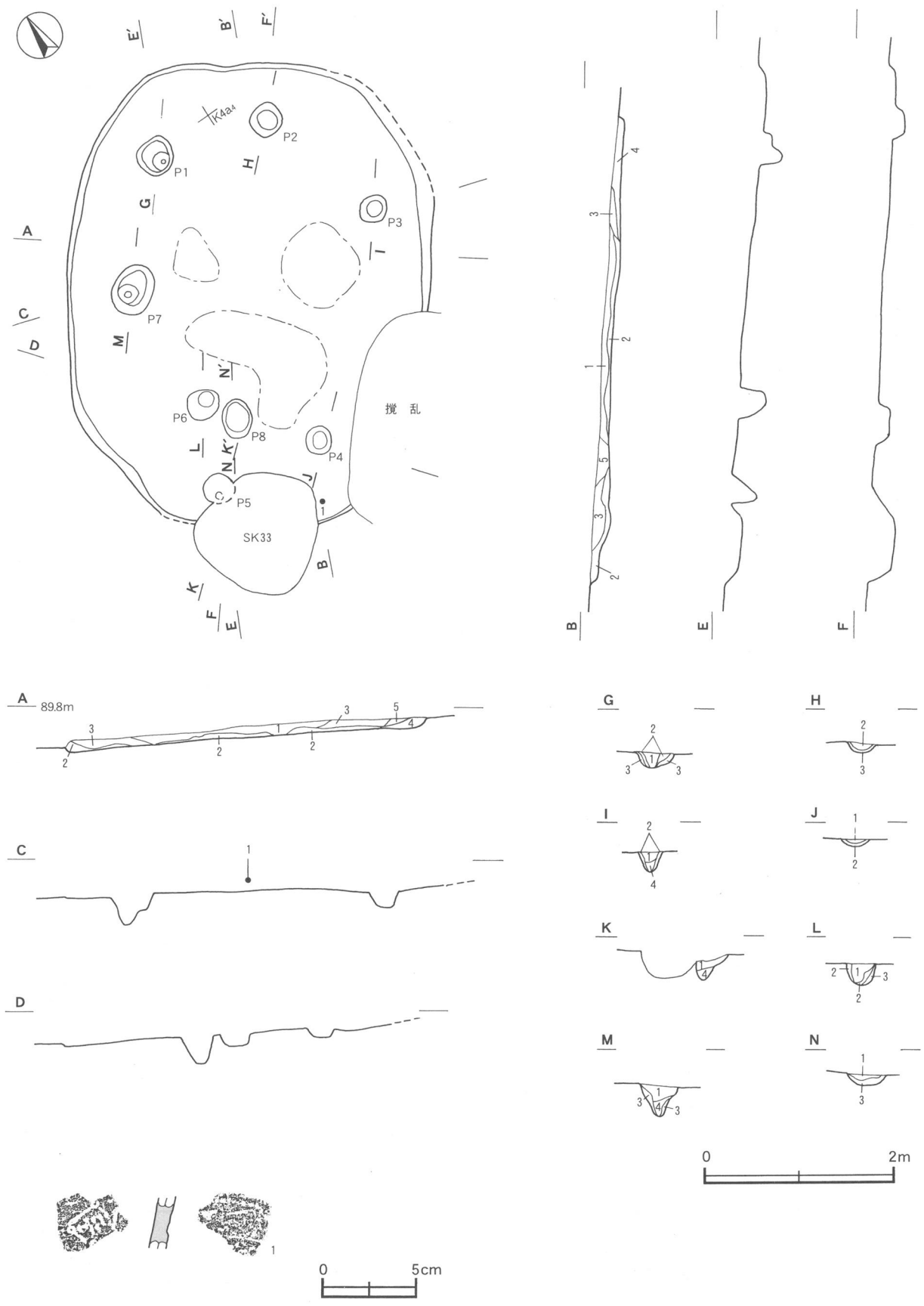
1 褐色	ローム粒子少量	4 褐色	ローム粒子中量
2 褐色	ロームブロック中量	5 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
3 灰褐色	ロームブロック少量		

遺物出土状況 縄文土器片1点(胴部片)、剥片3点と混入と考えられる土師器片3点が出土している。遺物はわずかで、第6図1も細片であり、南東部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態と、周辺に分布する土坑と合わせて判断すると、縄文時代早期後半と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表(第6図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	石英・繊維	にぶい橙	普通	菱形の沈線区画と円形刺突で文様構成。区画内貝殻腹縁文施文。裏面条痕文。	南東部覆土下層	TP1 PL4



第6図 第1号住居跡・出土遺物実測図

(2) 陥し穴

第1号陥し穴 (SK1) (第7図)

位置 調査区西部のK3b4区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北西向き斜面に立地している。

規模と形状 長径0.96m, 短径0.78mの不整楕円形で、深さは104cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。短径方向の断面形はU字状を呈している。底面の中央部には、逆茂木を立てたと考えられる深さ19cmのピットが1か所検出された。長径方向はN-76°-Eである。

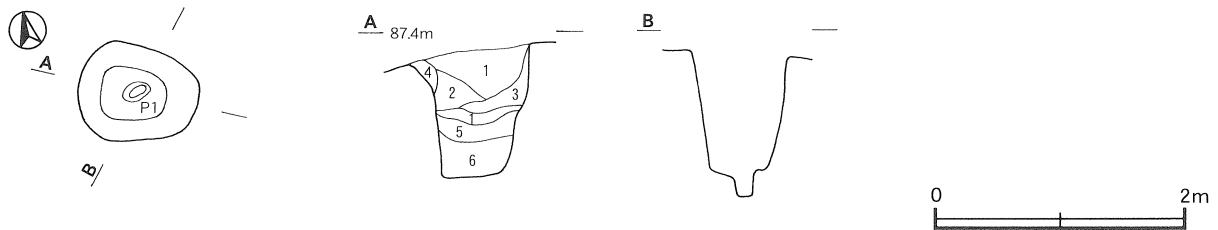
覆土 6層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 4 灰褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック微量 | 5 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量 | 6 暗褐色 ローム粒子中量 |

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



第7図 第1号陥し穴実測図

第2号陥し穴 (SK12) (第8図)

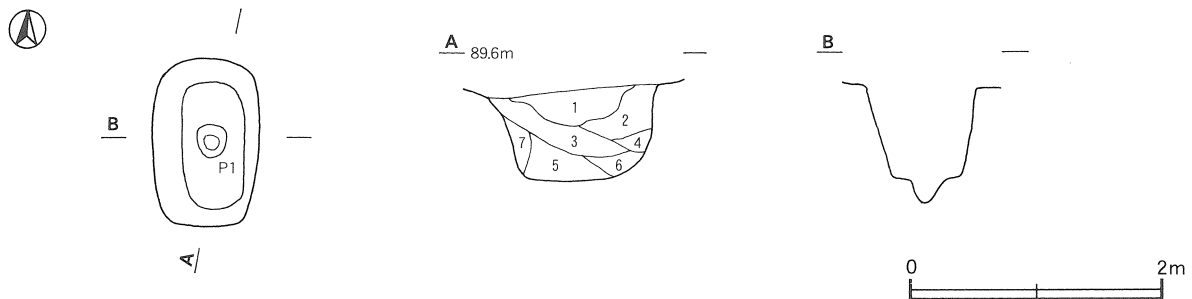
位置 調査区南部のK3c8区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北西向き緩斜面に立地している。

規模と形状 長軸1.32m, 短軸0.86mの隅丸長方形で、深さは76cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。短軸方向の断面形はU字状を呈している。底面の中央部には、逆茂木を立てたと考えられる深さ17cmのピットが1か所検出された。長軸方向はN-2°-Wである。

覆土 7層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子極微量 | 5 黒褐色 ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量 | 6 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック中量 | 7 褐色 ローム粒子多量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック少量 | |



第8図 第2号陥し穴実測図

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。

第3号陥し穴 (SK13) (第9図)

位置 調査区南部のK3c9区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北西向き緩斜面に立地している。

規模と形状 長径1.62m、短径0.96mの長楕円形で、深さは98cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。

短径方向の断面形はU字状を呈している。長径方向はN-53°-Wである。

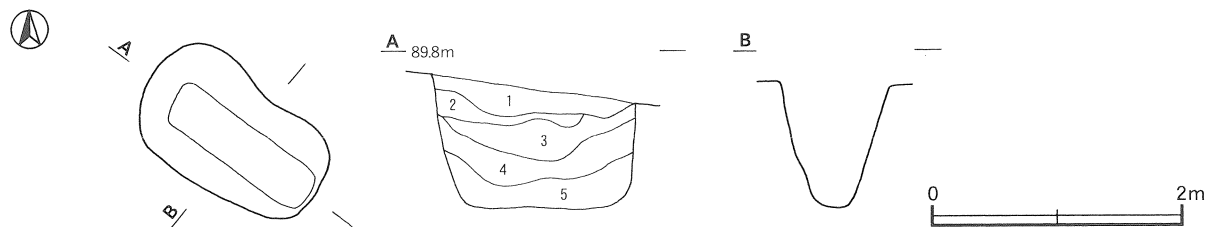
覆土 5層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|------|-------------------|------|------------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子少量、焼土粒子極微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子極微量 | 5 褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス中量、炭化粒子少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



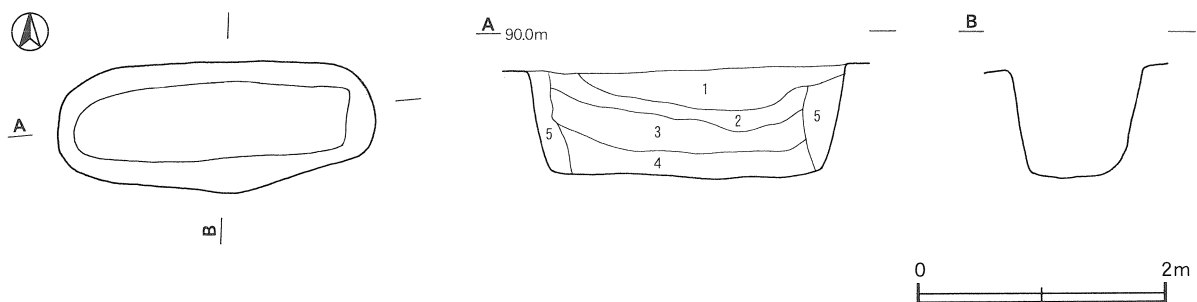
第9図 第3号陥し穴実測図

第4号陥し穴 (SK14) (第10図)

位置 調査区中央部のK4c1区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

規模と形状 長径2.58m、短径1.06mの楕円形で、深さは88cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。

短径方向の断面形は逆台形状を呈している。長径方向はN-85°-Eである。



第10図 第4号陥し穴実測図

覆土 5層に分層される。第5層は壁際からの崩落土と考えられ、第1～4層がレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|---------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量, 焼土粒子極微量 | 4 灰褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子極微量 | 5 にぶい褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子極微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。

第5号陥し穴 (SK25) (第11図)

位置 調査区中央部のK4b2区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

規模と形状 長軸1.54m, 短軸0.83mの隅丸長方形で、深さは80cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。短軸方向の断面形はU字状を呈している。長軸方向はN-84°-Wである。

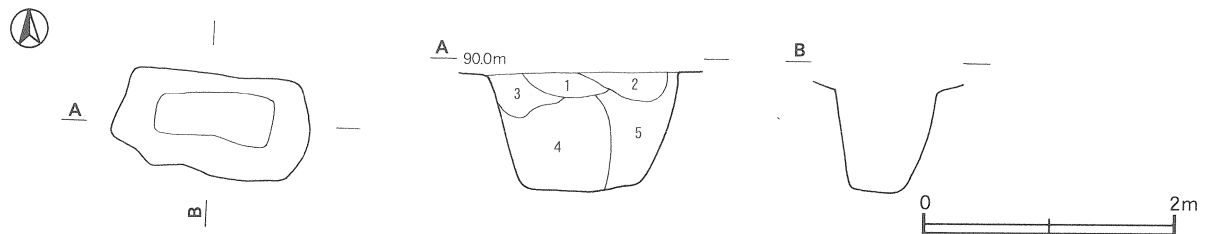
覆土 5層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 |
| 3 褐色 | 炭化粒子少量, ロームブロック微量 | | |

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



第11図 第5号陥し穴実測図

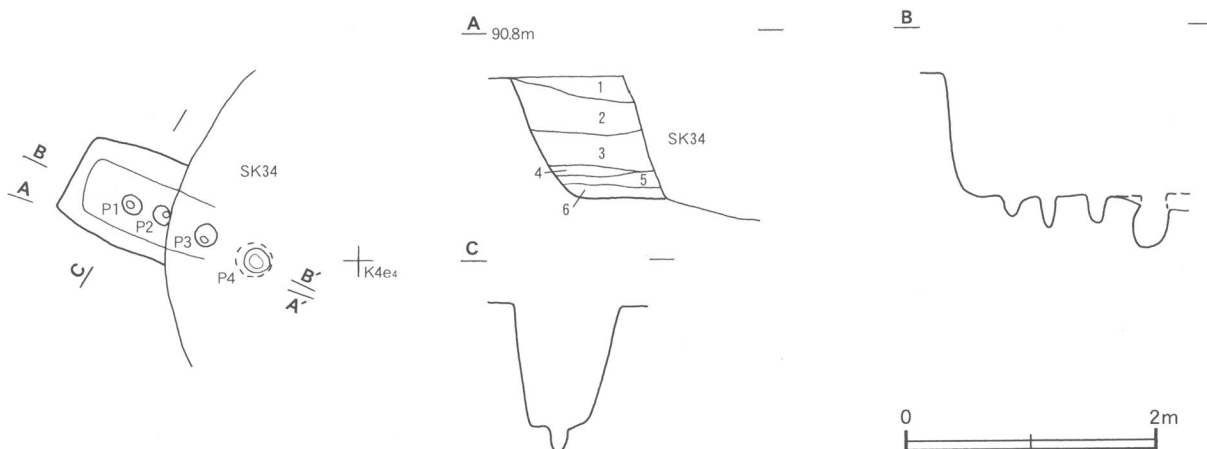
第6号陥し穴 (SK44) (第12図)

位置 調査区南部のK4d3区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

重複関係 南東側の大半を、第34号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 推定される長軸2.06m, 短軸0.80mの隅丸長方形と考えられ、深さは98cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。短軸方向の断面形はU字状を呈している。底面の中央部には、ピットが4か所検出された。

P1～P4の深さは16～28cmで、いずれも逆茂木を立てたピットと考えられる。長軸方向はN-62°-Wである。



第12図 第6号陥し穴実測図

覆土 6層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量 | 4 褐色 ロームブロック・鹿沼パミス中量 |
| 2 褐色 ロームブロック少量 | 5 褐色 鹿沼パミス中量, ローム粒子少量 |
| 3 にぶい褐色 ロームブロック中量 | 6 黄褐色 鹿沼パミス多量, ローム粒子中量 |

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。

(3) 土 坑

第20号土坑 (第13図)

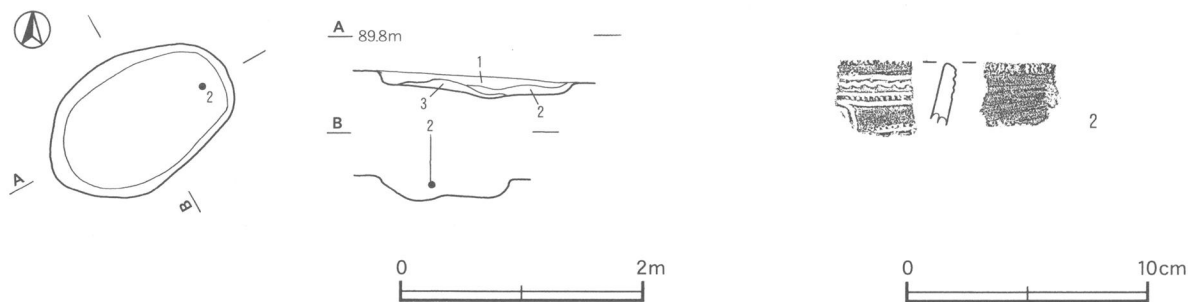
位置 調査区中央部のK 4 a5 区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

規模と形状 長径1.64m、短径1.09mの楕円形で、深さは15~20cmである。壁は外傾して立ち上がり、底面はわずかに凹凸が見られる。長径方向はN-60°-Eである。

覆土 3層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|----------------|--------------|
| 1 褐色 ローム粒子中量 | 3 褐色 ローム粒子多量 |
| 2 褐色 ロームブロック中量 | |



第13図 第20号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 第13図2の縄文土器片1点（口縁部片）が、北東部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代早期後半と考えられる。

第20号土坑出土遺物観察表(第13図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	石英・長石	灰褐	普通	口唇部貝殻腹縁文。口縁部横位の直状と波状の沈線文施文。沈線間にキザミと貝殻腹縁文施文。	北東部覆土中層	TP2 PL4

第23号土坑（第14図）

位置 調査区東部のK 4 b5 区に位置し、丘陵性台地の尾根部平坦面に立地している。

規模と形状 長径2.00m、短径1.18mの楕円形で、深さは25cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は北東側から南西側に向かって傾斜している。長径方向はN-64°-Eである。

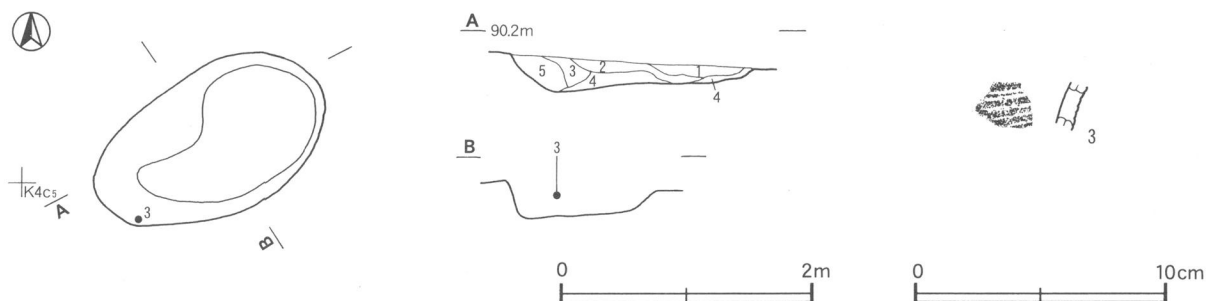
覆土 5層に分層される。各層に炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子微量、炭化粒子極微量 | 4 明褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子極微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量、焼土粒子極微量 | 5 褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子極微量 | | |

遺物出土状況 第14図3の縄文土器片1点（胴部片）と剥片3点が、南西部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代前期後半と考えられる。



第14図 第23号土坑・出土遺物実測図

第23号土坑出土遺物観察表(第14図)

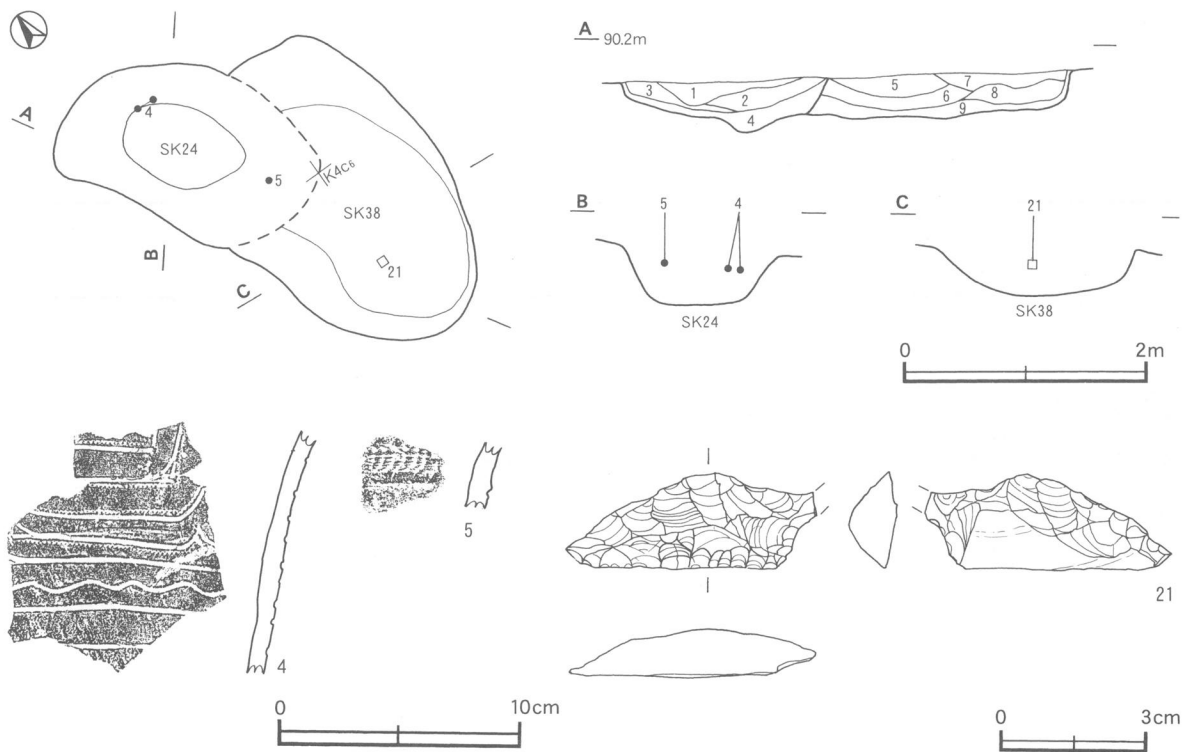
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい黄橙	普通	条線状の平行沈線文施文。	南西部覆土中層	TP3

第24号土坑（第15図）

位置 調査区東部のK 4 b5 区に位置し、丘陵性台地の尾根部平坦面に立地している。

重複関係 南東側は、第38号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 推定される長径2.07m、短径1.22mの不整楕円形で、深さは46cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は平坦である。長径方向はN-32°-Wである。



第15図 第24・38号土坑・出土遺物実測図

覆土 4層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子極微量 | 3 褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量 | 4 灰褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 縄文土器片4点(胴部片)が出土している。第15図4は北西部の覆土中層から、5は南東部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代早期後半と考えられる。

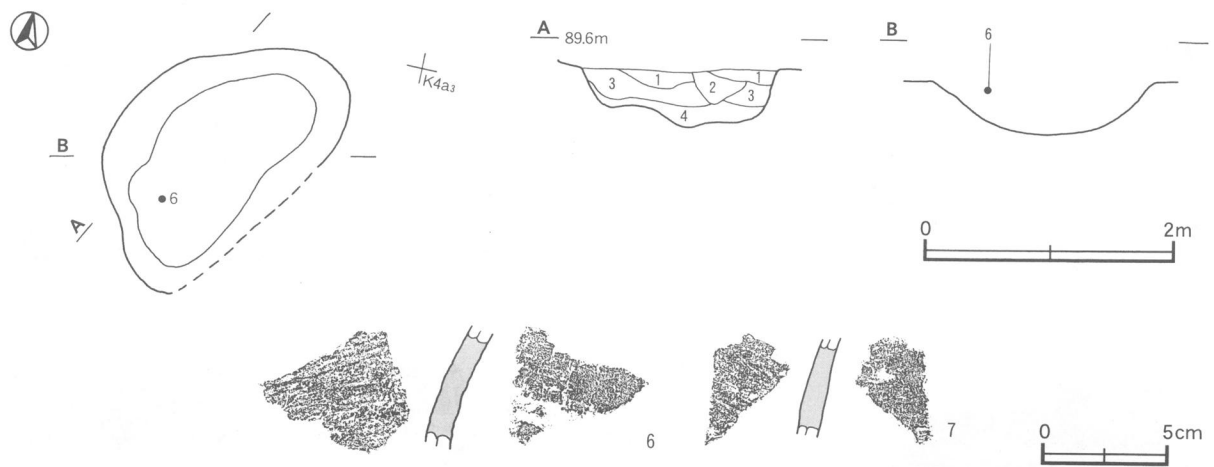
第24号土坑出土遺物観察表(第15図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい黄橙	普通	沈線による杵状の文様と横位の波状文施文。沈線に沿って貝殻腹縁文施文。	北部覆土中層	TP4 PL4
5	縄文土器	深鉢	石英・長石	橙	普通	貝殻腹縁利用の爪形文施文。	南東部覆土中層	TP5

第28号土坑(第16図)

位置 調査区中央部のK 4 a2 区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

規模と形状 長径2.12m、短径1.46mの楕円形で、深さは42cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は皿状を呈している。長径方向はN-50°-Eである。



第16図 第28号土坑・出土遺物実測図

覆土 4層に分層される。炭化粒子を含む層が多く、ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子少量，ローム粒子微量 | 3 褐色 ロームブロック少量，炭化粒子極微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子極微量 | 4 明褐色 ロームブロック中量 |

遺物出土状況 縄文土器片2点（胴部片）と自然礫1点が出土している。第16図6は、南西部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代早期後半と考えられる。

第28号土坑出土遺物観察表(第16図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
6	縄文土器	深鉢	石英・長石・繊維	黒褐	普通	表裏面条痕文施文。	南部覆土中層	TP6 PL4
7	縄文土器	深鉢	石英・赤色粒子・繊維	明赤褐	普通	表裏面条痕文施文。	覆土中	TP7

第32号土坑（第17図）

位置 調査区東部のK4d5区に位置し、丘陵性台地の尾根部平坦面に立地している。

規模と形状 長径2.57m，短径1.82mの楕円形で、深さは13～23cmである。壁は外傾して立ち上がり，底面はわずかに凹凸が見られる。長径方向はN-55°-Wである。

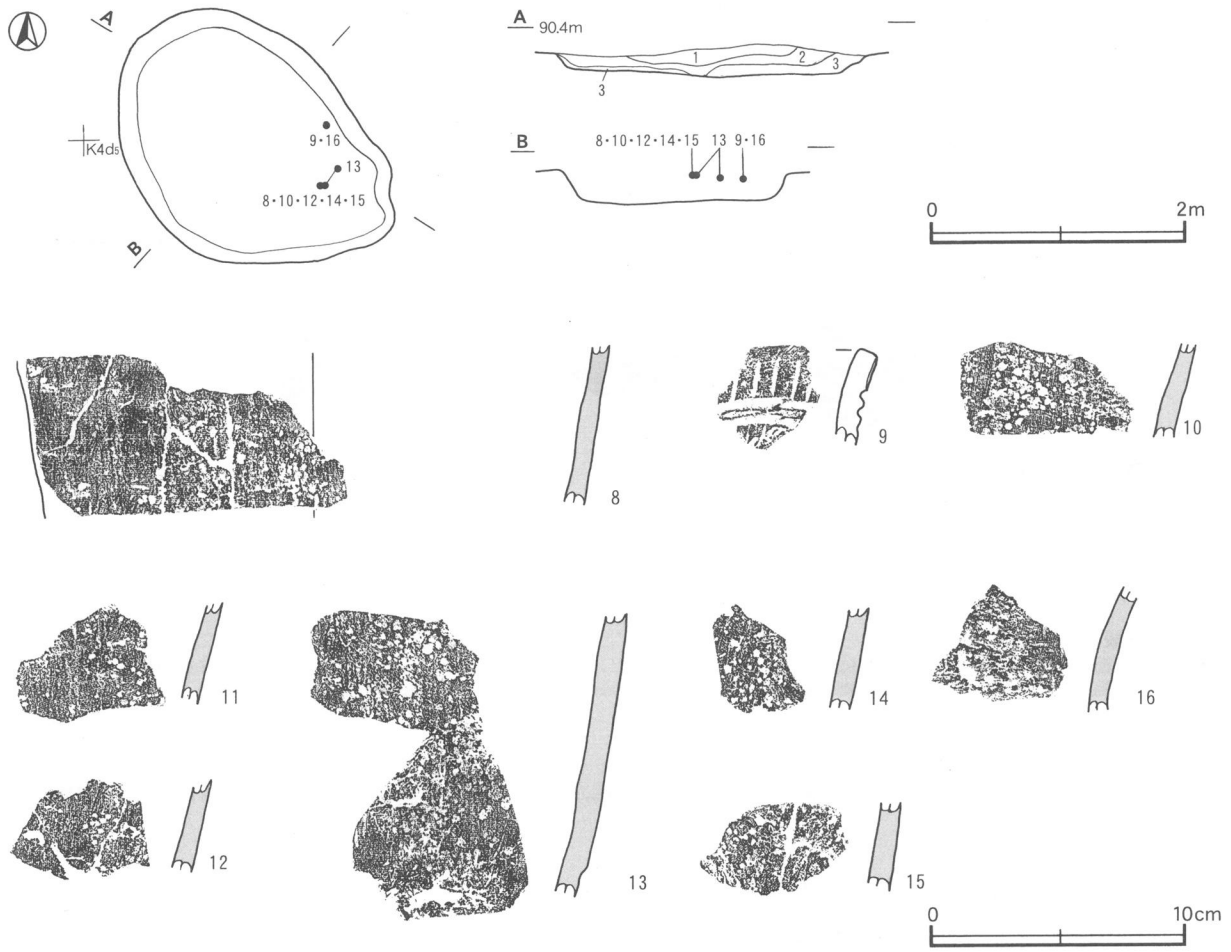
覆土 3層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|----------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 | 3 明褐色 ロームブロック少量 |
| 2 褐色 ローム粒子中量，炭化粒子極微量 | |

遺物出土状況 縄文土器片17点（口縁部片1，胴部片16）と混入と考えられる土師器片2点が出土している。また，自然礫5点が覆土中で確認された。第17図8・10・12～16は同一個体と考えられ，主に南東部に集中して覆土中層から底面にかけて出土している。

所見 時期は，出土土器から縄文時代前期前半と考えられる。



第17図 第32号土坑・出土遺物実測図

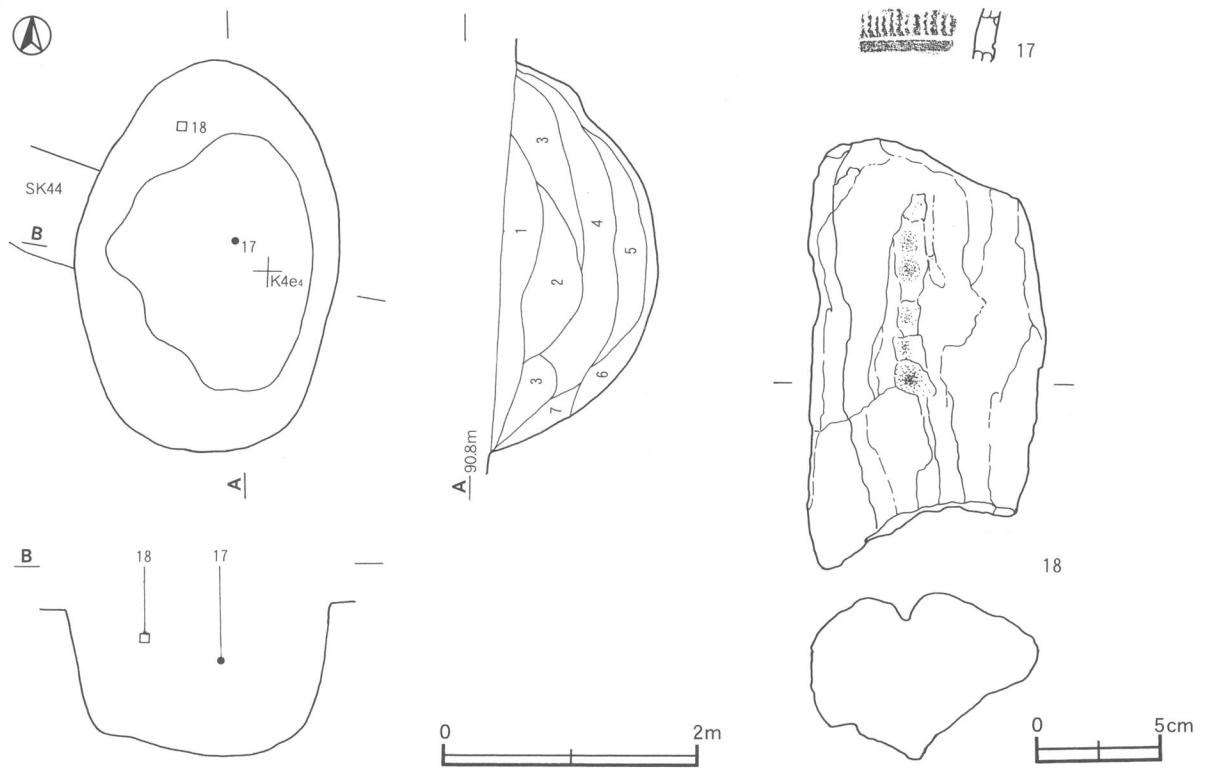
第32号土坑出土遺物観察表(第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	縄文土器	深鉢	-	(6.4)	-	石英・長石・繊維	にぶい褐	普通	無文。表裏面ミガキ。	南東部覆土中層	P8 PL4
9	縄文土器	深鉢				石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口縁部に縦位の短沈線と横位の平行沈線文施文。	北東部覆土中層	TP9 PL4
10	縄文土器	深鉢				石英・長石・繊維	明赤褐	普通	無文。表裏面ミガキ。	南東部覆土中層	TP10
11	縄文土器	深鉢				石英・長石・繊維	明赤褐	普通	無文。表裏面ミガキ。	覆土中	TP11
12	縄文土器	深鉢				石英・長石・繊維	明赤褐	普通	無文。表裏面ミガキ。	南東部覆土中層	TP12
13	縄文土器	深鉢				石英・長石・繊維	にぶい赤褐	普通	無文。表裏面ミガキ。	南東部覆土中層	TP13 PL4
14	縄文土器	深鉢				石英・長石・繊維	明赤褐	普通	無文。表裏面ミガキ。	南東部覆土中層	TP14
15	縄文土器	深鉢				石英・長石・繊維	にぶい赤褐	普通	無文。表裏面ミガキ。	南東部覆土中層	TP15
16	縄文土器	深鉢				石英・長石・繊維	にぶい赤褐	普通	無文。表裏面ミガキ。	北東部覆土中層	TP16

第34号土坑 (第18図)

位置 調査区南部のK 4 d3 区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

重複関係 西側は、第6号陥し穴を掘り込んでいる。



第18図 第34号土坑・出土遺物実測図

規模と形状 長径1.54m，短径1.05mの楕円形で，深さは50～60cmである。壁は外傾して立ち上がり，底面は皿状を呈している。長径方向はN-4°-Eである。

覆土 7層に分層される。炭化粒子を含む層が多く，ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量，炭化物微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量，鹿沼パミス少量，炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子少量，ロームブロック微量 | 6 褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 | 7 明褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量，炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 第18図17・18の縄文土器片1点（胴部片）と石器1点（凹石）が，中央部と北部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から縄文時代前期後半と考えられる。

第34号土坑出土遺物観察表(第18図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
17	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい橙	普通	横位の平行沈線文と貝殻腹縁文施文。	中央部覆土中層	TP17

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
18	凹石	(17.1)	9.4	6.6	(1,540)	凝灰岩	表面に4か所穿孔。	北部覆土中層	Q18 PL5

第36号土坑（第19図）

位置 調査区東部のK 4 d4 区に位置し、丘陵性台地の尾根部平坦面に立地している。

規模と形状 長径1.30m、短径1.16mの不整楕円形で、深さは10cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。長径方向はN-25°-Eである。

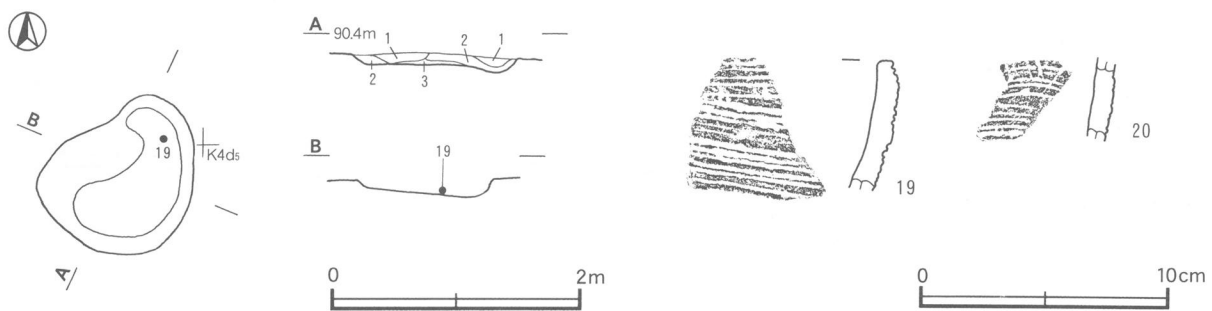
覆土 3層に分層される。各層に炭化粒子を含み、ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子極微量

遺物出土状況 縄文土器片2点（口縁部片1、胴部片1）が出土している。第19図36は、北東部の底面から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代前期後半と考えられる。



第19図 第36号土坑・出土遺物実測図

第36号土坑出土遺物観察表(第19図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
19	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい黄橙	普通	条線状の平行沈線文施文。	北東部底面	TP19 PL4
20	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい黄橙	普通	条線状の平行沈線文施文。	覆土中	TP20 PL4

第38号土坑（第15図）

位置 調査区東部のK 4 c6 区に位置し、丘陵性台地の尾根部平坦面に立地している。

重複関係 北西側は、第24号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径2.72m、短径1.70mの楕円形で、深さは40cmである。壁は外傾して立ち上がり、底面は皿状を呈している。長径方向はN-0°である。

覆土 5層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 5 灰褐色 ローム粒子中量、炭化粒子極微量
- 6 褐色 ロームブロック中量
- 7 灰褐色 ロームブロック少量
- 8 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子極微量
- 9 にぶい褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 石器1点(石匙)と剥片3点が出土している。第15図21は、中央部の覆土中層から出土している。

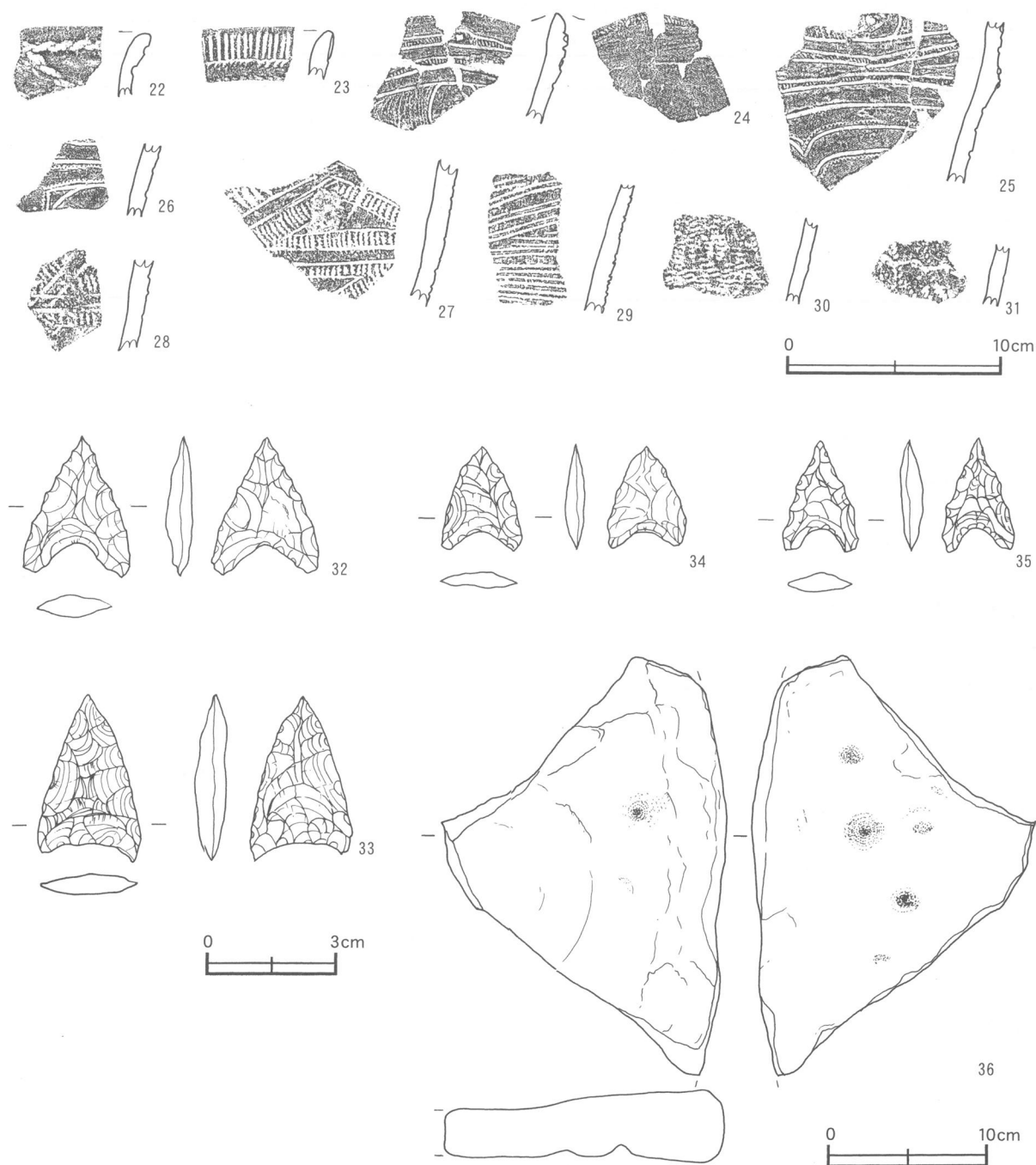
所見 出土土器がなく明確ではないが、第24号土坑に掘り込まれていることから、時期は、縄文時代早期後半以前と考えられる。

第38号土坑出土遺物観察表(第15図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
21	石匙	(5.1)	1.9	1.0	(8.4)	頁岩	横型石匙。周縁は剥離調整。つまみ部欠損。	中央部覆土中層	Q21 PL.5

(4) 遺構外出土遺物 (第20図)

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第20図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第20図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
22	縄文土器	深鉢	石英・長石	褐	普通	口唇部直下と口辺部に縄文原体押圧施文。	表土中	TP22 PL.4
23	縄文土器	深鉢	長石	褐灰	普通	口縁部に縦位の短沈線と横位の変形爪形文施文。	表土中	TP23 PL.4
24	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい黄橙	普通	波状口縁で、口唇部に貝殻腹縁文施文。口縁部に横位の沈線文と弧状の沈線区画文施文。沈線間にキザミ、沈線に沿って貝殻腹縁文施文。	表土中	TP24 PL.4
25	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい黄橙	普通	横位の沈線文と弧状の沈線区画文施文。沈線間にキザミ、沈線に沿って貝殻腹縁文施文。	表土中	TP25 PL.4
26	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい黄橙	普通	横位の沈線文と弧状の沈線区画文施文。沈線に沿って貝殻腹縁文施文。	表土中	TP26
27	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい黄褐	普通	平行沈線文による区画後、区画内に貝殻腹縁文充填。	表土中	TP27 PL.4
28	縄文土器	深鉢	長石	にぶい黄褐	普通	平行沈線文による区画後、区画内に貝殻腹縁文充填。	表土中	TP28
29	縄文土器	深鉢	石英・長石	明褐	普通	条線状の平行沈線文施文。	表土中	TP29 PL.4
30	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい黄橙	普通	横位に貝殻腹縁を利用した爪形文充填。	表土中	TP30
31	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい橙	普通	燃糸文と結節文施文。	表土中	TP31

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
32	石鏃	2.2	1.7	0.4	0.92	チャート	凹基無茎鏃。両面剥離調整。基部の抉りは深い。	表土中	Q32 PL.5
33	石鏃	2.6	1.6	0.4	1.52	黒曜石	凹基無茎鏃。両面剥離調整。基部の抉りは浅い。	表土中	Q33 PL.5
34	石鏃	1.6	1.2	0.4	0.43	黒曜石	凹基無茎鏃。両面剥離調整。基部の抉りは浅い。	表土中	Q34 PL.5
35	石鏃	1.7	1.3	0.4	0.52	チャート	凹基無茎鏃。両面剥離調整。基部の抉りは深い。	表土中	Q35 PL.5
36	石皿 (凹石)	(26.3)	(17.7)	4.5	(2,330)	花崗岩	表面に2か所、裏面に5か所穿孔。	表土中	Q36 PL.5

2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、土坑1基が確認された。以下、遺構と出土遺物について記述する。

(1) 土坑

第43号土坑(第21図)

位置 調査区南東部のK4f5区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

重複関係 西側は、第42号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径3.73m、短径1.76mの不整楕円形で、深さは28～34cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は皿状を呈している。長径方向はN-83°-Wである。

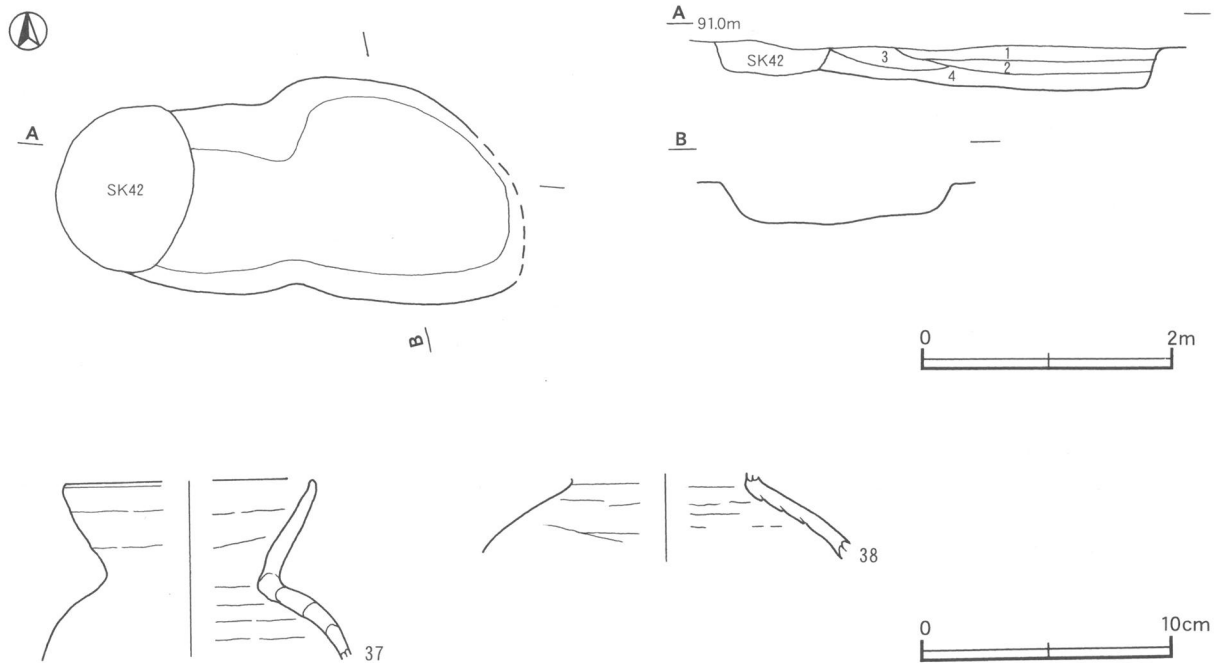
覆土 4層に分層される。水平およびブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|------|-----------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量 | 3 褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 灰褐色 | ロームブロック少量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片4点(埴)が出土している。第21図37・38は、破損した状態で覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から古墳時代中期と考えられる。



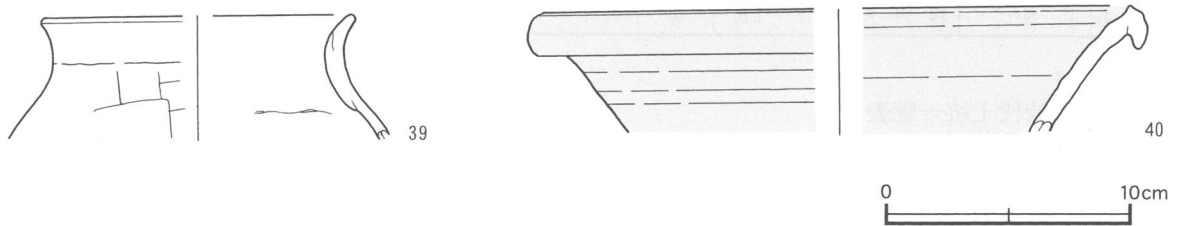
第21図 第43号土坑・出土遺物実測図

第43号土坑出土遺物観察表(第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
37	土師器	埴	[10.0]	(7.2)	-	赤色粒子・雲母	橙	普通	口縁部外面横ナデ。体部外面，口縁部内面ヘラナデ。体部内面輪積痕。	覆土中	P37 PL.5 30%
38	土師器	埴	-	(3.4)	-	石英・長石	橙	普通	体部外面ヘラナデ。体部内面輪積痕。	覆土中	P38 5%

(2) 遺構外出土遺物 (第22図)

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第22図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
39	土師器	甕	[12.8]	(5.1)	-	石英・長石・赤色粒子	こぶい赤褐	普通	口縁部外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	表土中	P39 5%
40	須恵器	甕	[24.0]	(5.2)	-	長石	黒	普通	口縁部内・外面横ナデ。内・外面自然釉。	表土中	P40 5%

3 その他の遺構

今回の調査で、時期および性格不明の土坑29基が確認された。一覧表で掲載し、平面図については全体図（第23図）で示すことにする。

表2 縄文時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係(旧→新), その他
				長軸径×短軸径(m)	壁高(cm)			主柱	貯蔵穴	ピット	出入口	扉				
1	K4a3	N-35°-E	楕円形	4.95 × 3.58	5~10	緩斜	-	7	-	1	-	-	自然	縄文土器片(深鉢)	早期後半	本跡→SK33

表3 陥し穴一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	ピット	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新), その他
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)						
1	K3b4	N-76°-E	不整楕円形	0.96 × 0.78	104	直立	平坦	人為	1	-	(SK1)
2	K3c8	N-2°-W	隅丸長方形	1.32 × 0.86	76	直立	平坦	人為	1	-	(SK12)
3	K3c9	N-53°-W	長楕円形	1.62 × 0.96	98	直立	平坦	自然	-	-	(SK13)
4	K4c1	N-85°-E	楕円形	2.58 × 1.06	88	直立	平坦	自然	-	-	(SK14)
5	K4b2	N-84°-W	隅丸長方形	1.54 × 0.83	80	直立	平坦	人為	-	-	(SK25)
6	K4d3	N-62°-W	[隅丸長方形]	[2.06]×0.80	98	直立	平坦	自然	4	-	本跡→SK34 (SK44)

表4 縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	ピット	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新), その他
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)						
20	K4a5	N-60°-E	楕円形	1.64 × 1.09	15~20	外傾	凹凸	自然	-	縄文土器片	
23	K4b5	N-64°-E	楕円形	2.00 × 1.18	25	外傾	緩斜	人為	-	縄文土器, 剥片	
24	K4b5	N-32°-W	不整楕円形	[2.07]×1.22	46	外傾	平坦	自然	-	縄文土器片	SK38→本跡
28	K4a2	N-50°-E	楕円形	2.12 × 1.46	42	緩斜	皿状	人為	-	縄文土器片, 礫	
32	K4d5	N-55°-W	楕円形	2.57 × 1.82	13~23	外傾	凹凸	自然	-	縄文土器片, 礫	
34	K4d3	N-4°-E	楕円形	1.54 × 1.05	50~60	外傾	平坦	人為	-	縄文土器片, 凹石	SK44→本跡
36	K4d4	N-25°-E	不整楕円形	1.30 × 1.16	10	外傾	平坦	人為	-	縄文土器片	
38	K4c6	N-0°	楕円形	2.72 × 1.70	40	緩斜	皿状	人為	-	石匙, 剥片	本跡→SK24

表5 古墳時代土坑一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	ピット	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新), その他
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)						
43	K4f5	N-83°-W	不整楕円形	3.73 × 1.76	28~34	緩斜	皿状	人為	-	土師器片(埴)	本跡→SK42

表6 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	ピット	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新), その他
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)						
2	K3b3	N-71-E	不整楕円形	1.97 × 1.08	13~25	緩斜	凹凸	自然	-	-	
3	K3a3	N-58-E	[楕円形]	2.68 × [1.20]	24~28	緩斜	平坦	自然	-	-	
4	J3j8	N-78-E	楕円形	1.87 × 0.68	24	緩斜	皿状	自然	-	-	
5	K3a5	N-0°	楕円形	2.00 × 0.91	18	緩斜	皿状	自然	-	-	
6	K3a6	N-60-W	楕円形	2.78 × 1.42	8~14	緩斜	平坦	自然	-	-	
7	K3a7	N-52-W	楕円形	2.32 × 1.17	12~17	緩斜	平坦	自然	-	-	
8	K3a8	N-52-E	不整楕円形	2.63 × 1.61	9~40	緩斜	凹凸	人為	-	-	
9	J3j9	N-70-W	不整形	1.38 × 0.86	30	緩斜	皿状	自然	-	-	
10	J3j0	N-65-E	不整形	1.10 × 0.74	11~21	緩斜	平坦	自然	-	-	
11	J4h0	N-57-W	不整楕円形	2.48 × 1.04	15~51	外傾	平坦	人為	-	-	
15	K4b2	N-17-W	不整楕円形	2.32 × 1.05	25	緩斜	皿状	自然	-	-	SK27→本跡
16	J4i4	N-65-W	楕円形	1.52 × 0.85	22~66	緩斜	皿状	人為	-	-	
17	J4i5	N-50-E	楕円形	1.28 × 0.98	9~24	緩斜	皿状	人為	-	-	
18	J4j4	N-28-E	楕円形	1.08 × 0.85	18~48	外傾	凹凸	自然	-	-	
19	J4j5	N-48-E	楕円形	1.93 × 1.18	14~24	緩斜	平坦	自然	-	-	
21	K4b4	N-34-W	楕円形	1.69 × 1.14	25	緩斜	平坦	自然	-	-	SK22・39と重複
22	K4b4	N-37-W	楕円形	1.27 × 0.98	40	緩斜	皿状	自然	-	-	SK21・39と重複
26	J4j2	N-62-W	不整形	1.87 × 1.43	28~38	緩斜	皿状	自然	-	-	
27	K4b2	N-90-E	楕円形	1.87 × 1.15	28~32	緩斜	平坦	自然	-	-	本跡→SK15
29	J4a7	N-90-E	楕円形	1.63 × 1.20	42	緩斜	皿状	人為	-	-	
30	K4a7	N-40-E	不整楕円形	2.68 × 1.18	24	緩斜	平坦	自然	-	-	
31	K4a7	N-76-W	楕円形	1.40 × 1.04	18	緩斜	平坦	人為	-	-	
33	K4a3	N-80-E	不整形	1.32 × 1.23	28~38	緩斜	平坦	自然	-	-	
35	K4e4	N-90-E	楕円形	2.98 × 1.68	28~30	緩斜	皿状	自然	-	-	
37	K4e5	N-90-E	楕円形	1.26 × 0.53	15	緩斜	皿状	自然	-	-	
39	K4b4	N-20-W	隅丸長方形	1.95 × 1.25	18~20	緩斜	平坦	自然	-	-	SK41→本跡
40	K4a4	N-10-E	不整形	1.43 × 1.25	25~30	緩斜	平坦	自然	-	-	
41	K4c4	N-43-E	隅丸長方形	2.60 × 1.18	40	緩斜	皿状	自然	-	-	本跡→SK39
42	K4f5	N-7-W	楕円形	1.30 × 1.03	19~27	緩斜	平坦	自然	-	-	SK43→本跡

第4節 ま と め

今回の調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡1軒、陥し穴6基、土坑8基、古墳時代の土坑1基、時期不明の土坑29基が確認された。当遺跡の一部は、すでに平成13年度に当財団がⅠ～Ⅴ区の調査区を設定して一部発掘調査を実施している¹⁾。今回の調査区は、第5図に示したように、Ⅲ区に隣接する位置に当たる。これまでの調査結果を含めると、当遺跡は縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが明らかになった。ここでは、確認された遺構と遺物の主体をなす縄文時代について概要を述べ、まとめたい。

1 縄文時代の遺構について

確認された縄文時代の遺構のうち、竪穴住居跡は1軒である。平面形は楕円形で、ピットは8か所確認されたが、炉は確認されなかった。時期は遺物がほとんどないため明確ではないが、周辺に散布していた土器や土坑の分布などから、鶺鴒ガ島台式または茅山式などの条痕文系土器を有する早期後半と考えられる。周辺遺跡の

ほぼ同時期の住居跡としては、友部町東平遺跡²⁾で1軒、同町石山神遺跡³⁾で5軒確認されている。当遺跡の住居跡分布や集落構成は明確でないが、尾根部平坦面を中心にさらに広がっているものと推定される。

土坑のうち、形状と規模から陥し穴と推定される遺構は、6基が確認された。開口部の形状は、楕円形または隅丸長方形で、深さは76～104cmであった。すべて壁面は直立しており、短径または短軸方向の断面形は、U字状または逆台形状を呈していた。さらに、6基のうち3基の底面には、逆茂木を立てたと考えられるピットが検出された。これらの陥し穴の分布が、対の配置あるいは列状の配置⁴⁾となっていたのかなどを捉えることは、調査区域が限定されるため困難であった。しかし、いずれも標高88～91mの範囲内で、丘陵性台地の尾根部に近い緩斜面に立地していた。また、構築方法を見ると、長径あるいは長軸方向を等高線に対して直交させているものが多い。捕獲の対象となった動物の通り道などを想定したものと考えられる。これらの陥し穴からの遺物はほとんどないため、時期の特定は困難であるが、前述の石山神遺跡や東平遺跡、岩瀬町松田古墳群⁵⁾など、周辺地域で調査されている例と比較すると、立地や構築状況、規模や形状が類似していることから、概ね早期後半から前期後半の時期と考えられる。さらに、陥し穴が確認された周辺の遺跡として、笠間市小組遺跡、向原遺跡⁶⁾、岩瀬町高幡遺跡⁷⁾などが挙げられる。

今回の調査区では住居跡と陥し穴などを確認したが、周辺遺跡の調査結果も含めて捉えると、吾国山北麓一帯の丘陵性台地上には陥し穴を構築した狩猟場が広く分布し、土地利用の様子をうかがうことができる。

2 縄文時代の遺物について

縄文時代の遺物は、縄文土器（深鉢）と石器（石鏃・石匙・凹石・石皿）などが出土している。これらの遺物は、遺構の覆土中および遺構確認時の表土中から出土したものが大半である。平成13年度の当財団調査によって出土した遺物を調査区別に見た場合、隣接のⅢ区から最も多く縄文土器と石器（石鏃）が出土している⁸⁾。出土した縄文土器を時期と土器型式にしたがって分類した結果では、早期後半の鶴ガ島台式期・広義の茅山式期、前期後半の浮島式期・興津式期、中期の加曾利E式期、後期の綱取式期・堀之内式期の土器が確認されている。

今回の調査で出土した土器も、細片がほとんどであるが、早期と前期の土器を型式別に観察した結果では、早期中葉の田戸上層式期が加わるものの、同じ様相が見られた。中期と後期の土器は確認されなかった。

石器は石鏃の他に、今回の調査で新たに石匙、凹石、石皿が確認された。狩猟具である石鏃、動物の加工具としての石匙、堅果類や根茎の加工具と考えられる凹石・石皿などは、陥し穴の存在とともに、当遺跡における縄文時代の狩猟と植物採取を中心とした、生業の一端を示していると言えよう。

- 1) 成島一也 「中山遺跡 国補緊道第14-03-620-0-051号埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第204集（財）茨城県教育財団 2003年3月
- 2) 平松孝志 「北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 寺山遺跡 東平遺跡 坂ノ上塚群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第150集（財）茨城県教育財団 1999年3月
- 3) 上野修生 「茨城県立総合教育研修センター（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書 石山神遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第62集（財）茨城県教育財団 1990年9月
- 4) 鈴木素行 「武田石高遺跡の陥穴状遺構について」『武田石高遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告』第15集 ひたちなか市教育委員会（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 1998年1月
- 5) 横倉要次 「松田古墳群 北関東自動車道（友部～水戸）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第226集（財）茨城県教育財団 2004年3月
- 6) 茨城県教育財団 「平成14年度調査遺跡の概要」『年報』22（財）茨城県教育財団 2003年6月
- 7) 6)に同じ
- 8) 1)に同じ



第23図 中山遺跡遺構全体図

第4章 福原打越塚群

第1節 遺跡の概要

福原打越塚群は、笠間市の南西部に位置し、吾国山から北西に延びる標高80m前後の丘陵性台地上に立地している。調査面積は577.0㎡で、調査前の現況は山林であった。

今回の調査では、縄文時代の竪穴住居跡2軒、奈良・平安時代の土坑1基、近世の塚4基と墓壇2基、時期不明の土坑6基と溝跡1条が確認された。竪穴住居跡は、調査区のほぼ中央部と東部に位置し、時期はいずれも縄文時代の前期と考えられる。塚は調査区の中央部を南北に走る道路に沿って、列状に並んで構築されていた。墓壇は調査区南部の丘陵性台地の尾根部に近い緩斜面上に、2基が隣接して構築されていた。また、遺構や文化層は確認されなかったが、旧石器時代の遺物も出土した。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に1箱出土している。旧石器時代の遺物は、石器(剥片)である。縄文時代の遺物は、縄文土器片(深鉢)、石器(石鏃)である。奈良・平安時代の遺物は、土師器片(坏、甕)、須恵器片(坏、高台付坏、蓋)、土製品(紡錘車)である。近世の遺物は、瓦質土器(鉢)、陶器(小皿)、金属製品(鉄釘、煙管)、古銭(寛永通寶)などである。

このように、当遺跡は近世に塚が構築されるとともに、墓域が形成されていた。また、縄文時代には集落の一部であり、奈良・平安時代においても生活の痕跡が確認された。さらに、出土遺物からは旧石器時代から近世までの複合遺跡であることも明らかになった。

第2節 基本層序

調査区の西部(B1c6区)に深さ約2mのテストピットを設定して、基本土層の観察を行った。(第24図)

第1層 褐色の表土層で、腐植土が混じる。層厚は30～35cmである。

第2層 褐色のソフトローム層で、鹿沼パミスを少量含む。粘性と締まりはともに弱い。層厚は10～15cmである。

第3層 褐色のハードローム漸移層である。粘性と締まりはともに強い。層厚は10～18cmである。

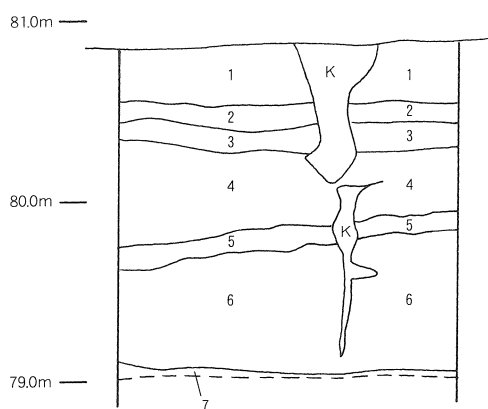
第4層 明褐色のハードローム層で、赤色粒子を中量含む。粘性と締まりはともに強い。層厚は35～60cmである。

第5層 にぶい褐色のハードローム層で、鹿沼パミスの中量含み、鹿沼軽石層の漸移層と考えられる。粘性と締まりはともに強い。層厚は8～12cmである。

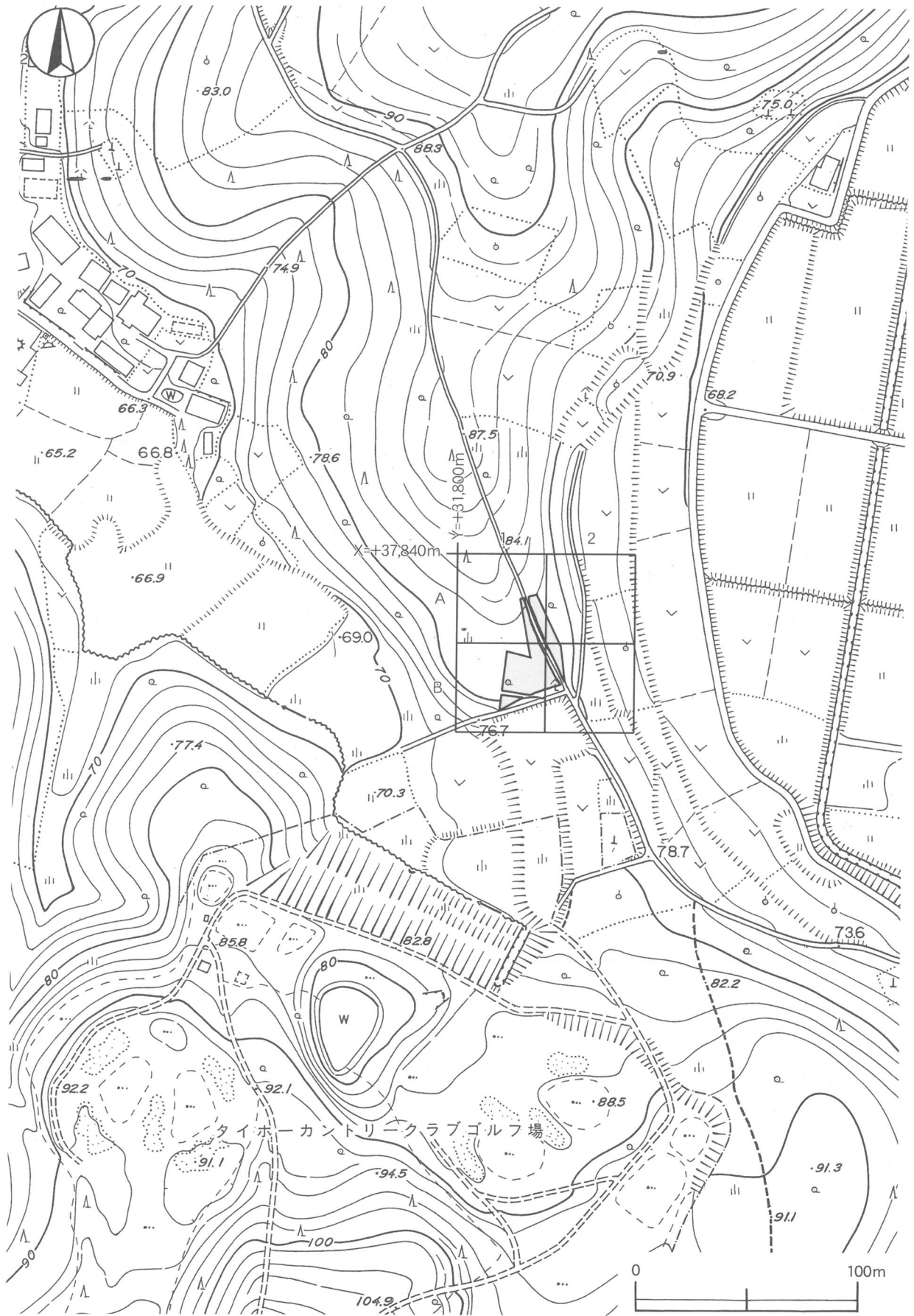
第6層 橙色の鹿沼軽石層である。粘性を欠くが締まりは強い。層厚は55～70cmである。

第7層 にぶい褐色のハードローム層で、鹿沼パミス少量含む。粘性と締まりはともに極めて強い。以下、未掘のため本来の層の厚さは不明である。

遺構の多くは、第2層上面で確認され、第3層から第5層を掘り込んでいる。



第24図 基本土層図

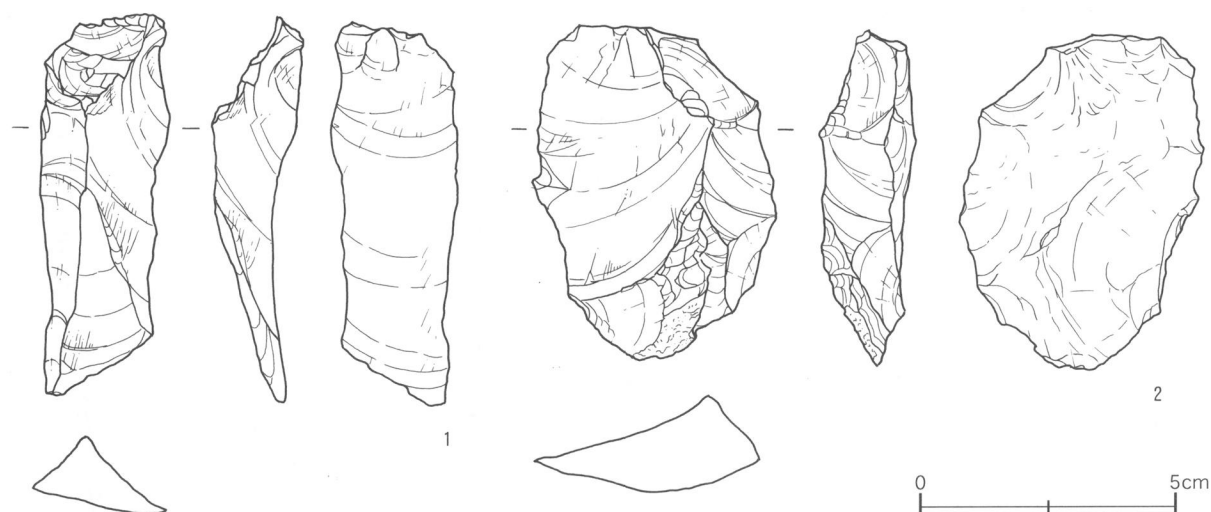


第25図 福原打越塚群調査区設定図

第3節 遺構と遺物

1 旧石器時代の遺物（第26図）

調査区内の中央部に立地する塚群の調査の際に、第2号塚の南東部盛土下層から旧石器時代のものと考えられる剥片2点が出土した。そこで、塚群及び旧石器時代以外の遺構調査終了後、剥片の出土地点であるB1c0区を中心に、B1b1区～B2d1区内に2m四方の調査グリッドを9か所設定し、基本層序の第5層上面までを掘り下げた。しかし、いずれの調査グリッドにおいても、旧石器時代の遺構や文化層は確認されなかった。また、石器や剥片等も出土しなかった。ここでは、第2号塚の南東部盛土下部から出土した剥片2点を、実測図と観察表で記載する。



第26図 旧石器時代の遺物実測図

旧石器時代の遺物観察表（第26図）

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	剥片	7.7	2.6	1.8	16.4	頁岩	縦長剥片。上部に打突痕、自然面残存。二次調整なし。	塚盛土下部	Q1 PL12
2	剥片	6.7	4.9	2.0	43.0	瑪瑙	大形剥片。裏面に自然面残存。二次調整なし。	塚盛土下部	Q2 PL12

2 縄文時代の遺構と遺物

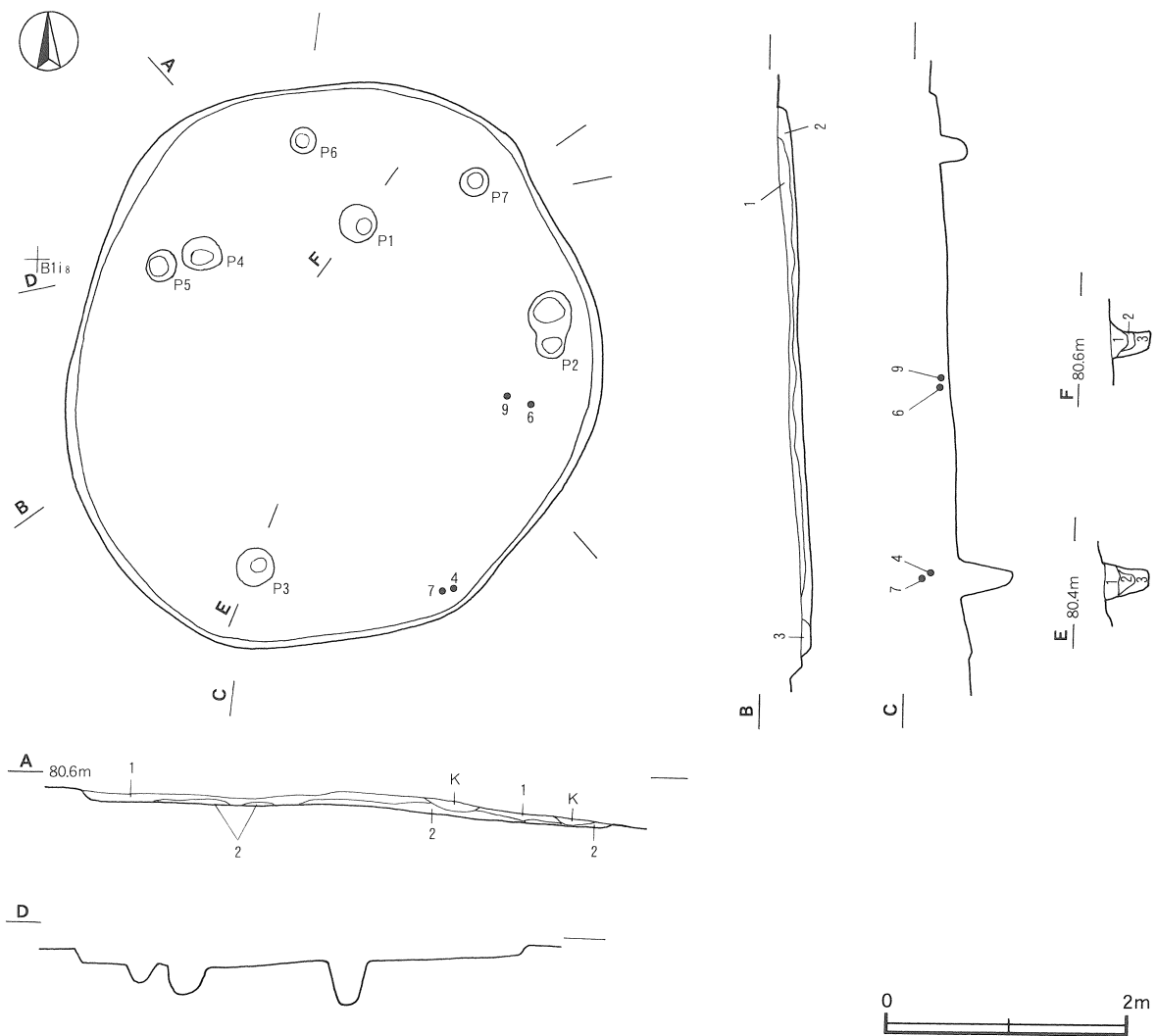
今回の調査で、竪穴住居跡2軒が確認された。調査区のほぼ中央部と東部に位置し、丘陵性台地の尾根部に立地していた。以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

（1）竪穴住居跡

第1号住居跡（第27・28図）

位置 調査区中央部のB1is区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の緩斜面に立地している。

規模と形状 平面形は長径4.80m、短径4.28mの楕円形である。長径をもとにした主軸方向は、N-21°-Eである。壁は外傾して立ち上がり、確認された壁高は8～16cmである。



第27図 第1号住居跡実測図

床 地形に合わせて北東側から南西側に向かって、わずかに傾斜しているもののほぼ平坦である。床面は比較的締まりが見られたが、硬化面は確認されなかった。

炉 確認されなかった。

ピット 7か所。P1～P4は深さ10～46cmで、その規模と配置から支柱穴と考えられる。また、P5～P7は深さ16～24cmで、支柱穴と考えられるピットに沿った位置に存在することから補助柱穴と考えられる。

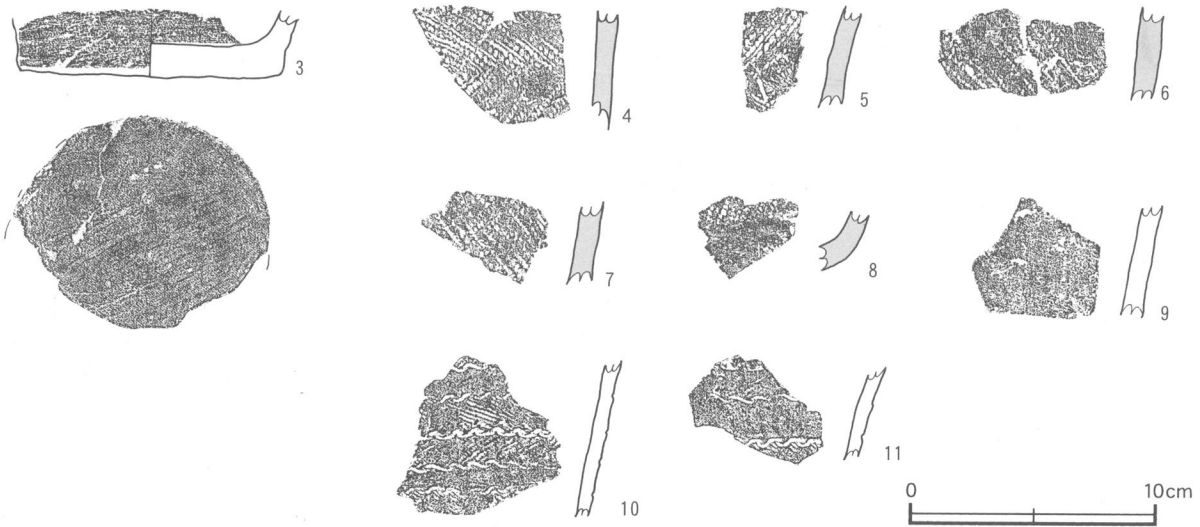
P1・P3土層解説

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1 褐色 ロームブロック少量 | 3 にぶい褐色 ローム粒子多量 |
| 2 褐色 ローム粒子中量 | |

覆土 3層に分層される。全体に褐色土を基調とし、壁際から中央部に向かってレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------------------------------|----------------------|
| 1 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量, 焼土粒子極微量 | 3 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 褐色 ローム粒子中量 | |



第28図 第1号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器片16点（胴部片15，底部片1），自然礫5点が出土している。遺物は少量で，ほとんどが小破片である。第28図3・5・8・10・11は覆土中から，6・9は主に南東部を中心とした床面から，4・7は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 出土土器の時期は，前期から中期まで時間的な幅が見られた。床面上からの出土土器及び遺構の形態から，時期は概ね縄文時代前期前半と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表(第28図)

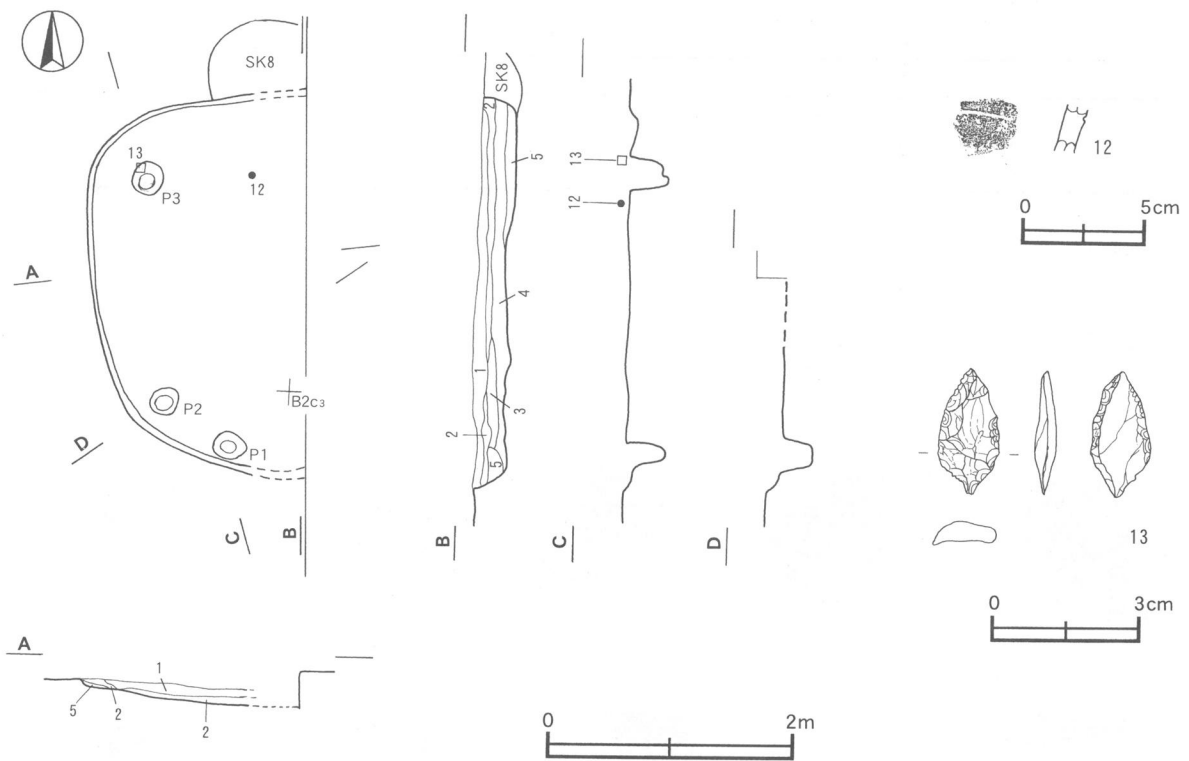
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	縄文土器	深鉢	-	(2.7)	[10.8]	石英・長石・雲母	橙	普通	無文。胴部表裏面，底面ミガキ。	南部覆土中	P3 10%
番号	種別	器種	胎土		色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考	
4	縄文土器	深鉢	長石・雲母・繊維		にぶい橙	普通	附加条縄文施文。羽状構成。		南東部覆土下層	TP4 PL10	
5	縄文土器	深鉢	長石・雲母・繊維		にぶい橙	普通	附加条縄文施文。羽状構成。		覆土中	TP5	
6	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母・繊維		にぶい橙	普通	単節縄文施文。		東部床面	TP6 PL11	
7	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母・繊維		にぶい橙	普通	単節縄文施文。		南東部覆土下層	TP7 PL11	
8	縄文土器	深鉢	長石・繊維		にぶい橙	普通	単節縄文施文。		覆土中	TP8	
9	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母		橙	普通	貝殻腹縁による爪形文施文。		東部床面	TP9	
10	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母		褐	普通	羽状構成の単節縄文と横位の結節文施文。		覆土中	TP10	
11	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母		にぶい赤褐	普通	単節縄文と横位の結節文施文。		覆土中	TP11 PL10	

第2号住居跡 (第29図)

位置 調査区東部のB2b2区に位置し，丘陵性台地の尾根部上の平坦面に立地している。

重複関係 北部の壁と床の一部は，第8号土坑を掘り込んで構築されている。

規模と形状 東側は調査区域外のため，全体の規模は明確にできないが，南北3.12mで，東西は1.78mまでが確認された。平面形は隅丸方形または長方形と推定される。主軸方向は不明である。壁は外傾して立ち上がり，確認された壁高は20～31cmである。



第29図 第2号住居跡・出土遺物実測図

床 ほぼ平坦である。調査した範囲内で、硬化面などは確認されなかった。

炉 調査した範囲内では、確認されなかった。

ピット 調査した範囲内では、3か所が確認された。P1～P3は深さ28～35cmで、その規模と配置から支柱穴と考えられる。

覆土 5層に分層される。全体的に褐色土を基調とし、粘性としまりは強い。壁際から中央部に向かってレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|------|--------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量, 炭化物極微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子極微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック微量, 炭化粒子極微量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片1点(胴部片), 石器1点(石鏃)と、混入と考えられる土師器片1点, 須恵器片1点が出土している。第29図12は北部の覆土下層から, 13は北西部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 遺物がほとんどなく時期は明確ではないが、遺構の形態や第1号住居跡の立地と合わせ、縄文時代前期と考えられる。

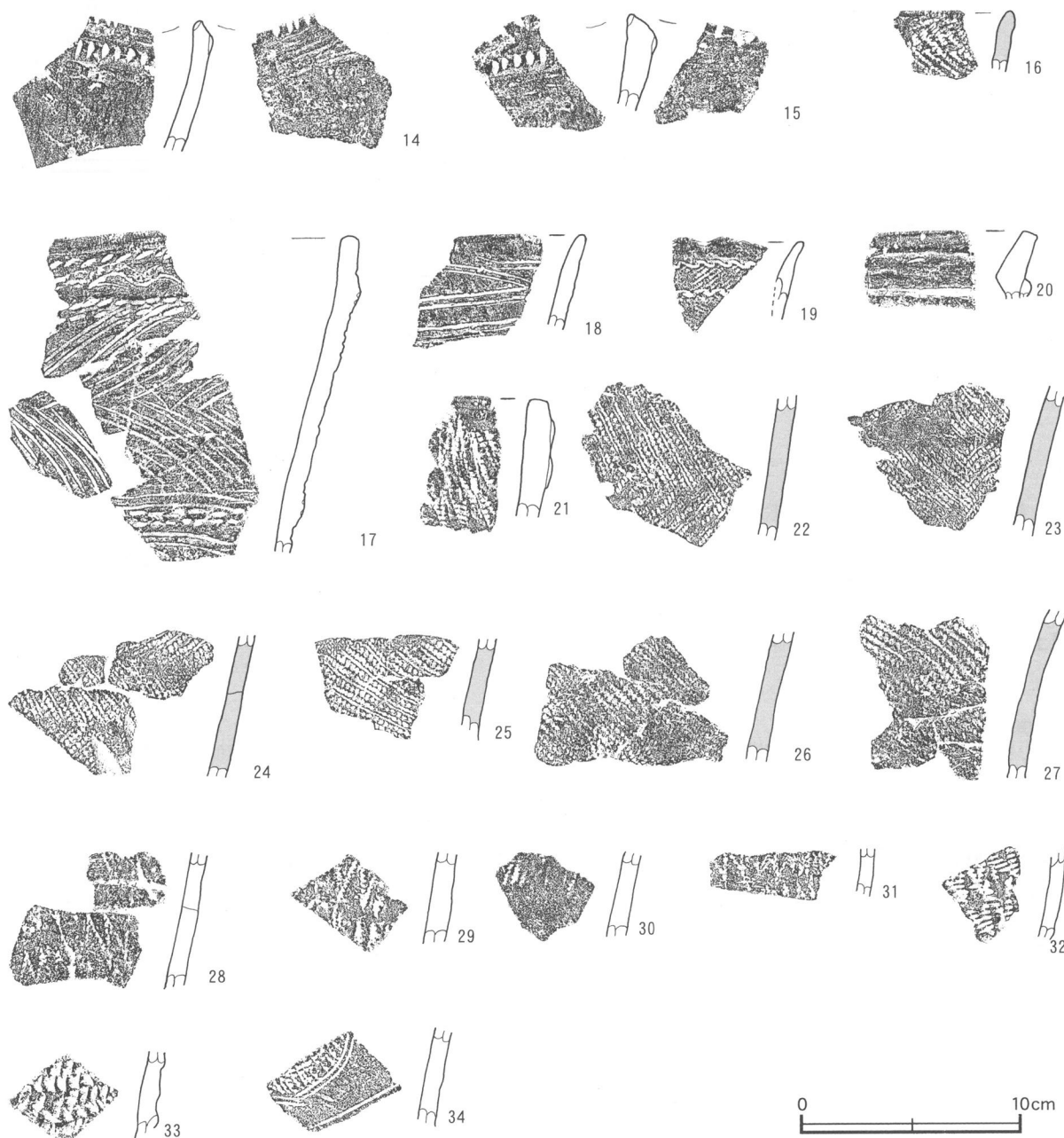
第2号住居跡出土遺物観察表(第29図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
12	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい黄橙	普通	横位の沈線文施文。	北部覆土下層	TP12

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
13	石鏃	2.46	1.26	0.44	1.16	チャート	凸基有茎鏃。側縁押圧剥離。	北西部覆土下層	Q13 PL12

(2) 遺構外出土遺物 (第30図)

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第30図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第30図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい橙	普通	口唇部内外面に連続するキザミ施文。胴部表裏面擦痕状。	表土中	TP14 PL10
15	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口唇部内外面に連続するキザミ施文。胴部表裏面擦痕状。	表土中	TP15 PL10
16	縄文土器	深鉢	石英・繊維	にぶい橙	普通	R L単節縄文施文。	表土中	TP16 PL10
17	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	半截竹管による方向の異なる平行沈線文と横位の平行刺突文で文様構成。	表土中	TP17 PL10
18	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	灰黄褐	普通	横位の半截竹管による平行沈線文施文。	表土中	TP18 PL10
19	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	黒褐	普通	口唇部押圧。羽状構成の単節縄文と横位の結節文施文。	表土中	TP19 PL10
20	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	無文。横位の隆帯貼付。	表土中	TP20 PL10
21	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	貝殻腹縁による爪形文施文。	表土中	TP21 PL10
22	縄文土器	深鉢	石英・繊維	にぶい黄橙	普通	附加条縄文施文。羽状構成。	表土中	TP22 PL11
23	縄文土器	深鉢	石英・繊維	にぶい黄橙	普通	附加条縄文施文。羽状構成。	表土中	TP23 PL11
24	縄文土器	深鉢	石英・長石・赤色粒子・繊維	にぶい黄橙	普通	附加条縄文施文。羽状構成。	表土中	TP24
25	縄文土器	深鉢	石英・長石・繊維	にぶい黄橙	普通	附加条縄文施文。羽状構成。	表土中	TP25
26	縄文土器	深鉢	石英・長石・繊維	にぶい黄橙	普通	R L単節縄文施文。	表土中	TP26
27	縄文土器	深鉢	石英・長石・繊維	にぶい黄橙	普通	R L単節縄文施文。	表土中	TP27 PL11
28	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	貝殻腹縁による爪形文施文。	表土中	TP28 PL10
29	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	貝殻腹縁による爪形文施文。	表土中	TP29
30	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	貝殻腹縁による爪形文施文。	表土中	TP30
31	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	貝殻腹縁による爪形文施文。	TK 1盛土中	TP31
32	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	褐	普通	貝殻腹縁による爪形文施文。	SK 2覆土中	TP32
33	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい黄橙	普通	貝殻腹縁による爪形文施文。	SK 2覆土中	TP33
34	縄文土器	深鉢	長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	平行沈線による曲線状の区画と貝殻腹縁文による文様構成。	表土中	TP34 PL11

3 奈良・平安時代の遺構と遺物

今回の調査で、土坑1基が確認された。調査区の北部に位置し、丘陵性台地尾根部上の平坦面に立地していた。以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

(1) 土 坑

第6号土坑(第31図)

位置 調査区北部のA 2 f1区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の平坦面に立地している。

規模と形状 長径1.64m、短径0.68mの長楕円形で、深さは87cmである。壁は直立し、底面は平坦である。長径方向はN-72°-Eである。

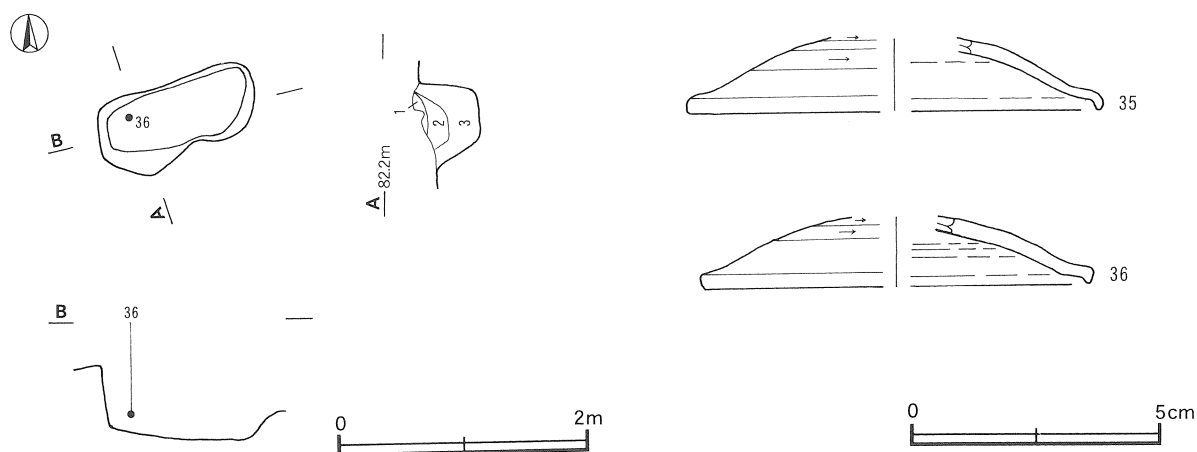
覆土 3層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、鹿沼バミス少量
2 褐色 ロームブロック少量
3 にぶい褐色 ローム粒子多量、鹿沼バミス少量

遺物出土状況 須恵器片4点(蓋)が出土している。第31図35は覆土中、36は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 性格は不明であるが、埋没過程で土器が投棄されたものと推定される。時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。



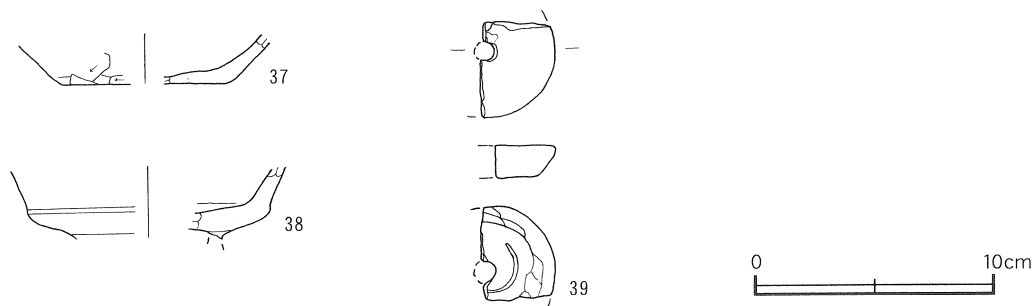
第31図 第6号土坑遺物実測図

第6号土坑出土遺物観察表(第31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
35	須恵器	蓋	[16.2]	(2.9)	-	石英・長石・砂粒	灰	普通	ロクロ成形。天井部回転ヘラ削り。	覆土中	P35 25%
36	須恵器	蓋	[15.3]	(2.7)	-	石英・砂粒	にぶい黄褐	普通	ロクロ成形。天井部回転ヘラ削り。	西部覆土下層	P36 30%

(2) 遺構外出土遺物(第32図)

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第32図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
37	須恵器	坏	-	(2.0)	[6.8]	石英・雲母	にぶい黄橙	普通	ロクロ成形。体部下端手持ちヘラ削り。	TK1盛土中	P37 15%
38	須恵器	高台付坏	-	(3.0)	-	石英・長石・砂粒	灰黄	普通	ロクロ成形。体部内面磨減、転用硯カ。	表土中	P38 10%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
39	紡錘車	(4.0)	(3.1)	1.4	(20.9)	長石・砂粒	灰	普通	上面ヘラナデ。下面手持ちヘラ削り。須恵質。	TK1盛土中	DP39 PL11

4 近世の遺構と遺物

今回の調査で、塚4基と墓壇2基が確認された。塚は調査区の南部から北部に、墓壇は調査区の南部にそれぞれ位置し、丘陵性台地の尾根部平坦面に立地していた。以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

(1) 塚

第1号塚 (第33図)

位置 調査区南部のB 2 di 区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の平坦面に立地している。

規模と形状 基底部の平面形は、長径4.3m、短径3.9mのほぼ円形で、基底部から塚頂部までの高さは70cmである。北側の盛土裾部は、一部削平され原形をとどめていない。また、塚上部には2株の木根が覆っていた。

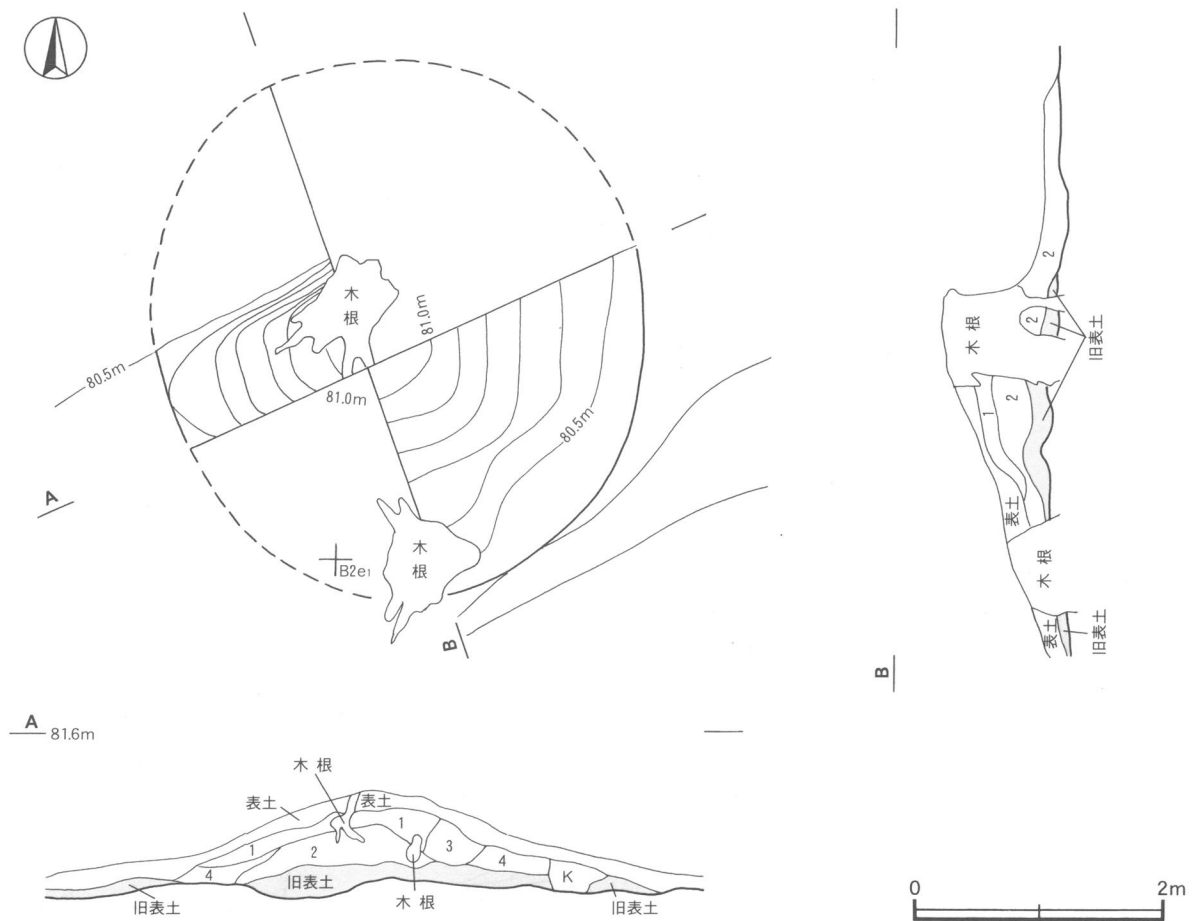
構築状況 4層からなる。旧表土面を基底部とし、褐色土を主体として盛土している。中央部から山状に積み上げているが、木根による攪乱も確認され、全体的に締まりに欠ける軟らかい層からなる。

土層解説

- | | |
|----------------|----------------|
| 1 褐色 ローム粒子中量 | 3 褐色 ローム粒子少量 |
| 2 褐色 ロームブロック微量 | 4 褐色 ロームブロック少量 |

遺物出土状況 盛土中から、築造時の混入と考えられる縄文土器片9点、土師器片4点、須恵器片4点、土製品1点(紡錘車)が出土している。

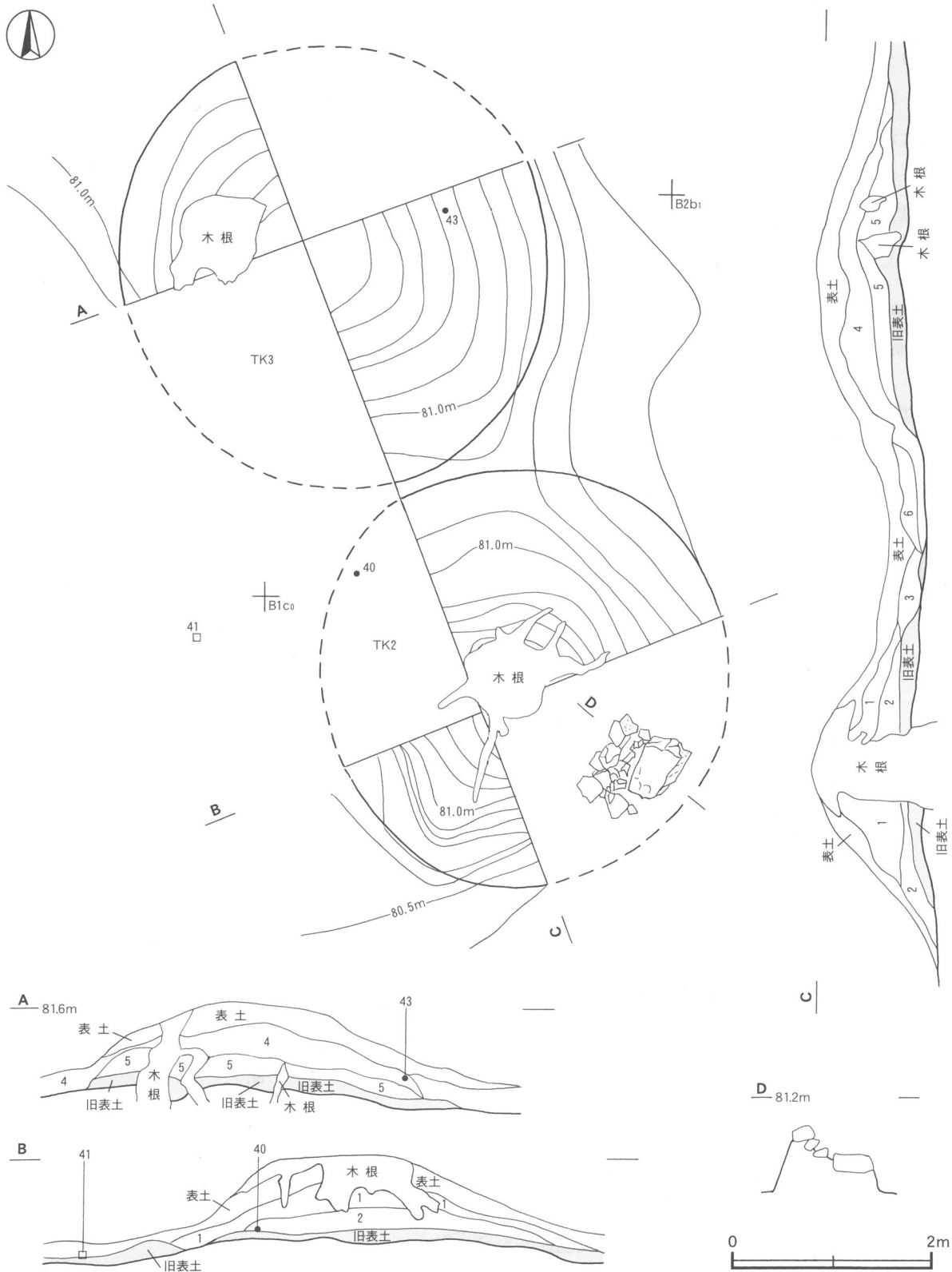
所見 時期は、築造状況から近世と考えられる。



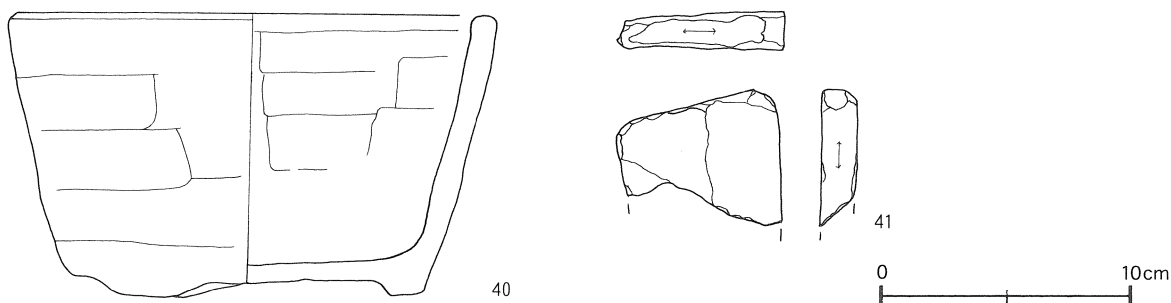
第33図 第1号塚実測図

第2号塚 (第34・35図)

位置 調査区中央部のB 1 c0 区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の平坦面に立地している。



第34図 第2・3号塚実測図



第35図 第2号塚出土遺物実測図

規模と形状 基底部の平面形は、長径4.2m、短径4.0mの円形である。塚頂部は木根1株が覆っているため、基底部から塚頂部までの高さは明確でないが、約90cmである。裾部のくずれは比較的少ない。

構築状況 3層からなる。旧表土面を基底部とし、褐色土と灰褐色土を主体として盛土している。中央部から山状に積み上げているが、木根による攪乱も確認され、1・3層は締まりに欠ける軟らかい層からなる。2層は比較的締まりが見られる。また、南東部の盛土内からは、大形の自然石を平坦に据え、周囲に自然礫を巡らした階段状の石組みが確認された。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量
- 2 褐色 ローム粒子中量

- 3 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 南西側裾部の盛土上層から瓦質土器1点（鉢）と、築造時の混入と考えられる縄文土器片2点、土師器片1点、陶器片2点、石製品1点（砥石）、剥片2点が出土している。第35図40は、塚の裾部から正位で出土している。信仰または供養に伴って据えられたものと推定される。

所見 地元の方の話では、かつて石塔が建立されていたというので、盛土内で確認された石組みは、建立時の基礎部分と推定される。時期は、築造状況から近世と考えられる。

第2号塚出土遺物観察表(第35図)

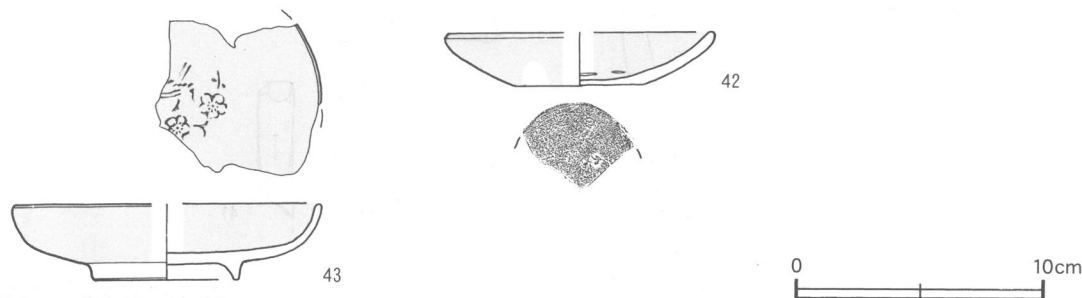
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
40	瓦質土器	鉢	19.4	11.3	13.6	石英・長石	灰黄褐	普通	体部内・外面ロクロナデ。三足。内面下部磨滅。	北西裾部盛土下層	P40 90% PL11

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
41	砥石	(5.4)	6.6	(1.5)	(56.4)	凝灰岩	表裏面剥離。2側面を砥面に使用。	北西裾部表土中	Q41 PL11

第3号塚 (第34・36図)

位置 調査区中央部のB 1 b0区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の平坦面に立地している。

規模と形状 基底部の平面形は、長径4.5m、短径4.3mのほぼ円形である。基底部から塚頂部までの高さは80cmである。塚頂部付近には木根2株が存在しているが、全体の形状を比較的よくとどめている。



第36図 第3号塚出土遺物実測図

構築状況 3層からなる。旧表土面を基底部とし、褐色土を主体として盛土している。中央部から山状に積み上げているが、全体的に締まりに欠ける軟らかい層からなっている。

土層解説 (第1～3層は、第2号塚盛土)

4 褐色 ローム粒子中量

5 褐色 ロームブロック少量

6 褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 南西側裾部の盛土中から、第36図に示した陶器片2点が出土している。また、構築時の混入と考えられる須恵器片1点が出土している。

所見 時期は、築造状況から近世の塚と考えられる。また、裾部盛土中から出土した陶器片からは、長期間にわたって供養または信仰の対象となっていたことがうかがわれる。

第3号塚出土遺物観察表(第36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
42	陶器	皿	[10.6]	2.2	[5.2]	長石・砂粒	にぶい黄橙	良好	底部回転ヘラ削り。体部内・外面錆釉。内面重ね焼き痕有り。	盛土中	P42 30%
43	陶器	皿	[12.2]	3.1	[5.8]	砂粒	浅黄色	良好	底部回転ヘラ削り。体部内・外面御深井釉。内面摺絵による梅花文。	東部盛土中	P43 30%

第4号塚(第37図)

位置 調査区北部のA 2e3区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の平坦面に立地している。

規模と形状 北側と東側の裾部は調査区域外に伸び、西側は道路によって削平されている。また、塚頂部は削平され、盛土の崩落も著しい。そのため、基底部の平面形は明確にできない部分があるが、径約4.0mで、基底部から塚頂部までの高さは30cmほどが確認された。

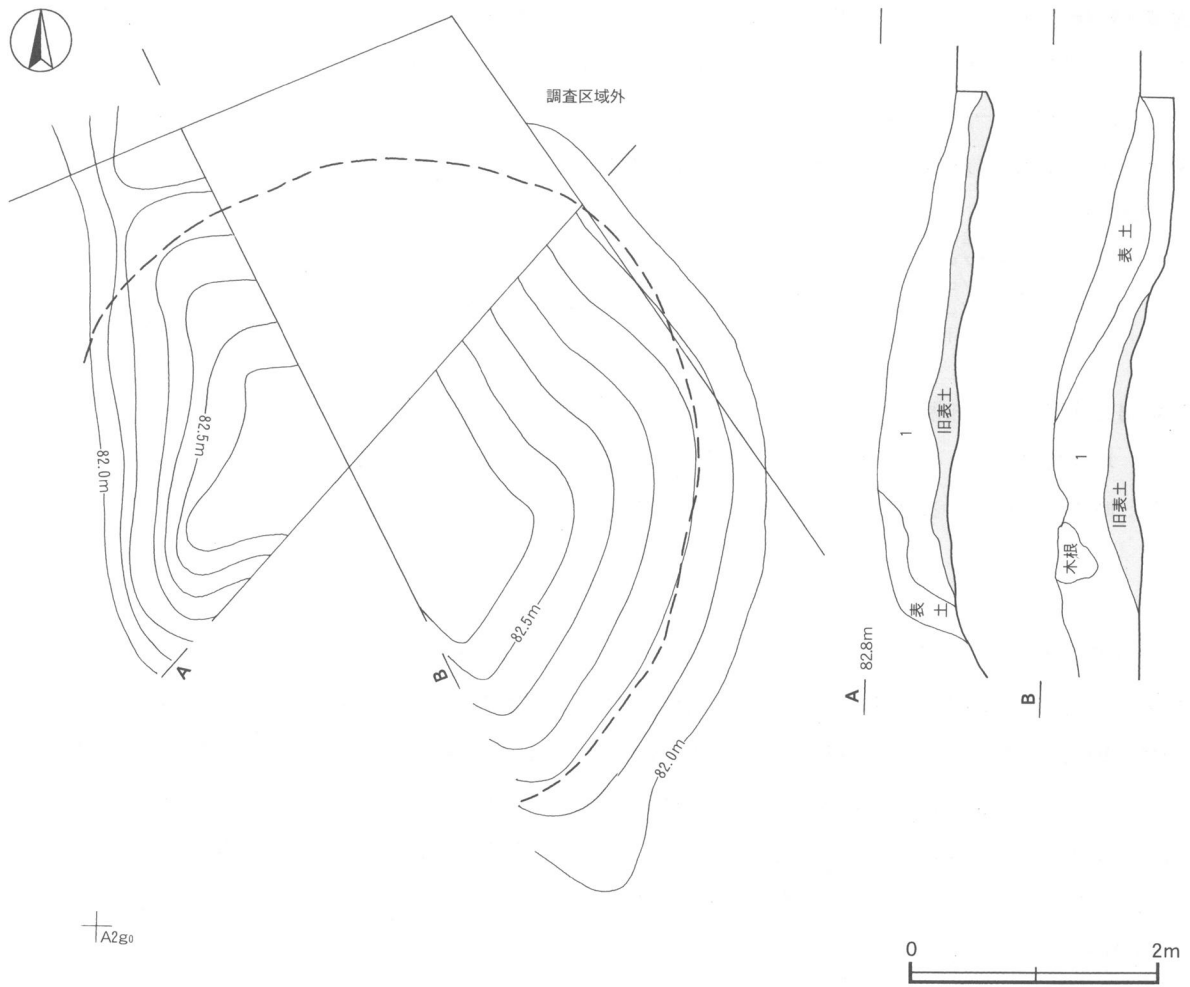
構築状況 単一層である。上層は削平と崩落により遺存していない。旧表土面を基底部とし、褐色土を盛土している。中央部から山状に積み上げているが、全体的に締まりに欠ける軟らかい層からなる。

土層解説

1 褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 盛土中から、構築時の混入と考えられる土師器片3点が出土している。

所見 時期は、築造状況から近世の塚と考えられる。

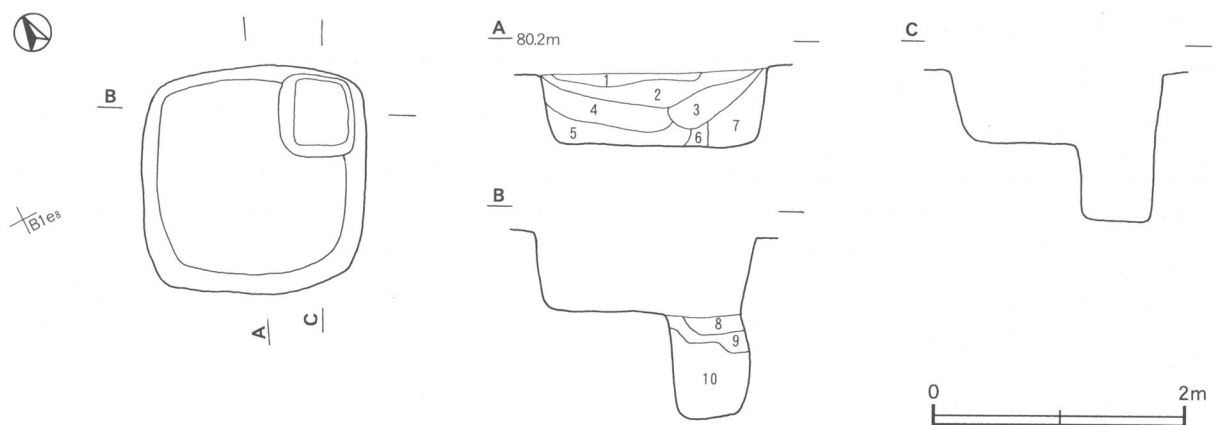


第37図 第4号塚実測図

(2) 墓 墳

第1号墓墳 (SK1) (第38図)

位置 調査区南部のB1es区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の緩斜面に立地している。



第38図 第1号墓墳実測図

規模と形状 一辺が1.80mの方形で、南北軸をもとした主軸方向は、N-27°-Eである。二段の掘り込みを有し、上段部の深さは65cmである。壁はほぼ直立しており、底面は平坦である。下段部の掘り込みは北東コーナー部に位置し、一辺が0.6mの方形で深さは80cmである。壁は直立しており、底面は平坦である。

覆土 10層に分層される。ブロック状に人為的な埋設がなされたと考えられる。

土層解説

1 褐色	ローム粒子多量，鹿沼パミスブロック少量	6 褐色	ローム粒子中量，鹿沼パミスブロック少量
2 褐色	ロームブロック・鹿沼パミスブロック少量	7 褐色	ロームブロック多量
3 褐色	ロームブロック中量，鹿沼パミスブロック少量	8 褐色	ローム粒子中量
4 褐色	ロームブロック・鹿沼パミスブロック中量	9 褐色	ローム粒子中量，鹿沼パミス少量
5 褐色	ローム粒子多量，鹿沼パミスブロック中量	10 褐色	鹿沼パミスブロック・ローム粒子中量

遺物出土状況 下段部掘り込みの底面から、鉄製品（釘片）と人骨片が出土している。また、上段部の覆土中から、埋設時の混入と考えられる縄文土器片1点が出土している。

所見 時期は、隣接する第2号墓壙と類似の形態を呈していることから、近世と考えられる。

第2号墓壙（SK2）（第39図）

位置 調査区南部のB1es区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の緩斜面に立地している。

規模と形状 一辺が1.90mの隅丸方形で、南北軸をもとした主軸方向は、N-10°-Eである。二段の掘り込みを有し、上段部の深さは60cmである。壁はほぼ直立しており、底面は平坦である。下段部の掘り込みは中央部に位置し、一辺が0.7mの方形で深さは65cmである。壁は直立しており、底面は平坦である。

覆土 10層に分層される。ブロック状に人為的な埋設がなされたと考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量，炭化粒子微量	6 明褐色	ロームブロック・鹿沼パミスブロック少量
2 暗褐色	ローム粒子・鹿沼パミス中量，炭化粒子極微量	7 褐色	ローム粒子多量，鹿沼パミス微量，炭化粒子極微量
3 褐色	ローム粒子中量，鹿沼パミス少量	8 褐色	ローム粒子中量，鹿沼パミス少量
4 褐色	ローム粒子中量，鹿沼パミス少量，炭化粒子微量	9 褐色	ローム粒子中量，鹿沼パミスブロック微量
5 褐色	ロームブロック少量，炭化粒子微量	10 褐色	ローム粒子中量，鹿沼パミス少量

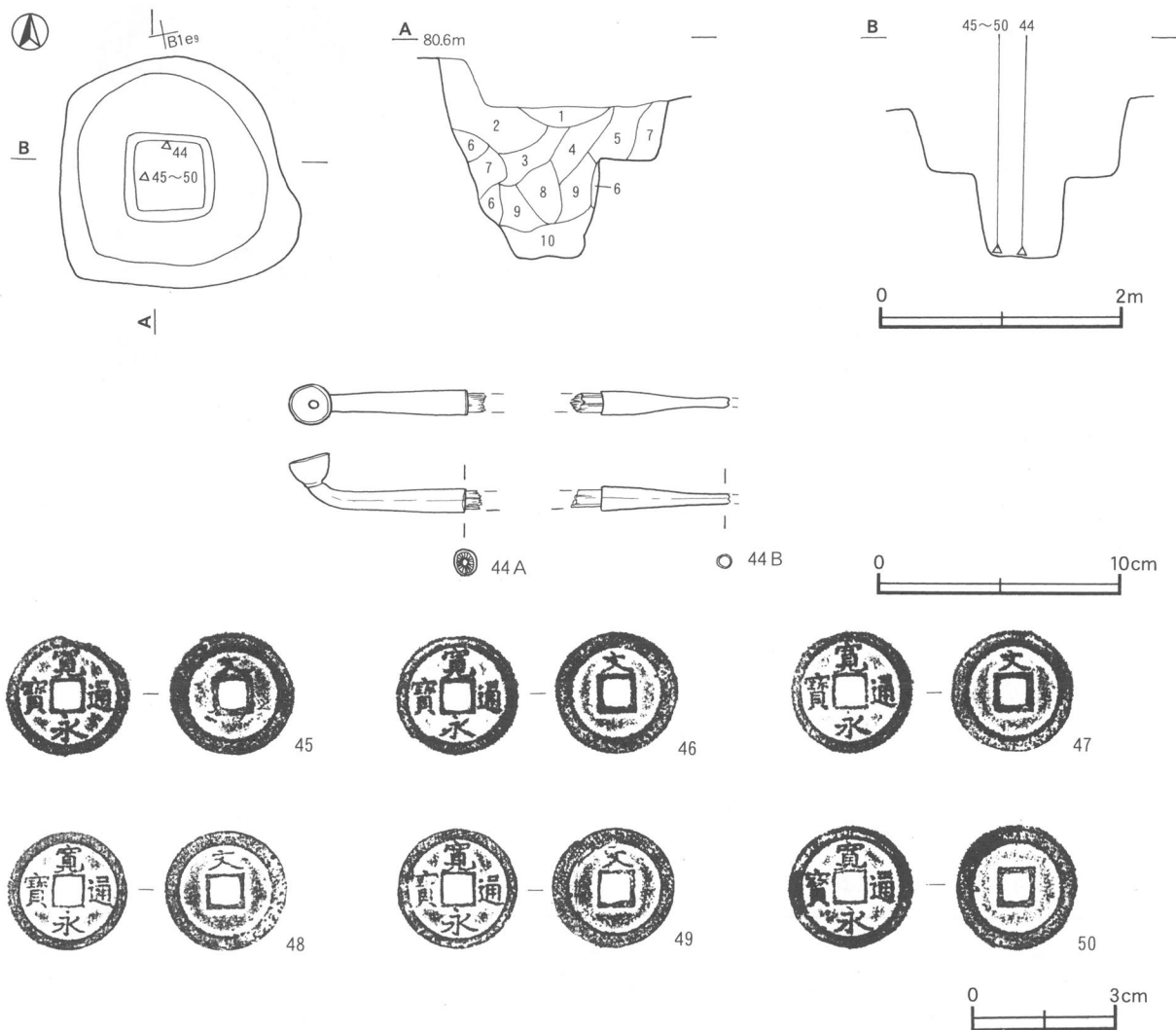
遺物出土状況 下段部掘り込みの底面から、鉄製品1点（釘片カ）、銅製品1点（煙管）、古銭6点（寛永通寶）と人骨片が出土している。

所見 時期は、出土遺物及び遺構の形態から、17世紀末以降と考えられる。

第2号墓壙出土遺物観察表（第39図）

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
44A	煙管(雁首)	(7.2)	1.7	2.4	9.25	銅	ラウ竹管残存。火皿部円形。	中央部底面	M44A PL12
44B	煙管(吸口)	(6.5)	1.0	1.0	4.46	銅	ラウ竹管残存。漆塗彩。吸口部先端欠損。	中央部底面	M44B PL12

番号	銭名	径	孔幅	重量	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
45	寛永通寶	2.53	0.59	3.16	1668	銅	新寛永。文銭。銅一文銭。	中央部底面	M45 PL12
46	寛永通寶	2.54	0.58	4.22	1668	銅	新寛永。文銭。銅一文銭。	中央部底面	M46 PL12
47	寛永通寶	2.54	0.59	4.20	1668	銅	新寛永。文銭。銅一文銭。	中央部底面	M47 PL12
48	寛永通寶	2.50	0.60	3.70	1668	銅	新寛永。文銭。銅一文銭。	中央部底面	M48 PL12
49	寛永通寶	2.52	0.61	3.60	1668	銅	新寛永。文銭。銅一文銭。	中央部底面	M49 PL12
50	寛永通寶	2.59	0.60	3.50	1697	銅	新寛永。無背銭。銅一文銭。	中央部底面	M50 PL12



第39図 第2号墓壙・出土遺物実測図

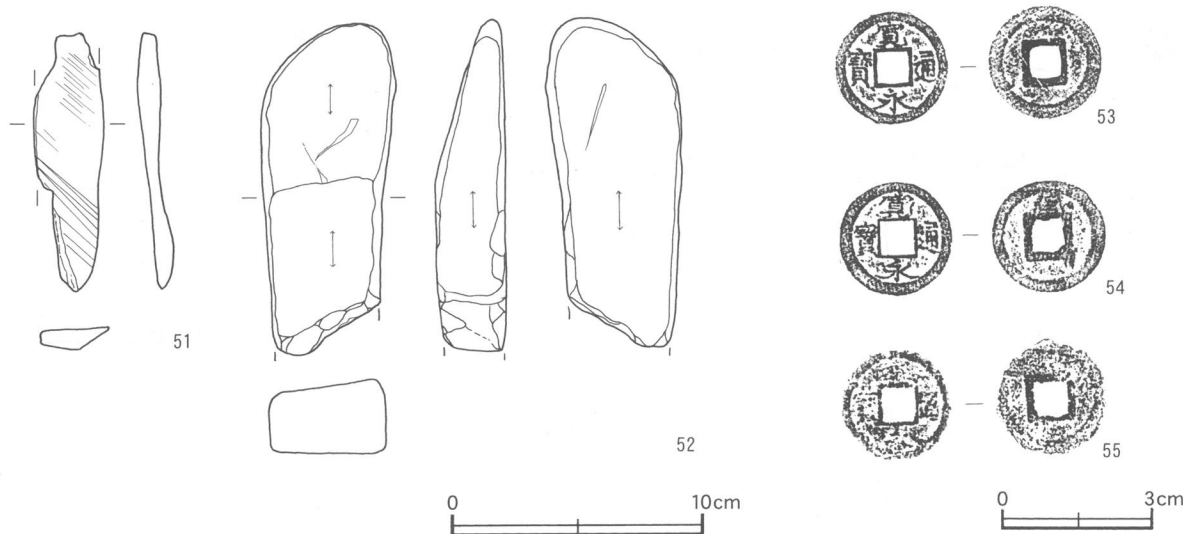
(3) 遺構外出土遺物 (第40図)

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。

遺構外出土遺物観察表(第40図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
51	砥石	(10.2)	(2.8)	(1.0)	(21.5)	粘板岩	裏面剥離。1面を砥面に使用。	表土中	Q51 PL11
52	砥石	(13.2)	(5.4)	2.8	(320)	砂岩	4面を砥面に使用。	表土中	Q52 PL11

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
53	寛永通寶	2.29	0.67	1.96	1697	銅	新寛永。無背銭。銅一文銭。	表土中	M53 PL12
54	寛永通寶	2.29	0.65	2.34	-	銅	新寛永。背面□。銅一文銭。	表土中	M54 PL12
55	□□通寶	2.26	0.70	1.34	-	銅	銭種不明。無背銭。	表土中	M55 PL12



第40図 遺構外出土遺物実測図

5 その他の遺構

今回の調査で、時期および性格不明の土坑6基と溝跡1条が確認された。これらの遺構については、一覧表で掲載し、平面図は全体図（第41図）で示すことにする。

表7 縄文時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係(旧→新),その他
				長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)			主柱穴	貯蔵穴	ピット	出入口	扉				
1	B1is	N-21°-E	楕円形	4.80 × 4.28	8~16	平坦	-	4	-	3	-	-	自然	縄文土器（深鉢）	前期前半	
2	B2b2	-	[隅丸方形 または長方形]	(3.12)×(1.78)	20~31	平坦	-	3	-	-	-	-	自然	縄文土器（深鉢）, 石鏃	前期	SK8→本跡

表8 奈良・平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	形状	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新), その他
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
6	A2f1	N-72°-E	長楕円形	1.64 × 0.68	87	直立	平坦	自然	須恵器（蓋）	

表9 塚一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		主な出土遺物	時期	備考 新旧関係(旧→新)
				長径×短径(m)	高さ(cm)			
1	B2d1	-	円形	4.30 × 3.90	70	-	近世	SK4→本跡
2	B1c0	-	円形	4.20 × 4.00	90	瓦質土器（鉢）	近世	
3	B1b0	-	円形	4.50 × 4.30	80	陶器（小皿）	近世	
4	A2e3	-	[円形]	[4.00]×[4.00]	(30)	-	近世	

表10 墓壙一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	形状	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新),その他
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					
1	B1es	N-27-E	方形	1.90 × 1.90	65~145	直立	平坦	人為	釘片,人骨片	
2	B1es	N-10-E	隅丸方形	1.80 × 1.80	60~125	直立	平坦	人為	古銭(寛永通寶),煙管,釘片,人骨片	

表11 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	形状	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新),その他
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
3	B1b9	N-43-E	楕円形	1.25 × 0.64	58	外傾	皿状	自然	-	SD1→本跡
4	B1c0	-	円形	1.42 × 1.40	22	緩斜	凹凸	自然	-	
5	A2j2	N-33-E	長楕円形	2.45 × 1.10	25	緩斜	平坦	人為	-	
7	B1d0	N-16-E	楕円形	0.88 × 0.62	32	外傾	平坦	人為	-	
8	B2b2	-	[円形]	0.82 × (0.38)	30	緩斜	皿状	自然	-	本跡→S12
9	B1hs	N-87-E	楕円形	1.32 × 0.90	46	平坦	外傾	自然	-	

表12 溝跡一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新),その他
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	B1a9~ B1d0	N-16°-W	直線状	(5.4)	0.38~ 0.65	0.20~ 0.45	18~38	緩斜	皿状	自然	-	本跡→SK3

第4節 まとめ

今回の調査の結果、縄文時代の堅穴住居跡2軒、奈良・平安時代の土坑1基、近世の塚4基と墓壙2基、時期不明の土坑6基と溝跡1条が確認された。また、遺構に伴わないものの、旧石器時代の剥片も出土したことから、旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが明らかになった。ここでは、各時代別に遺構と遺物について概要を述べ、まとめとしたい。

1 旧石器時代

旧石器時代の遺物は、第2号塚の下部から頁岩と瑪瑙製の剥片2点が出土している。調査では出土地点を中心に、基本層序の第5層であるハードローム層上面まで掘り下げたが、遺構や文化層、共伴する石器群などを確認することはできなかった。笠間市内で旧石器時代単独の遺跡は未確認であるが、縄文時代などと複合した遺跡から遺物が出土している。本戸地区の石崎遺跡と本戸城跡¹⁾では細石刃が、片庭地区の西田遺跡²⁾では御子柴型の石斧がそれぞれ確認されている。また、隣接する岩瀬町東部の高幡地区³⁾からは槍先形尖頭器が、松田古墳群⁴⁾からはナイフ形石器と石核、剥片などが出土している。

このように周辺地域の丘陵性の台地上において、旧石器時代の遺物が確認された遺跡は確実に増えている。今後は、安定した層位において石器群などが発見され、詳細な検討が進められることに期待したい。

2 縄文時代

縄文時代の竪穴住居跡2軒は、調査区中央部と東部に位置し、いずれも丘陵性台地の尾根部上に立地していた。第1号住居跡は楕円形で、ピット7か所が確認されたが、炉は確認されなかった。出土土器は、前期前半の関山式と中期初頭の下小野式が主体であるが、床面上から出土した土器から、時期は前期前半と考えられる。第2号住居跡は、一部調査区域外ではあるが、隅丸方形または長方形と推定される。遺物がほとんどないが、時期は第1号住居跡とほぼ同時期と推定される。

遺構に伴わない縄文土器は、早期後葉の条痕文系、前期前半の関山式・黒浜式、前期後半の浮島式・興津式、中期初頭の下小野式期の土器などが確認された。住居跡の時期と比較すると、時期的な幅に広がりが見られる。

縄文時代の遺跡は、笠間市内で71遺跡、岩瀬町内で19遺跡ほどが、これまでに確認されている。笠間市内における縄文時代の遺跡の立地環境を見ると、早・前期の遺跡は、市域北部や南部の標高75m以上の丘陵性台地上に立地する傾向が捉えられている⁵⁾。当遺跡も同様な立地条件のもとに、生活の場が形成されていたことが明らかになった。早・前期以外では、中期初頭の下小野式と考えられる土器が含まれていた。この時期の土器が確認された遺跡としては、隣接する友部町寺山遺跡⁶⁾などがあるが、遺跡数は少なく貴重な資料である。

3 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構としては、調査区北部で土坑1基が確認された。性格は不明であるが、埋没過程で須恵器の蓋が投棄されたと考えられる。遺構外からも須恵器の坏や紡錘車が出土している。居住活動を示す住居跡などは調査区内で確認されなかったが、当遺跡に近接して福原原遺跡が所在している。平成3年度に発掘調査が実施され、8世紀後葉の住居跡4軒が確認されている⁷⁾。時期的にも位置的にも、関連性が十分に示唆される。

4 近世

近世の遺構は、塚4基と墓壇2基が確認された。塚は、調査区中央を南北に通る道路に面して、南部に3基と北部に1基が築造されていた。第1～3号塚はほぼ同じ規模を有し並んで立地していた。第4号塚は、道路の改修などによって一部削平されているとともに、盛土の崩落も見られ遺存状態は良好ではなかった。

特に、第2号塚の道路に面した南東部盛土内からは、石塔建立時の基礎部分と考えられる石組が確認された。いずれの塚にも石塔自体は存在しなかったが、北側の調査区域外には、享保元（1716）年建立の「南無阿弥陀佛」と刻まれた百万遍供養塔、安永6（1777）年に建立された如意輪観音像の十九夜供養塔、天明元（1781）年建立の廿三夜供養塔などが祀られている。これらの石塔は、笠間市内では比較的多く確認されている種類⁸⁾であり、かつては塚に伴っていたものが移設された可能性も十分に考えられる。塚の周囲からは、わずかに遺物も出土しており、長期間にわたって人々の信仰の対象であったことがうかがわれる。

墓壇2基は、2段掘り込みの形態を有していた。笠間市内では向原遺跡⁹⁾でも確認されており、類例の増加によって、埋葬方法や形態について詳細な検討が可能になるとと思われる。

- 1) 笠間市史編さん委員会 「笠間市遺跡分布調査報告書」『笠間市史資料』第5集 笠間市史編さん委員会 1992年3月
- 2) 西野 元 加藤博文他 「笠間市西田遺跡の研究―縄文時代における石鏃の製作と流通に関する研究―」『筑波大学先史学・考古学研究調査報告』7 筑波大学歴史・人類学系 1996年3月
- 3) 岩瀬町史編さん委員会 『岩瀬町史 通史編』岩瀬町 1987年3月
- 4) 横倉要次 「松田古墳群 北関東自動車道（友部～水戸）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財団文化財調査報告』第226集（財）茨城県教育財団 2004年3月
- 5) 1)に同じ
- 6) 平松孝志 「北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 寺山遺跡 東平遺跡 坂ノ上塚群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第150集（財）茨城県教育財団 1999年3月
- 7) 萩原義照 「福原原遺跡」『笠間市埋蔵文化財調査報告』第8集 笠間市教育委員会 笠間市福原原遺跡発掘調査会 1995年3月
- 8) 石塚光男 「笠間の社寺と庶民の信仰」『笠間市史 上巻』笠間市 1993年12月
- 9) 茨城県教育財団 「平成14年度調査遺跡の概要 向原遺跡」『年報』22（財）茨城県教育財団 2003年6月



第41図 福原打越塚群遺構全体図

第5章 上加賀田宮後東遺跡

第1節 遺跡の概要

上加賀田宮後遺跡は、平安時代と近世の複合遺跡である。調査前の現況は畑地で、調査面積は861.68㎡である。調査の結果、平安時代の遺構は竪穴住居跡6軒、土坑1基、近世の遺構は掘立柱建物跡3棟、井戸跡1基、また時期不明の遺構として土坑47基、ピット群1群を確認した。

遺物は、遺物コンテナ（60×40×20cm）に6箱出土している。出土した主な遺物は土師器（坏、碗、高台付皿、甌）、須恵器（坏、蓋）、灰釉陶器（碗）、土師質土器（火鉢、播鉢）、瓦質土器（火鉢）、石製品（支脚、砥石）、土製品（支脚）である。

第2節 基本層序

B 2 b4 区にテストピットを設定し、約1.9m掘り下げて基本土層の観察を行った。

第1層は表土で、層厚は25～30cmである。暗褐色土で炭化粒子、焼土粒子を含み締まりはあるが粘性はない。

第2層は、褐色をしたソフトローム層で、層厚は25～62cmである。炭化粒子、焼土粒子、白色粒子を含み粘性・締まりがある。

第3層は、第2層よりやや暗い褐色をしたソフトローム層で、層厚は20～35cmである。白色粒子などを多く含んでおり、粘性・締まりがある。

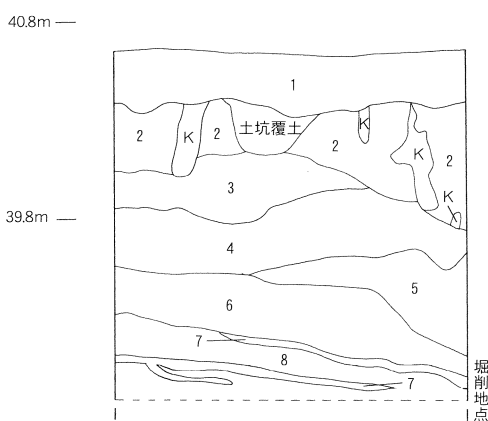
第4層は、浅黄橙色をした粘土層で、層厚は、10～35cmである。白色粒子・赤色粒子などを含んでおり、粘性・締まりがある。

第5層は、黄橙色をした粘土層で、層厚は15～55cmである。直径1～5mmほどの白色粒子などを非常に多く含んでいる。また、鉄分を斑点状に含有しており粘性・締まりがある。

第6層は、第5層よりもやや暗い黄橙色をした砂層で、層厚は10～35cmである。直径1～5mmほどの白色粒子、石英粒を非常に多く含んでいる。鉄分が多いためやや赤みを帯びており、締まりはあるが粘性はない。

第7層は、黄色を呈しており、鉄分で形成されている層であり、層厚は5cmほどである。締まりがある。

第8層は、灰白色をした砂層で、層厚は約20cmである。直径5mmほどの白色粒子、石英粒などで形成されており、鉄分を斑点状に含有している。



第42図 基本土層図



第43図 上加賀田宮後東遺跡調査区位置図

第3節 遺構と遺物

1 平安時代の遺構と遺物

今回の調査では、竪穴住居跡6軒，土坑1基が確認された。以下，遺構と遺物について記述する。

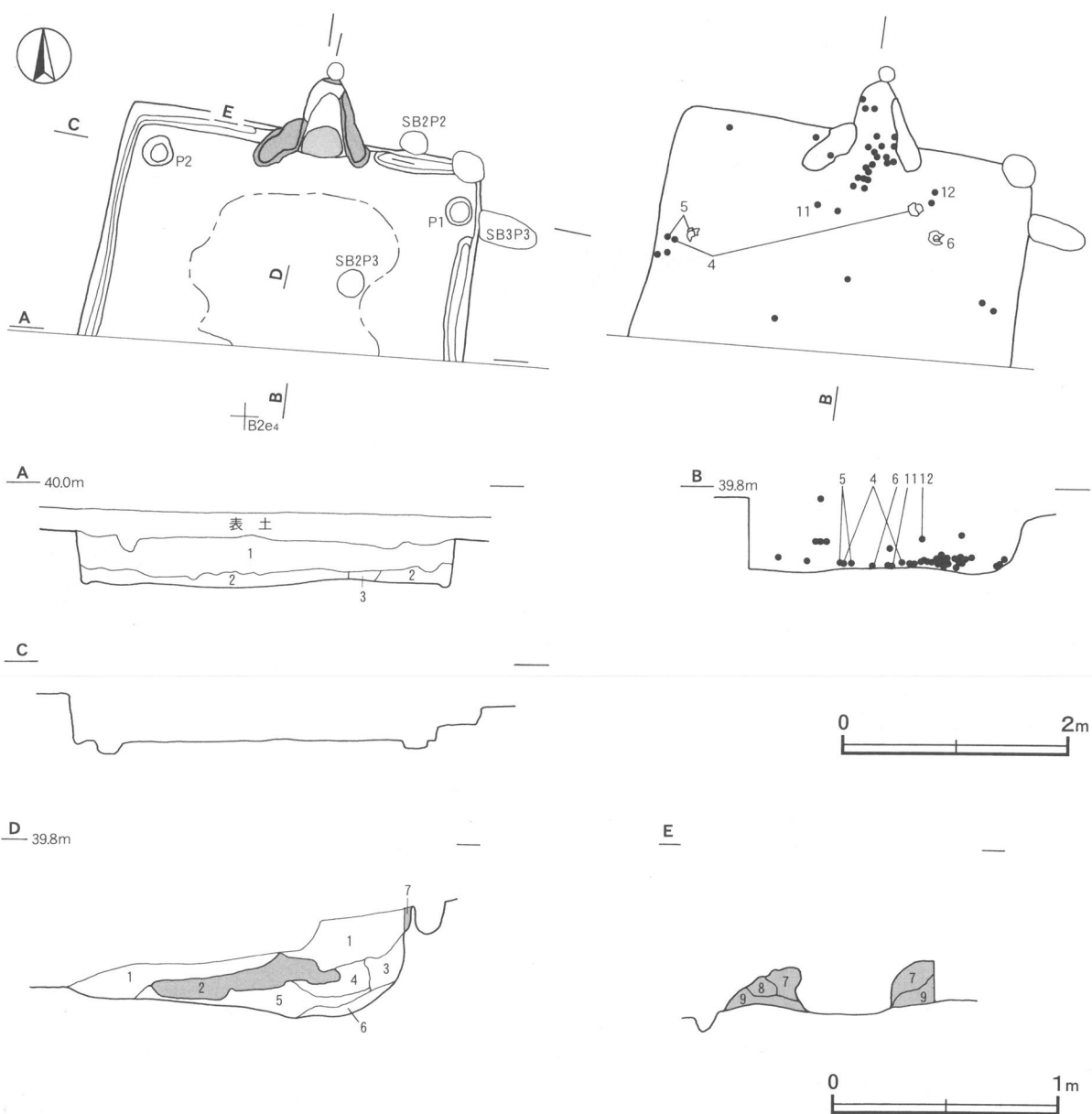
(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第44・45図）

位置 B 2 d4 区に位置し，丘陵裾部に立地している。

重複関係 第2号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 南壁側が調査区域に伸びている。南北軸は2.10mのみ確認され，東西軸が3.34mの方形と推定され，主軸方向はN-6°-Eである。壁高は40~45cmであり，垂直に立ち上がっている。



第44図 第1号住居跡実測図

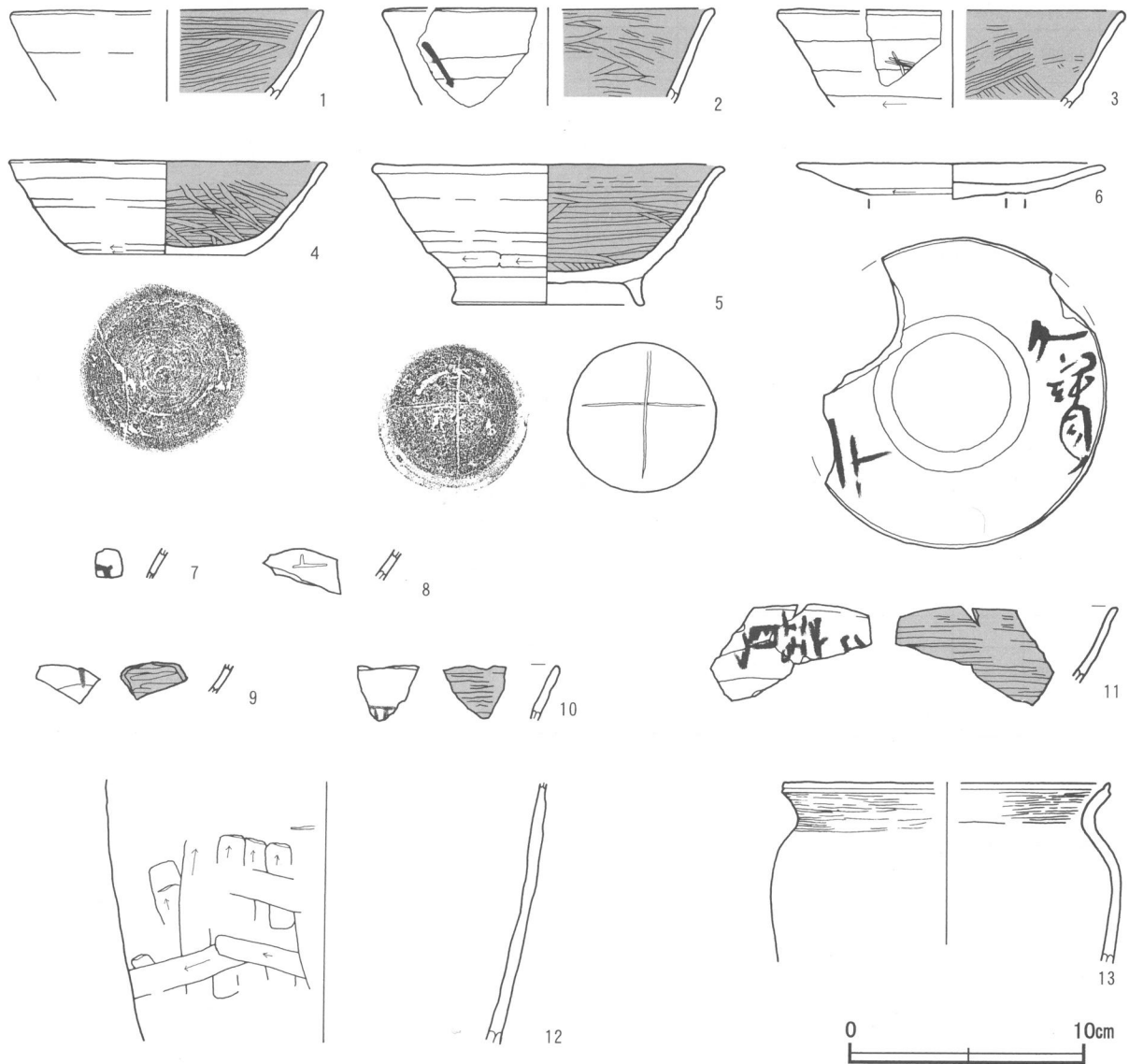
床 平坦である。硬化面は竈前方から中央部にかけて確認された。壁溝は北東コーナー部で途切れているが、各壁に巡っている。

竈 北壁中央部に付設されており、焚き口部から煙道部まで70cm，壁外への掘り込みは54cmである。袖部幅は44cmであり，床面に砂質粘土を貼り付け構築されている。火床部は床面と同じ高さであり，火床面が弱く赤変している。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------|--------|---------------|
| 1 暗褐色 | 焼土ブロック多量，炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | 焼土粒子多量，炭化粒子微量 |
| 2 浅黄橙色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量 | 7 暗赤褐色 | 焼土粒子多量 |
| 3 赤褐色 | 焼土粒子多量 | 8 赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量 |
| 4 暗褐色 | 焼土・粘土ブロック中量，炭化粒子微量 | 9 黄橙色 | ローム粒子中量 |
| 5 褐色 | 焼土粒子中量，炭化粒子・粘土粒子少量，ローム粒子微量 | | |

ピット 2か所。P1・P2は支柱穴と考えられ，それぞれ北東・北西コーナー部付近にある。深さは18～22cmである。



第45図 第1号住居跡出土遺物実測図

覆土 3層からなる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
 3 浅黄色 砂質粘土中量

遺物出土状況 土師器片104点（坏45, 碗21, 高台付皿11, 甕27），須恵器片2点（甕）が出土している。各壁際の床面および覆土下層から出土しており、中央部からの出土はわずかである。特に竈内および竈前方の覆土下層に集中している。1・2・7・9・10・13は覆土から、3は竈内覆土と北西壁付近の覆土から出土した破片が接合したものであり、4は西壁際と竈前方の覆土下層から出土した破片が接合したものである。5は西壁際の覆土下層から斜位で、6は竈前方やや東壁寄りの床面から、8は竈右袖内から、11・12は竈前方の床面および覆土上層から出土している。

所見 時期は、須恵器供膳具が出土していないことおよび出土土器から9世紀末葉と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表(第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[13.4]	(3.9)	-	赤色粒子・雲母・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土	20% 内面黒色処理
2	土師器	坏	[14.2]	(4.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土	5% 墨書 体部 横位「久」 内面黒色処理
3	土師器	坏	[15.0]	(4.2)	-	石英・長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り	竈内・北西壁付近・覆土	10% 刻書 体部「キ」 内面黒色処理
4	土師器	坏	13.6	4.0	6.8	石英・白色粒子	にぶい褐	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り	西壁際・竈前方覆土下層	95% 内面黒色処理
5	土師器	碗	15.0	5.9	8.0	赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	西壁際・覆土下層	80% ヘラ書き 底部「十」 内面黒色処理 PL23
6	土師器	高台付皿	13.3	(1.1)	-	石英・長石・赤色粒子・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	竈前方床面	75% 墨書 体部 横位「久」 内面黒色処理 PL21
7	土師器	坏	-	(1.3)	-	長石	にぶい橙	普通	ロクロナデ	覆土	5% 墨書 体部「口」 内面黒色処理
8	土師器	坏	-	(1.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ	竈右袖内	5% 刻書 体部「口」
9	土師器	坏	-	(1.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り	覆土	5% 墨書 体部「口」 内面黒色処理
10	土師器	坏	-	(2.2)	-	石英・長石	明赤褐	普通	内面ヘラミガキ	覆土	5% 墨書 体部 横位「カ」 内面黒色処理
11	土師器	坏	-	(3.3)	-	長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ	竈前方床面	10% 墨書 体部 横位「久」 内面黒色処理 PL21
12	土師器	甕	-	(11.2)	-	石英・赤色粒子・小礫	橙	普通	体部外面ヘラ削り	竈前方覆土上層	10% 外面煤付着・被熱痕 内面炭化物付着
13	土師器	小形甕	[14.0]	(7.7)	-	白色粒子	赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	覆土	10%

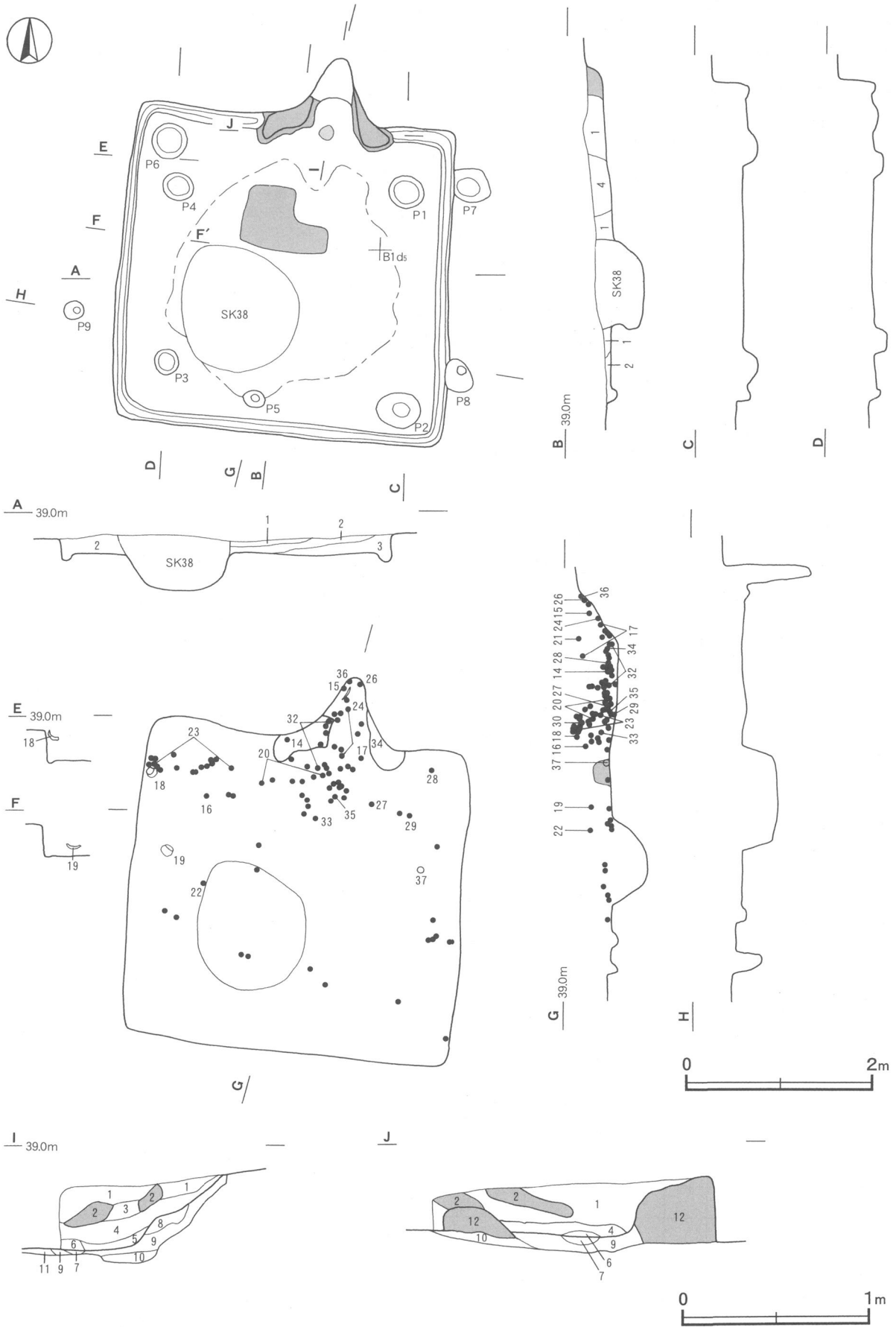
第2号住居跡（第46～48図）

位置 B1c4区に位置し、丘陵裾部に立地している。

重複関係 第38号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.56m, 短軸3.42mの方形で、主軸方向はN-14°-Eである。壁高は16～38cmであり、垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、硬化面は主柱穴に囲まれた中央部で確認された。壁溝は各壁際に巡っている。



第46图 第2号住居跡実測図

竈 北壁中央部に付設されており、焚き口部から煙道部まで100cm、壁外への掘り込みは80cmである。袖部幅は64cmであり、左袖部は暗褐色土の上に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床部はわずかにくぼみ、火床面が赤変硬化している。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|--------|-------------|
| 1 黒褐色 | 粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 赤褐色 | 焼土ブロック多量 |
| 2 黄橙色 | 焼土粒子・炭化粒子少量 | 8 赤褐色 | 焼土ブロック中量 |
| 3 灰褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子微量 | 9 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 | 焼土・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 10 暗褐色 | 炭化粒子微量 |
| 5 灰褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 11 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 6 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 黄橙色 | ロームブロック少量 |

ピット 9か所。主柱穴はP1～P4で、深さは14～22cmである。出入り口施設に伴うピットはP5が相当し、深さは8cmである。P7～P9は34～78cmであり、重複関係がみられないことから壁外柱穴の可能性はある。

覆土 4層からなる。ロームブロックが各層とも多く含まれていることから人為堆積と考えられる。

土層解説

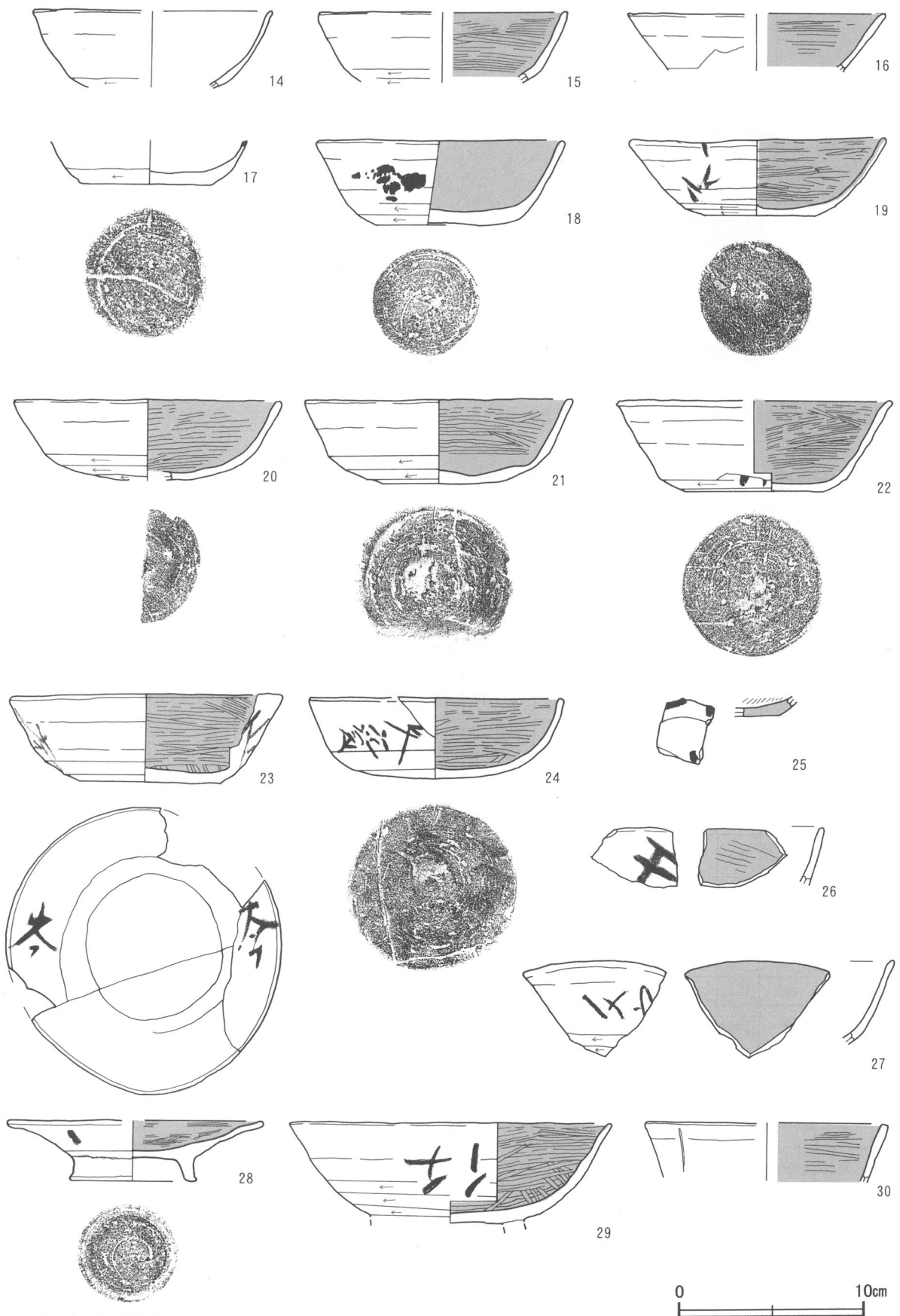
- | | | | |
|-------|-----------------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック多量・炭化粒子・粘土粒子少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量・焼土粒子・炭化粒子・砂粒・小礫少量 | 4 黄橙色 | 粘土ブロック多量 |

遺物出土状況 土師器片227点(坏63, 椀45, 高台付皿10, 甕108), 須恵器片3点(甕), 土製支脚1点が出土している。竈内および竈前方, 北西コーナー部の床面から覆土下層に集中している。14は竈左袖部内から, 15・17・21・24・26・31・34・36は竈内から, 16は西壁寄りの覆土中層から, 18は西壁際の覆土上層から斜位で, 19は西壁際の覆土下層から斜位で出土している。20は竈前方の覆土中層と下層の破片が接合したものである。22は中央部の覆土中層から, 23は北西コーナー部の覆土上層と覆土下層の破片が接合したものである。25は覆土から, 27・29・33・35は竈前方の覆土上層から床面にかけて, 28は北東コーナー部付近の覆土下層から, 30は覆土からそれぞれ出土している。32は竈左袖部内と竈前方の破片が接合したものである。37は東壁寄りの床面から出土している。

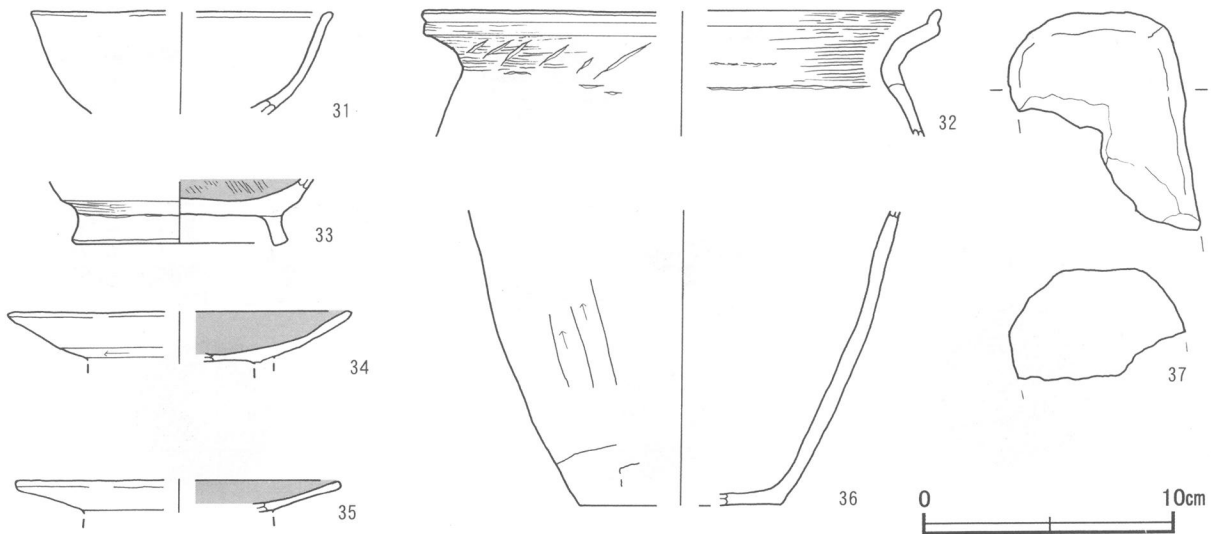
所見 時期は, 須恵器供膳具が出土していないことや出土土器から9世紀末葉と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表(第47・48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	土師器	坏	[12.8]	(4.2)	-	石英・長石・赤色粒子・雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り	竈左袖内	20% 内面煤付着・赤変・器面荒れ
15	土師器	坏	[13.2]	(3.8)	-	石英・長石・赤色粒子・雲母・小礫	にぶい褐	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り	竈内	20% 内面黒色処理
16	土師器	坏	[13.8]	(3.1)	-	石英・赤色粒子・雲母	にぶい黄橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土中層	10% 内外面焼土付着 内面黒色処理
17	土師器	坏	-	(2.4)	6.6	石英・長石・赤色粒子・雲母・小礫	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ削り	竈内	30% 内外面焼土付着 赤変 内面黒色処理剥離
18	土師器	坏	13.2	4.7	5.5	石英・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ削り	西壁際覆土上層	95% 体部外面漆付着 内面黒色処理 P1.23
19	土師器	坏	13.7	4.2	6.0	石英・長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ削り, 内面一定方向ヘラミガキ	西壁際覆土下層	100% 墨書 体部「□」 内面黒色処理
20	土師器	坏	14.2	4.3	6.0	石英・長石・赤色粒子	灰黄褐	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ削り, 内面一定方向ヘラミガキ	竈前方覆土中・下層	50% 内面黒色処理 外面黒変(二次的)
21	土師器	坏	14.4	4.5	7.8	石英・長石・雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ削り, 内面一定方向ヘラミガキ	竈内	50% 内面黒色処理



第47図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第48図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
22	土師器	坏	[14.6]	4.9	7.4	石英・長石・雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り, 内面一定方向ヘラミガキ	中央部覆土中層	50% 体部外面墨痕 内面黒色処理
23	土師器	坏	14.6	4.8	7.5	石英・長石	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り, 内面不定方向ヘラミガキ	北西角覆土上・下層	85% 墨書 体部 横位「岑」 PL22
24	土師器	坏	13.5	4.4	8.8	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り, 内面一定方向ヘラミガキ	竈内	80% 墨書 体部 横位「久」 内面黒色処理 PL21
25	土師器	坏	-	(1.0)	-	石英・長石・赤色粒子・雲母	にぶい橙	普通	底部内面一定方向ヘラミガキ, 底部回転ヘラ切り	覆土	5% 体部・底部外面墨痕 内面黒色処理
26	土師器	坏	-	(3.0)	-	長石	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ	竈内	5% 墨書 体部 横位「久」 内面黒色処理 PL21
27	土師器	坏	-	(4.5)	-	石英・長石・赤色粒子・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り	竈前方覆土中層	5% 墨書 体部 横位「久」 内面黒色処理 PL21
28	土師器	高台付皿	13.5	3.3	6.6	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端横ナデ, 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	北西角覆土下層	50% 体部外面墨痕 内面黒色処理 PL23
29	土師器	高台付椀	17.4	(5.5)	-	石英・長石・赤色粒子・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け, 内面不定方向ヘラミガキ	竈前方床面	80% 墨書 体部 逆位「仔」 内面黒色処理 PL22
30	土師器	椀	[13.2]	(3.1)	-	石英・長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土	10% ヘラ書き 体部「」 内面黒色処理
31	土師器	小椀	[12.0]	(4.1)	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ	竈内	15% 体部内外面赤変
32	土師器	甕	[20.6]	(5.0)	-	赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 頸部ヘラ状工具のあたり, 輪積み痕	竈左袖内・竈前方	10%
33	土師器	高台付椀	-	(2.5)	8.4	石英・長石・赤色粒子・雲母・小礫	にぶい褐	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端横ナデ, 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け, 底部内面一定方向ヘラミガキ	竈前方覆土中層	20% 内面黒色処理
34	土師器	高台付皿	[13.6]	(2.1)	-	石英・長石・赤色粒子・雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	竈内	25% 内面黒色処理
35	土師器	高台付皿	[13.0]	(1.3)	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ	竈前方覆土下層	10% 内面黒色処理
36	土師器	甕	-	(11.8)	[8.0]	赤色粒子・雲母	黒褐	普通	体部・底部外面ヘラ削り	竈内	30% 外面焼土付着 内面炭化物付着 内外面器面荒れ

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
37	支脚	(8.7)	7.7	(4.5)	(186.6)	粘土	全面強く赤変	東壁付近床面	

第4号住居跡（第49～51図）

位置 B1a7区に位置し、丘陵裾部に立地している。

重複関係 第6号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東西軸5.60m、南北軸6.00mの方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は10～40cmほどで、垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、硬化面は竈前方から中央部にかけて確認された。壁溝は各壁際に巡っている。

竈 北壁中央部に付設されており、天井部が遺存していた。焚き口部から煙道部まで105cm、壁外の掘り込みは80cmである。袖部幅は50cmであり、土師器甎片を芯材として床面に砂質粘土を貼り付けて構築されている。

竈の両側の北壁には、砂質粘土が部分的に貼り付いているのが確認された。

竈土層解説

1 黒褐色	粘土粒子中量、焼土粒子少量	7 赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量
2 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子多量
3 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	9 黄橙色	焼土粒子・炭化粒子多量
4 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子中量	10 黄橙色	焼土粒子中量
5 暗赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量	11 黄橙色	ロームブロック多量
6 暗褐色	焼土粒子・粘土粒子少量	12 黄橙色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量

ピット 5か所。支柱穴はP1～P4で、深さ10～20cmであり、出入り口施設に伴うピットはP5が相当し、深さは10cmである。

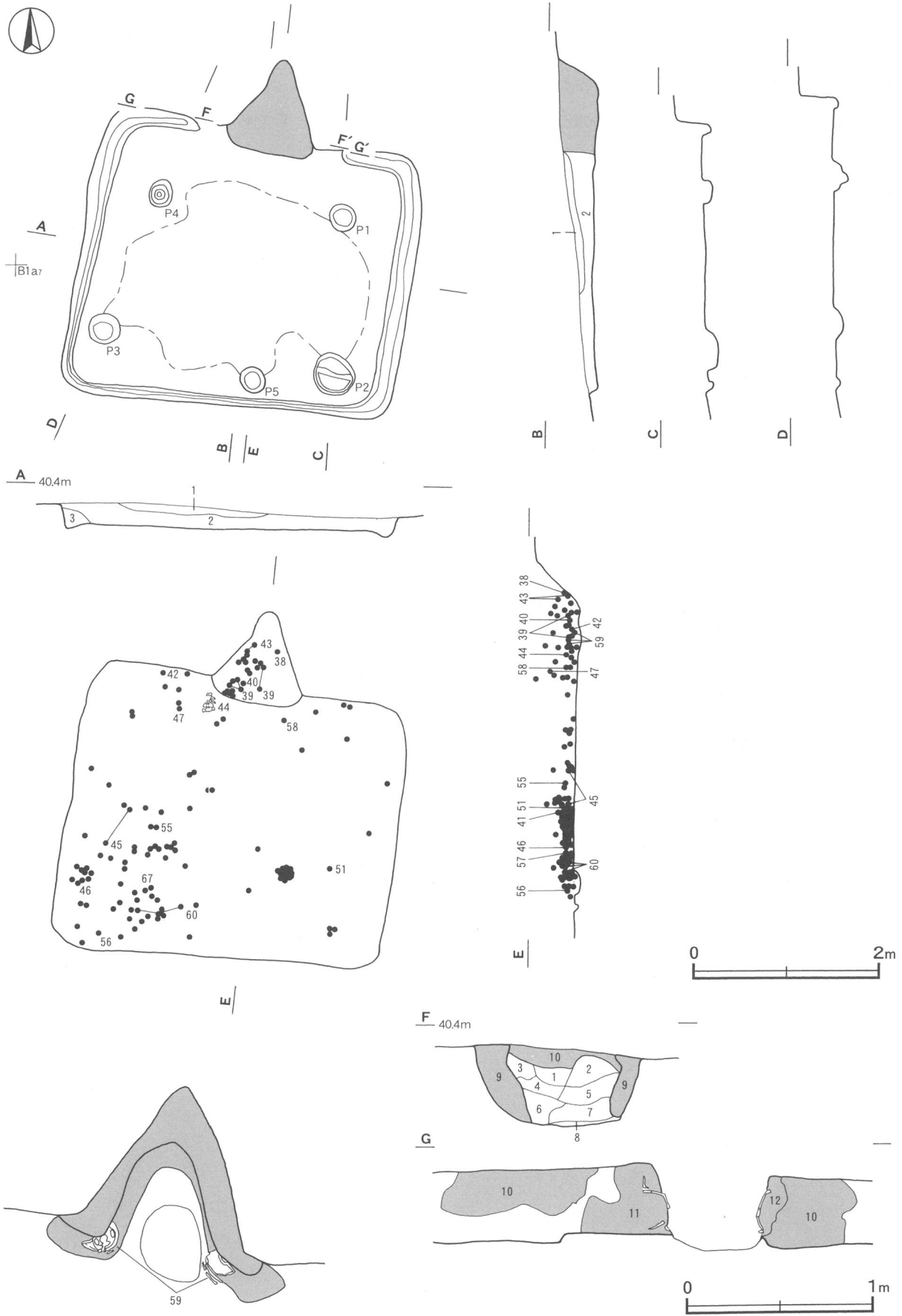
覆土 3層からなる。レンズ状の堆積をしており、自然堆積と考えられる。

土層解説

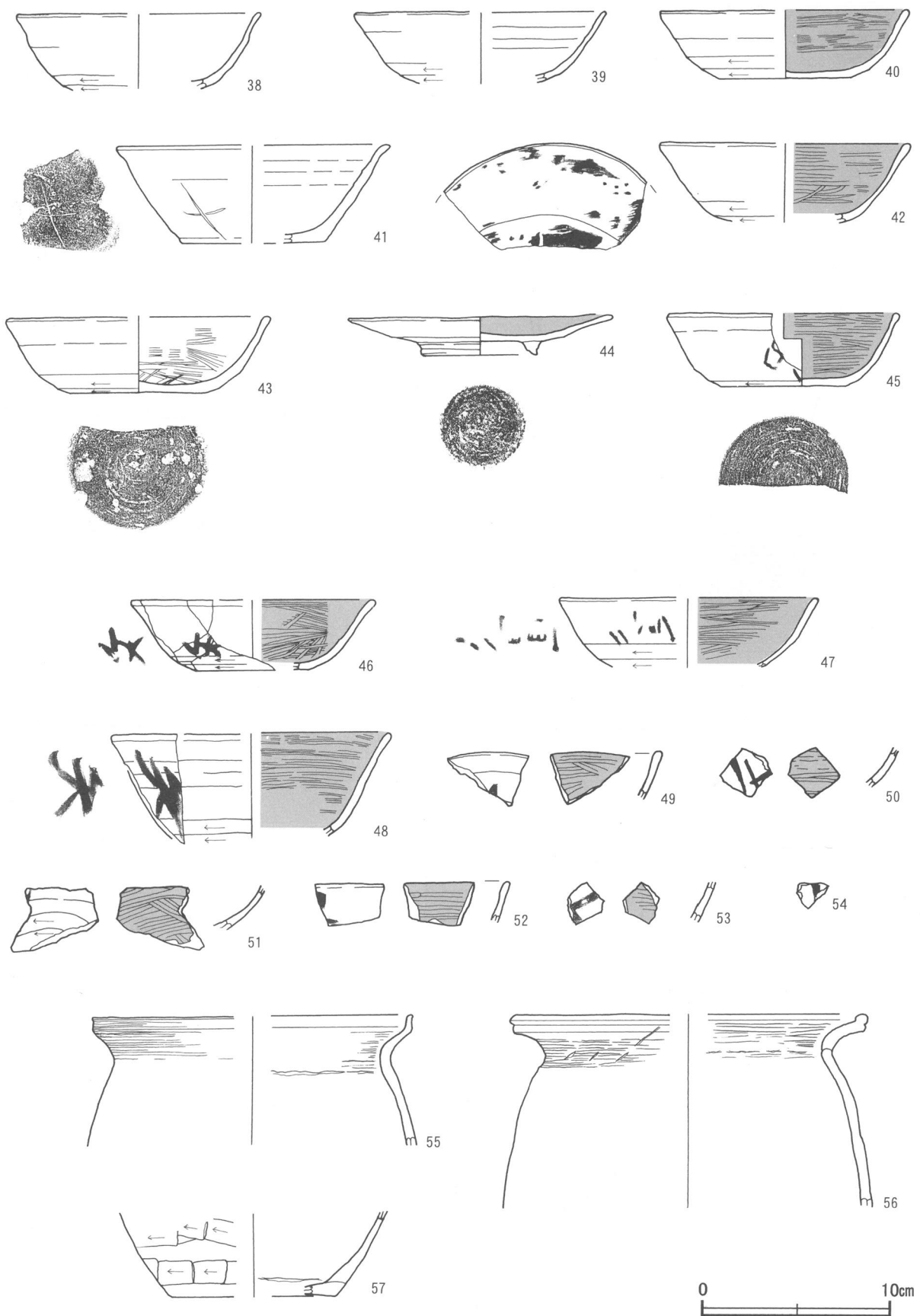
1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒・小礫少量	3 褐色	ローム粒子中量・炭化粒子微量
2 黒褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒・小礫少量		

遺物出土状況 土師器片150点（坏53，椀45，高台付皿15，甕35，甎2），須恵器片3点（坏1，甕2）が出土している。竈内と南西コーナー部付近の床面から覆土下層に集中している。38・39・40・43は竈内から、41・48・49・50・52・53・54・61は覆土から、42は北壁際の覆土下層から、44・47・58は竈前方覆土下層から、45・46・55は西壁付近の覆土下層から、51は東壁付近の覆土下層から、56・57・60は南西コーナー部際の覆土下層から出土している。59は竈袖部の芯材として再利用されており、逆位で出土している。

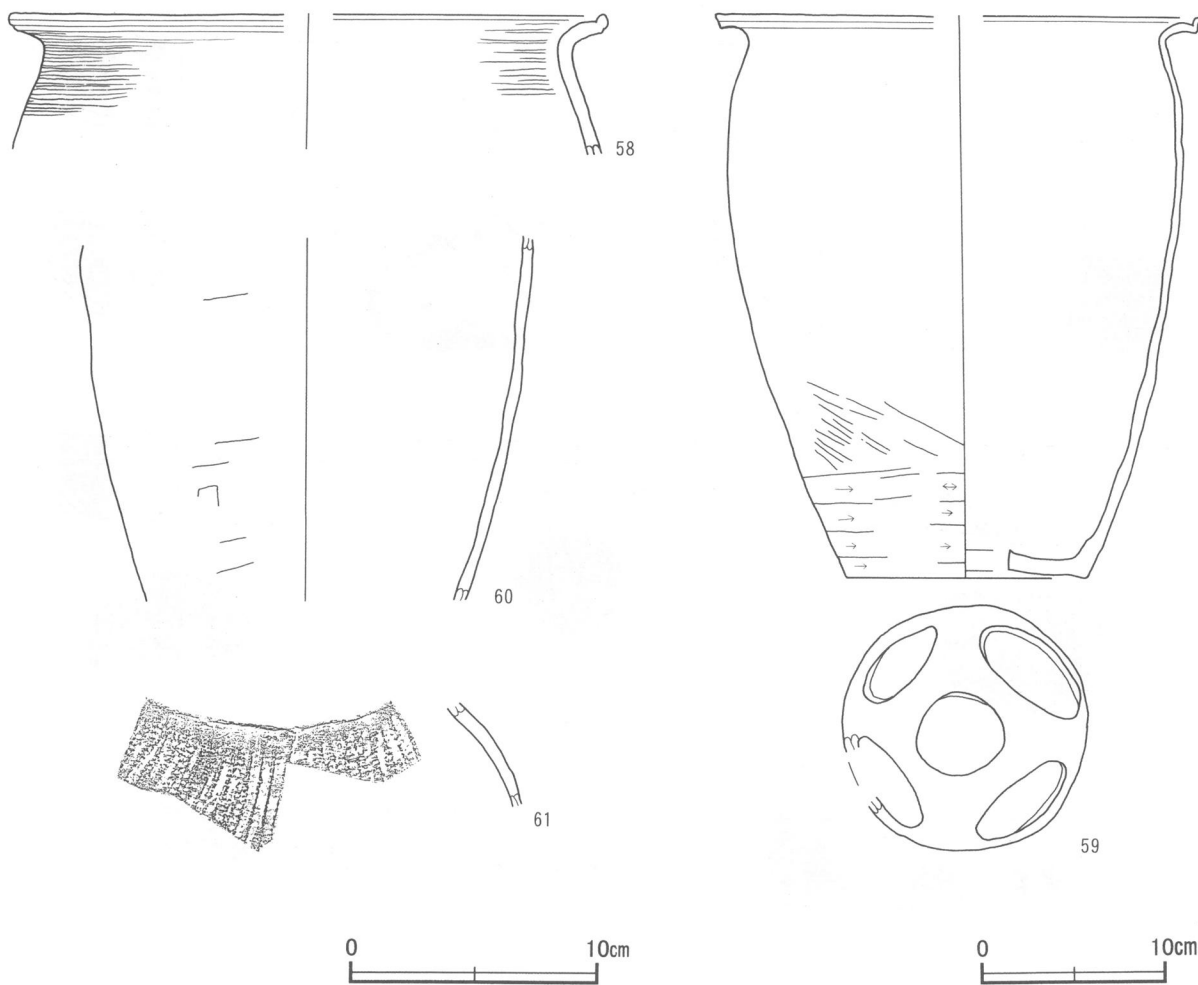
所見 土器からはほとんど時期差は見られないが、9世紀末葉の第6号住居跡を掘り込んでいることや須恵器供膳具が伴わないことや出土土器から、時期は9世紀末葉から10世紀初頭と考えられる。竈両側の壁に粘土が付着していたことから、棚状施設の存在が推測される。



第49图 第4号住居跡実測図



第50图 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第51図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

第4号住居跡出土遺物観察表(第50・51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
38	土師器	椀	[12.8]	(4.0)	-	長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り	竈内	30% 体部内外面器面荒れ 外面一部赤変
39	土師器	坏	[13.2]	(3.7)	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り	竈内	20% 体部内外面器面荒れ 外面一部赤変
40	土師器	坏	[13.0]	3.6	7.0	長石・赤色粒子・雲母・小礫	にぶい褐	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り, 底部内面一定方向ヘラ削り	竈内	30% 底部外面器面荒れ 内面黒色処理
41	須恵器	坏	[14.2]	5.2	[7.6]	石英・長石・海綿骨針	灰オリーブ	普通	底部回転ヘラ切り	覆土	30% 刻書 体部「十」
42	土師器	坏	[13.2]	(4.2)	-	赤色粒子・雲母	黒	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り	北壁際覆土下層	20% 外面漆付着 PL23
43	土師器	坏	[13.8]	4.0	7.2	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り, 底部内面一定方向ヘラ削り	竈内	50% 内外面器面荒れ
44	土師器	高台付皿	13.8	2.1	5.9	長石・赤色粒子・雲母・小礫	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	竈前方覆土下層	80% 外面器面荒れ 内面黒色処理 PL23
45	土師器	坏	[12.0]	3.8	6.6	石英・長石・赤色粒子・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り	西壁付近覆土下層	45% 墨書 体部「□」 内面黒色処理
46	土師器	坏	[13.0]	3.7	[6.0]	石英・長石・赤色粒子・雲母・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り, 底部内面不定方向ヘラ削り	西壁付近覆土下層	35% 墨書 体部 横位「矢」 内面黒色処理
47	土師器	坏	[13.6]	(3.7)	-	石英・長石・赤色粒子・雲母・小礫	にぶい褐	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り	竈前方覆土下層	40% 墨書 体部 横位「久カ寶カ」 内面黒色処理

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
48	土師器	椀	[14.8]	(5.5)	-	石英・長石・赤色粒子・小礫	にぶい・橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り	覆土	40% 墨書 体部 横位「矢」内面黒色処理 PL21
49	土師器	坏	-	(2.6)	-	石英・長石	にぶい・黄橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土	5% 墨書 体部「□」内面黒色処理
50	土師器	坏	-	(2.1)	-	石英・長石	にぶい・橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土	5% 墨書 体部「久カ」内面黒色処理 PL21
51	土師器	坏	-	(2.1)	-	長石・雲母	にぶい・黄橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り	東壁付近覆土下層	5% 墨書 体部「寶カ」内面黒色処理
52	土師器	坏	-	(2.1)	-	石英・長石・赤色粒子・雲母	にぶい・橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土	5% 墨書 体部「千カ」内面黒色処理
53	土師器	坏	-	(2.3)	-	砂粒	にぶい・橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土	5% 墨書 体部「□」内面黒色処理
54	土師器	坏	-	(1.4)	-	砂粒	にぶい・橙	普通	ロクロナデ	覆土	5% 外面墨痕
55	土師器	甕	[16.9]	(6.8)	-	石英・長石・小礫	褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 輪積み痕	西壁付近覆土下層	15% 体部外面弱く赤変
56	土師器	甕	[18.6]	(10.2)	-	長石・雲母・小礫	にぶい・橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 頸部ヘラ状工具のあたり, 輪積み痕	南西角覆土下層	10% 体部外面焼土付着 PL23
57	土師器	甕	-	(4.4)	[8.6]	長石・赤色粒子	灰褐	普通	体部外面ヘラ削り, 輪積み痕	南西角覆土下層	10% 体部外面煤付着・弱く赤変
58	土師器	甕	[24.0]	(5.5)	-	雲母・小礫	にぶい・黄褐	普通	口縁部内外面横ナデ	竈前方覆土下層	10% 口縁部内外面弱く赤変
59	土師器	甗	[25.5]	29.7	12.8	石英・長石・赤色粒子・小礫	にぶい・橙	普通	体部外面下半ヘラ削り, 内面ナデ	竈袖内	40% 体部外面上半・内面下半器面荒れ, 底部内面赤変 PL24
60	土師器	甕	-	(14.5)	-	長石・雲母	褐	普通	体部下半ヘラ削り	南西角覆土下層	15% 体部外面強く赤変・焼土付着 内外面器面荒れ
61	須恵器	甕	-	(4.1)	-	石英・長石・雲母	灰	普通	ロクロナデ	覆土	5%

第5号住居跡（第52図）

位置 A1j5区に位置し、丘陵裾部に立地している。

規模と形状 東西軸が2.45m、南北軸は南側が削平されているため硬化面の範囲から1.53mのみ確認され、方形と推定される。主軸方向はN-14°-Eである。壁高は47cmであり、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、硬化面は竈前方から中央部にかけて確認された。壁溝は確認されなかった。

竈 北壁中央部に付設されており、焚き口部から煙道部まで80cm、壁外への掘り込みは60cmである。袖部幅は20cmであり、袖部は床面の上に砂質粘土を貼り付けて構築している。火床部はわずかにくぼんでおり、火床面が赤変硬化している。

竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量	8 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子微量	9 褐色	焼土ブロック中量, 炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量	10 黄橙色	粘土
4 暗褐色	ローム粒子中量	11 赤褐色	焼土ブロック多量
5 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量	12 赤褐色	焼土粒子中量
6 黄橙色	粘土ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量	13 黄橙色	ロームブロック中量
7 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量		

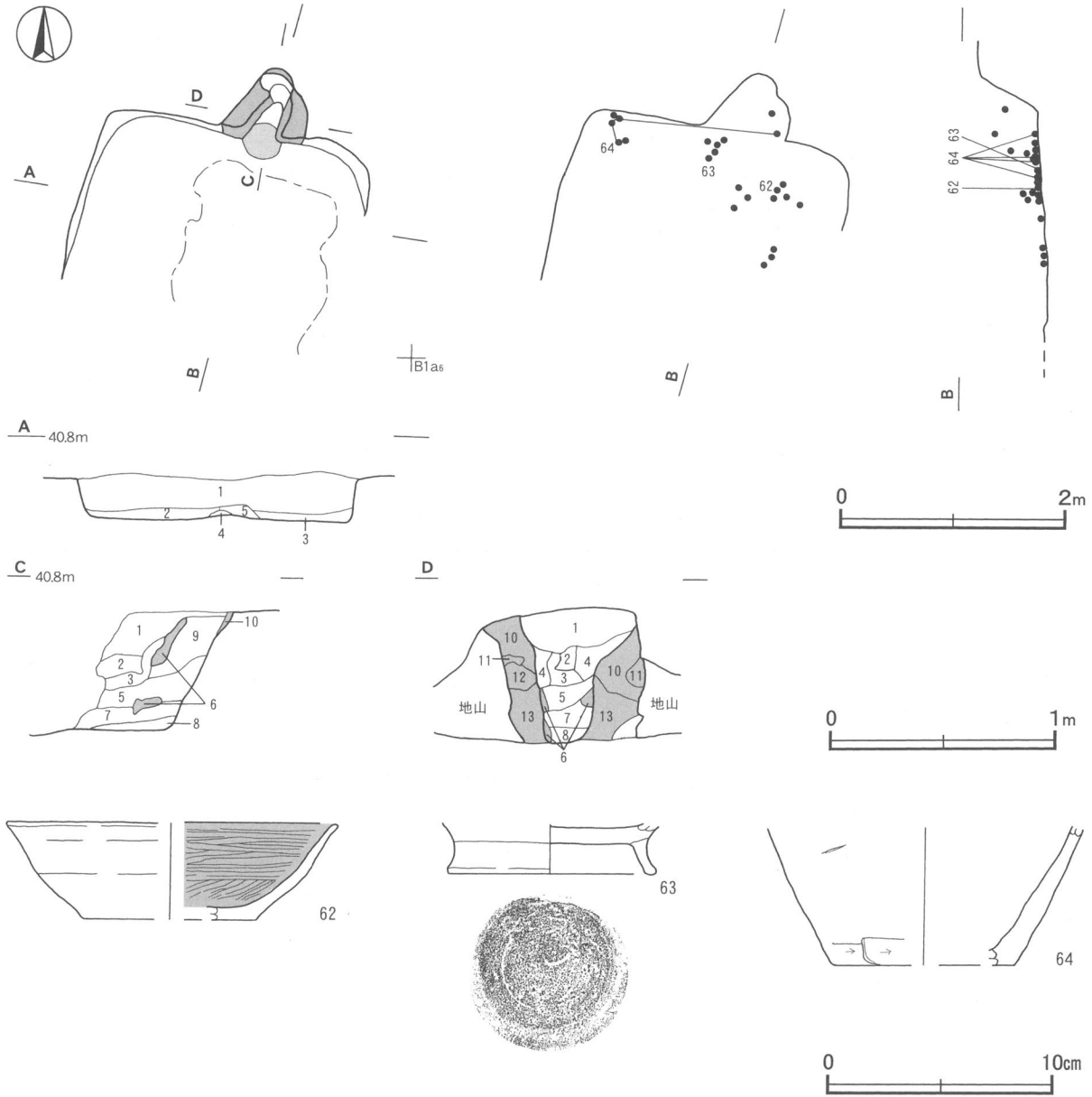
覆土 5層からなる。各層にロームブロックが含まれており、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量, 粘土粒子微量	4 暗赤褐色	焼土ブロック中量・ロームブロック少量, 砂粒少量
2 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量	5 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量, 粘土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化物微量		

遺物出土状況 土師器片96点（坏63，碗10，甕23），須恵器片2点（甕），流れ込みと考えられる縄文土器片が出土している。竈前方の床面から覆土下層に集中している。62・63は竈前方の床面から，64は北西コーナー部付近の床面から出土している。

所見 時期は，須恵器供膳具が出土していないことや出土土器から9世紀末葉と考えられる。



第52図 第5号住居跡・出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表(第52図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
62	土師器	坏	[14.6]	(4.3)	[7.6]	石英・長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ，底部回転ヘラ切り 後ナデカ	竈前方床面	50% 内面黒色処理
63	土師器	碗	-	(2.1)	9.2	石英・長石・赤色 粒子・雲母・小礫	にぶい赤褐	普通	内面ヘラミガキ，底部回転ヘラ切り 後高台貼り付け	竈前方床面	20% 被熱痕 焼土付着 内面黒色処理
64	土師器	甕	-	(6.1)	[8.0]	石英・長石・雲母・ 小礫	橙	普通	体部下半ヘラ削り，内面ナデ	北西角床面	20% 体部外面赤変 内 面器面荒れ・炭化物付着

第6号住居跡 (第53・54図)

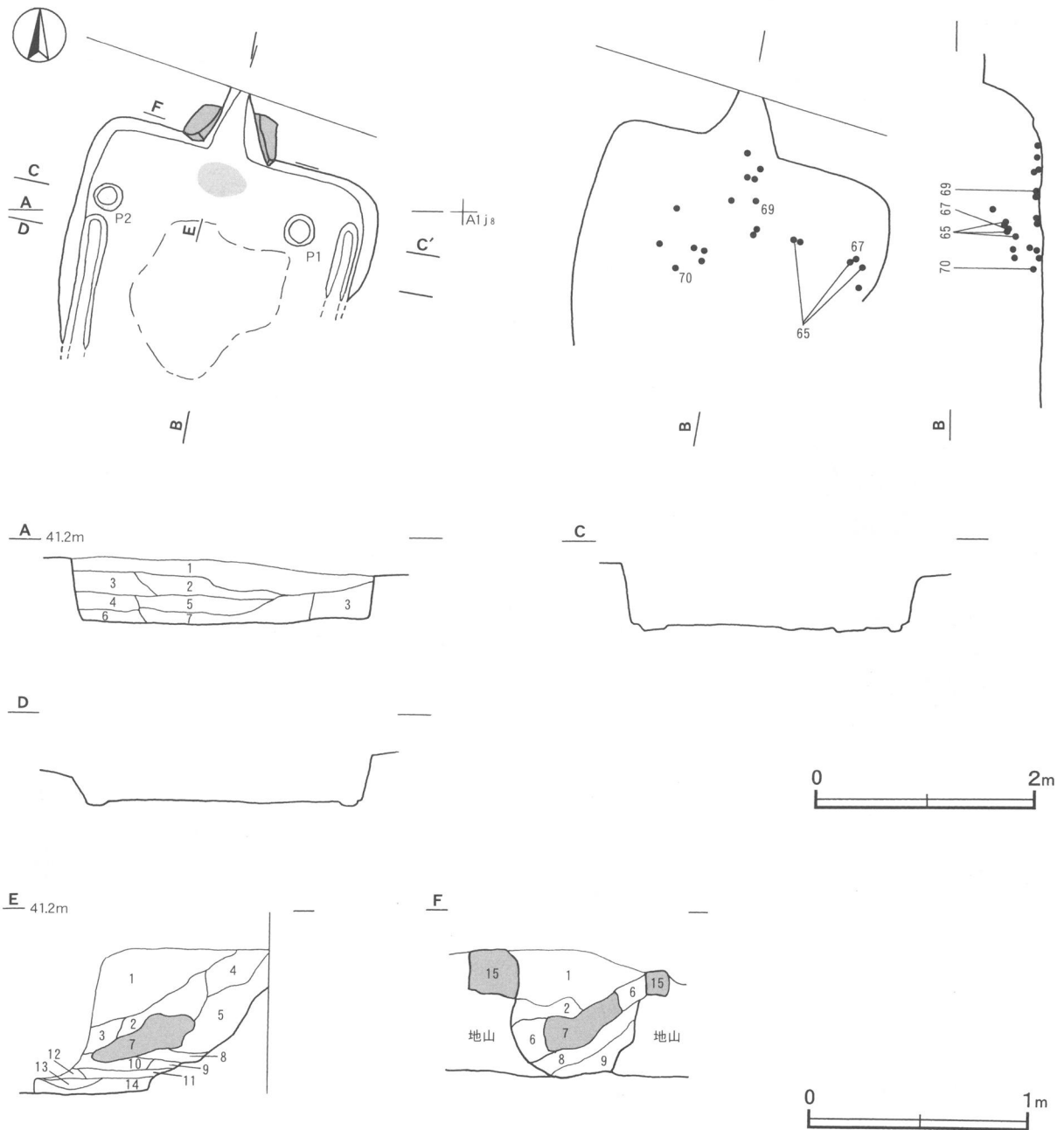
位置 A1j7区に位置し、丘陵裾部に立地している。

重複関係 第4号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東西軸が2.74m、南北軸は南側が削平されているため硬化面の範囲から2.10mのみ確認され、方形と推定される。主軸方向はN-9°-Eである。壁高は30~50cmあり、垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、硬化面は竈前方から中央部にかけて確認された。壁溝は東壁と西壁の一部で確認された。

竈 北壁中央部に付設されており、焚き口部から煙道部まで100cm、壁外への掘り込みは62cm確認され、さらに調査区域外に延びている。袖は確認されなかったが、煙道部側面は地山を掘り、砂質粘土を貼り付けている。



第53図 第6号住居跡実測図

竈土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土ブロック, 炭化粒子少量 | 9 赤褐色 | 焼土ブロック多量 |
| 2 暗褐色 | 焼土中量, 粘土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 10 暗褐色 | 焼土ブロック多量, 粘土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | 焼土ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | 焼土ブロック中量, 粘土ブロック微量 | 12 赤褐色 | 焼土ブロック多量 |
| 5 暗褐色 | 焼土粒子多量, 粘土ブロック微量 | 13 暗褐色 | 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 | 粘土ブロック少量 | 14 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 黄橙色 | 粘土ブロック多量 | 15 黄橙色 | 焼土ブロック中量 |
| 8 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

ピット 2か所。P1・P2は支柱穴と考えられ、それぞれ北東・北西コーナー部付近にある。深さは6～10cmである。

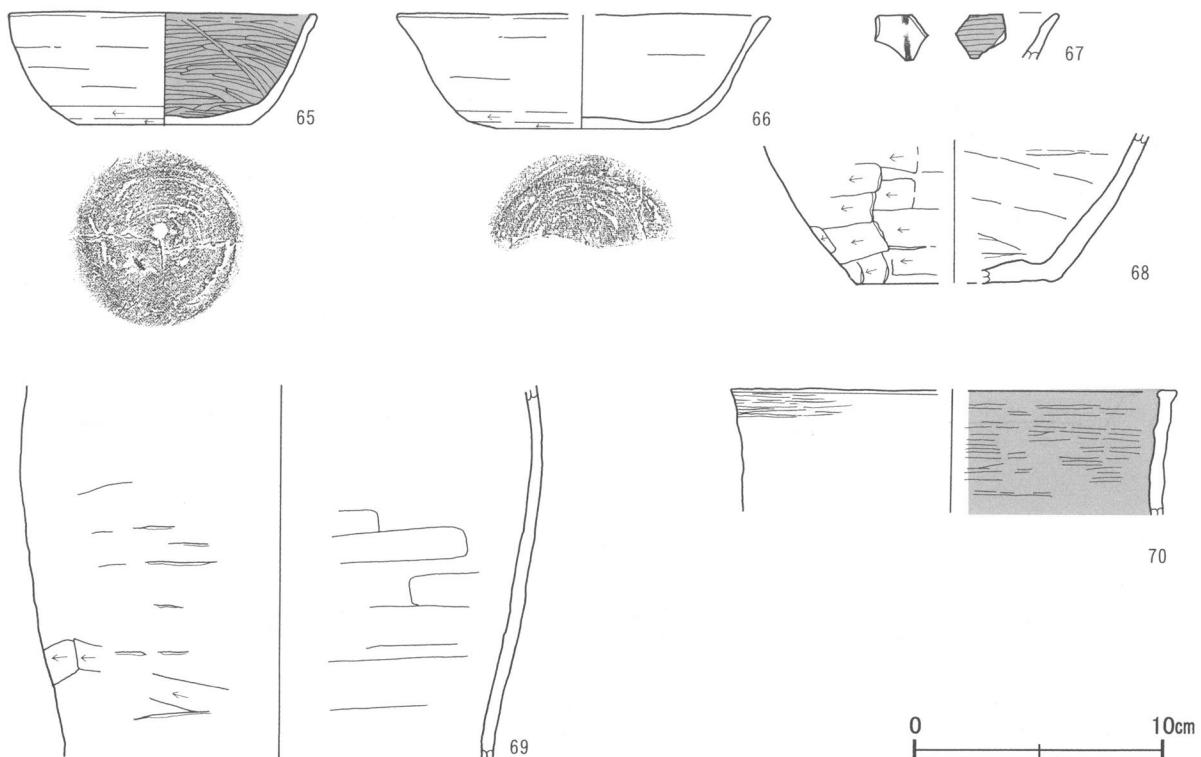
覆土 7層からなる。ブロック状に堆積していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片152点(坏63, 碗45, 甕44), 須恵器片1点(甕)が出土している。竈前方および中央部付近の床面から覆土中層に集中している。65・67はP1および東壁付近の覆土中層から, 66・68は覆土から, 69は竈前方の床面から, 70は中央部の覆土下層から出土している。

所見 時期は, 須恵器供膳具が出土していないことや出土土器および第4号住居との重複関係から, 9世紀末葉と考えられる。



第54図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表(第54図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
65	土師器	坏	12.4	4.5	7.0	石英・長石・赤色 粒子・雲母・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ、体部下端回転ヘラ削り、底部回転ヘラ削り、内面一定方向ヘラミガキ	P1・東壁付近 覆土中層	70% 内面黒色処理
66	土師器	坏	[15.0]	4.6	7.0	石英・長石・赤色 粒子・雲母・小礫	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り、底部回転ヘラ削り	覆土	40% 外面赤変
67	土師器	坏	-	(1.8)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ	P1・東壁付近 覆土中層	5% 外面墨痕 内面黒色処理
68	土師器	甕	-	(5.8)	[8.0]	石英・長石・ 赤色粒子・小礫	にぶい橙	普通	体部外面下半ヘラ削り、内面ヘラナデ	覆土	10% 体部外面下半被熱痕
69	土師器	甕	-	(15.0)		石英・長石・ 赤色粒子・小礫	にぶい橙	普通	体部外面下半ヘラ削り、内面ヘラナデ	竈前方床面	10% 体部外面赤変・器面荒れ
70	土師器	鉢	[18.0]	(5.0)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	内面ヘラミガキ	中央部覆土 下層	10% 内面黒色処理

第7号住居跡(第55～57図)

位置 A1is区に位置し、丘陵裾部に立地している。

規模と形状 東西軸3.08m、南北軸2.92mの方形で、主軸方向はN-6°-Eである。壁高は7～62cmであり、垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、硬化面は確認されなかった。壁溝は各壁際に巡っている。

竈 北壁中央部に付設されており、焚き口部から煙道部まで102cm、壁外への掘り込みは55cmである。袖部幅は56cmあり、床面に砂質粘土を貼り付けて構築している。左袖部寄りに自然礫を立てて支脚としている。火床部はわずかにくぼんでおり、火床面が弱く赤変している。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | 粘土粒子多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量 | 10 黄橙色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 黄橙色 | ロームブロック中量 |
| 6 暗褐色 | 粘土粒子中量、ロームブロック少量 | | |

ピット 4か所。主柱穴はP1～P4で、各コーナー部寄りにあり、深さはともに約10cmである。

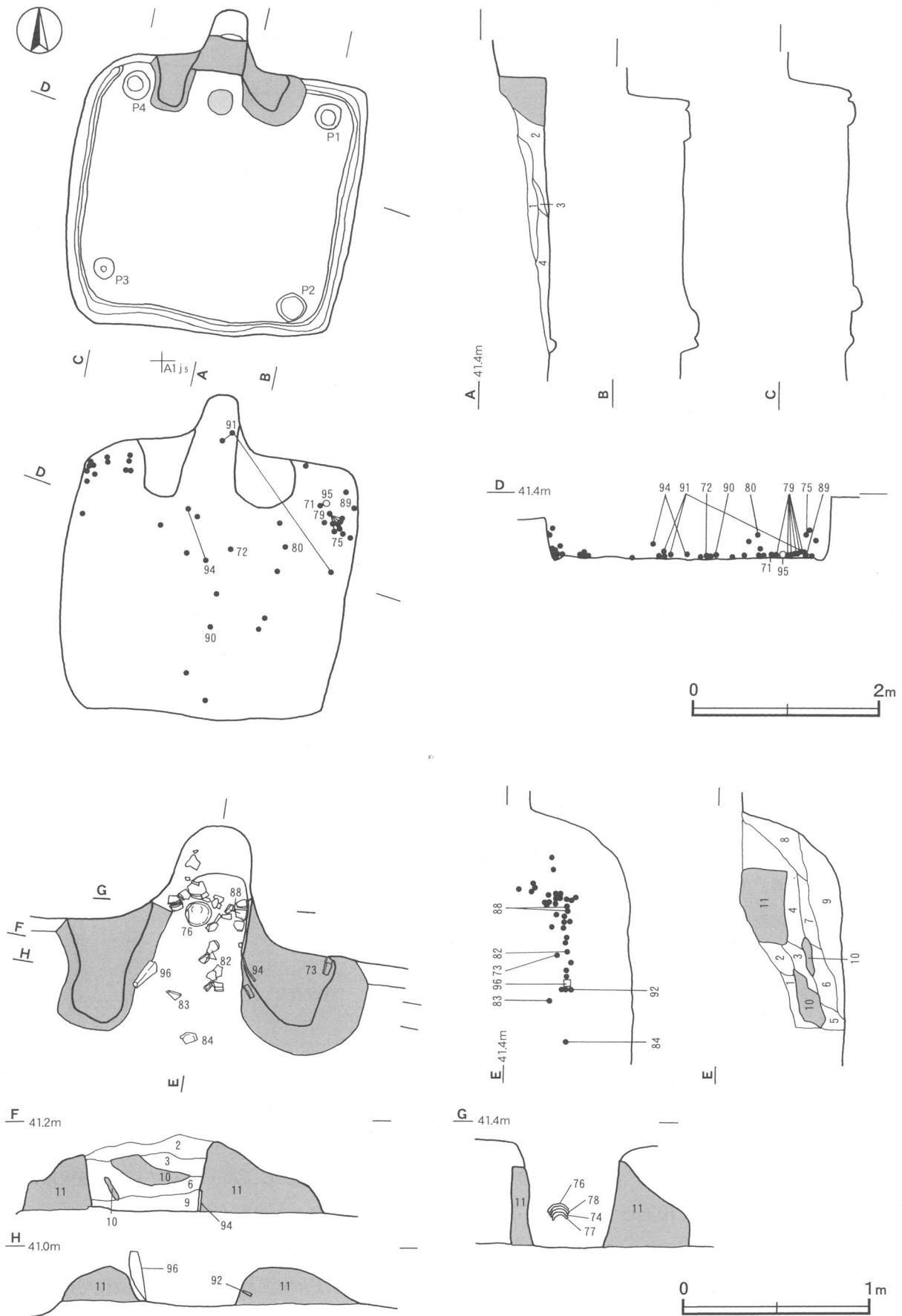
覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

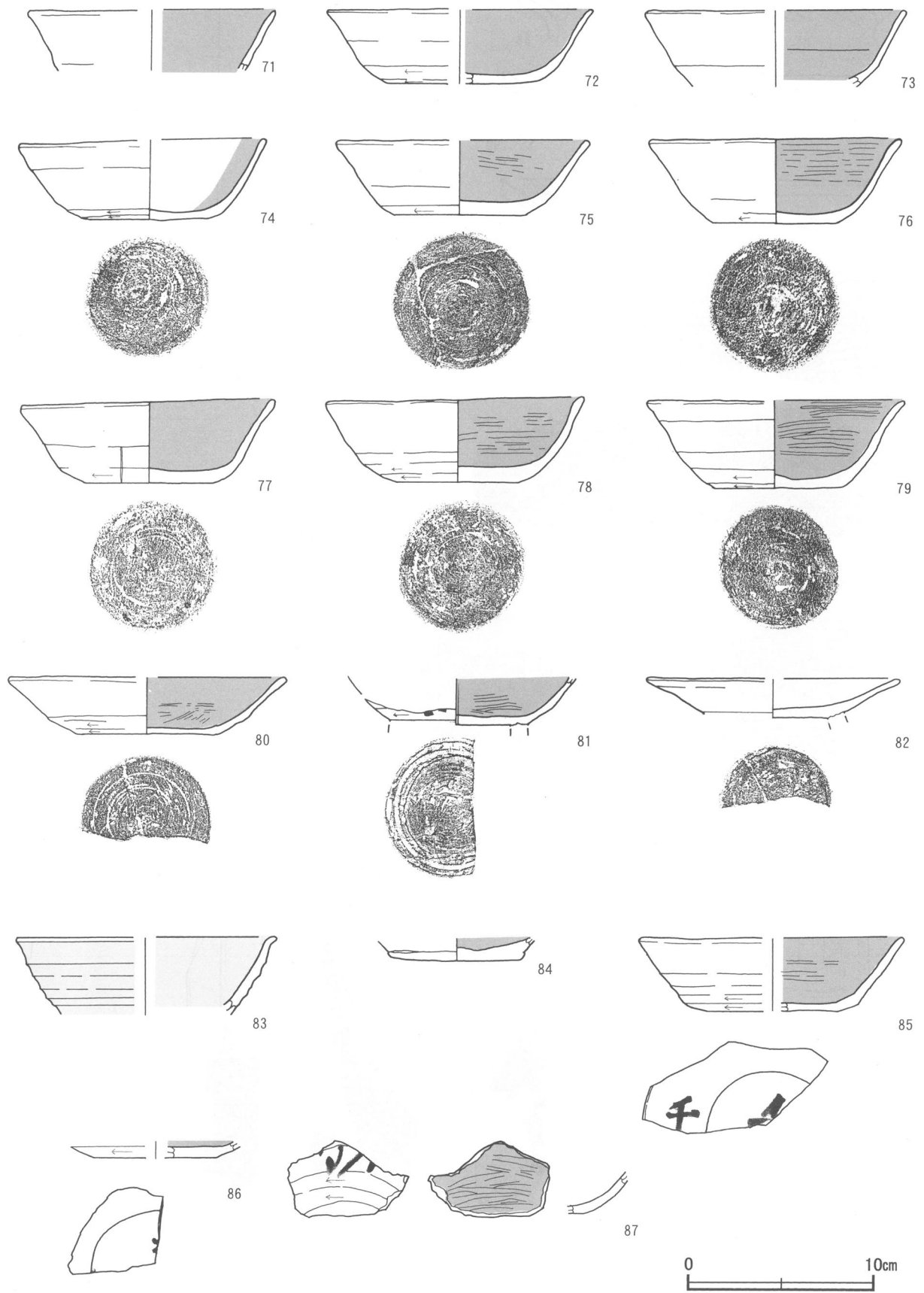
- | | | | |
|-------|----------------------------------|----------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量、砂粒中量、鹿沼パミス少量 | 4 にぶい黄褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子・粘土ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量、砂粒中量、炭化粒子・鹿沼パミス少量、焼土粒子微量 | | |
| 3 暗褐色 | ローム粒子多量、砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス少量 | | |

遺物出土状況 土師器片284点(坏121, 碗96, 甕67), 須恵器片10点(坏3, 甕7), 石製支脚1点, 土製支脚1点が出土している。竈内の覆土上層および北東・北西コーナー部付近の床面から覆土下層に集中している。71・73・92・94は竈右袖内から、72・80・94は竈前方覆土中層および床面から、74・76・77・78は竈火床部覆土中層から逆位で重なって出土している。75・79・89・95は東壁際の覆土下層および床面から出土している。82・83・84・88は竈内から、85・86・87・93は覆土から、90は中央部覆土下層から出土している。91は竈内および東壁付近の覆土下層から出土した破片が接合したものである。96は火床部左袖部よりから立位で出土している。

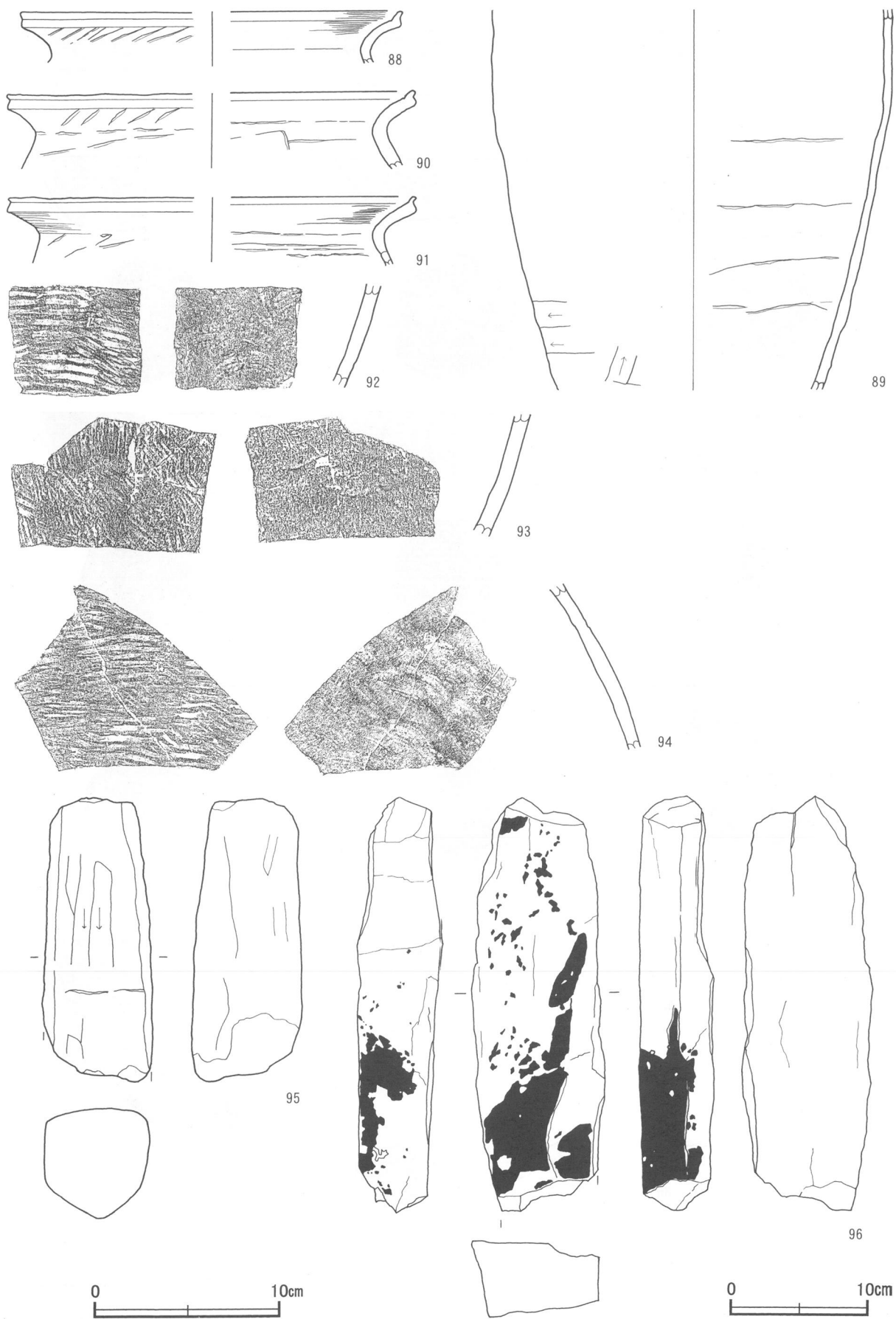
所見 時期は、須恵器供膳具が出土していないことや出土土器から9世紀末葉と考えられる。



第55图 第7号住居跡実測図



第56图 第7号住居跡出土遺物実測図(1)



第57图 第7号住居跡出土遺物実測図(2)

第7号住居跡出土遺物観察表(第56・57図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
71	土師器	坏	[13.2]	(3.2)	-	石英・長石・赤色 粒子・雲母	橙	普通	ロクロナデ	北東角床面	5% 内面黒色処理
72	土師器	坏	[14.2]	4.0	[7.0]	石英・長石・赤色 粒子・雲母	にぶい黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り	竈前方床面	40% 内面黒色処理
73	土師器	坏	[14.0]	(4.2)	-	石英・長石・赤色 粒子・雲母・小礫	橙	普通	ロクロナデ	竈右袖内	30% 体部外面赤変・ 口縁端部焼土付着 内面黒色処理
74	土師器	坏	[13.3]	4.4	6.2	石英・長石・赤色 粒子・雲母	にぶい黄橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り	竈内覆土中層	60% 外面赤変・焼土付着・ 器面荒れ 内面黒色処理
75	土師器	坏	[13.3]	4.0	7.1	石英・長石・赤色 粒子・雲母・小礫	灰黄褐	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り, 底部内面不定方向ヘラミガキ	東壁際覆土中層	50% 内面黒色処理
76	土師器	坏	[13.6]	4.1	6.8	長石・赤色粒子・ 雲母・小礫	にぶい褐	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り, 底部内面不定方向ヘラミガキ	竈内覆土中層	80% 内外面焼土付着・ 器面荒れ 内面黒色処理 PL23
77	土師器	坏	13.6	4.5	6.8	石英・長石・赤色 粒子・雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り	竈内覆土中層	80% 体部外面赤変・ 内面黒色処理 PL23
78	土師器	坏	13.6	4.6	6.6	石英・長石・赤色 粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り	竈内覆土中層	85% 内外面器面荒れ 外面焼土付着 内面黒色 処理 PL23
79	土師器	坏	[14.0]	4.7	7.0	石英・長石・雲 母・小礫	にぶい黄橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り, 底部内面不定方向ヘラミガキ	東壁際床面	50% 外面弱く赤変・焼土 付着 内面黒色処理
80	土師器	坏	[14.8]	3.1	6.8	石英・長石・赤色 粒子・雲母・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り	竈前方覆土中層	30% 内面黒色処理
81	土師器	坏	-	(2.5)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土	30% 墨書 体部「□」 内面黒色処理
82	土師器	高台付皿	[13.8]	(2.1)	-	赤色粒子・雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	竈内	30% 内面赤変・器面荒れ
83	灰袖陶器	碗	[13.8]	(4.2)	-	黒色粒子	灰白	良好	ロクロナデ	竈内	20% 猿投産
84	土師器	坏	-	(1.0)	6.8	石英・長石・赤色 粒子・雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り	竈内	20% 底部外面焼土付着 内面黒色処理
85	土師器	坏	[14.2]	4.0	[7.2]	石英・長石・赤色 粒子・雲母・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り	覆土	35% 墨書 体部・底部 「千」カ 内面黒色処理
86	土師器	坏	-	(0.9)	[6.6]	長石・赤色粒子・ 雲母・小礫	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り, 底部内面一定方向ヘラミガキ	覆土	10% 墨書 底部「□」 内面黒色処理
87	土師器	坏	-	(2.2)	-	石英・長石・赤色 粒子・雲母・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 底部回転ヘラ切り	覆土	5% 墨書 体部 横位 「久寶」カ 内面黒色処理
88	土師器	甕	[20.6]	(2.8)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 頭部ヘラ状工具のあたり	竈内	10%
89	土師器	甕	-	(20.5)	-	石英・長石・小礫	赤	普通	体部下半ヘラ削り, 輪積み痕	東壁際床面	30% 外面赤変・器面荒れ ・焼土付着
90	土師器	甕	[22.0]	(4.0)	-	石英・長石・赤色 粒子・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 頭部ヘラ状工具のあたり, 内面ヘラナデ	中央部覆土下層	10%
91	土師器	甕	[22.0]	(3.6)	-	石英・長石・赤色 粒子・小礫	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 頭部ヘラ状工具のあたり, 輪積み痕	竈内・東壁付近覆土下層	10%
92	須恵器	大甕	-	(5.6)	-	小礫	灰	普通	外面並行叩き, 内面当て具痕	竈右袖内	5% 内外面弱く赤変 93・94と同一個体
93	須恵器	大甕	-	(6.6)	-	小礫	灰	普通	外面不規則な叩き, 内面当て具痕	覆土	5% 外面焼土付着・弱く 赤変 92・94と同一個体
94	須恵器	大甕	-	(8.8)	-	小礫	灰	普通	外面並行叩き, 内面当て具痕	竈右袖内	5% 内外面弱く赤変 92・93と同一個体

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
95	支脚	(15.5)	5.9	5.8	(561)	粘土	胎土に小礫含む, ヘラ削り, 全面強く赤変	北東角床面	PL24
96	支脚	(29.7)	9.5	5.5	(2180)	花崗岩	平らな面を整形している, 全面赤変・炭化物付着	火床部	PL24

(2) 土坑

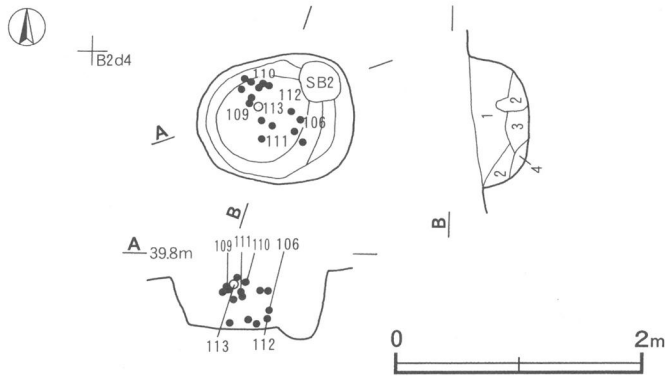
第40号土坑 (第58・59図)

位置 B 2 d₄ 区に位置し、丘陵袖部に立地している。

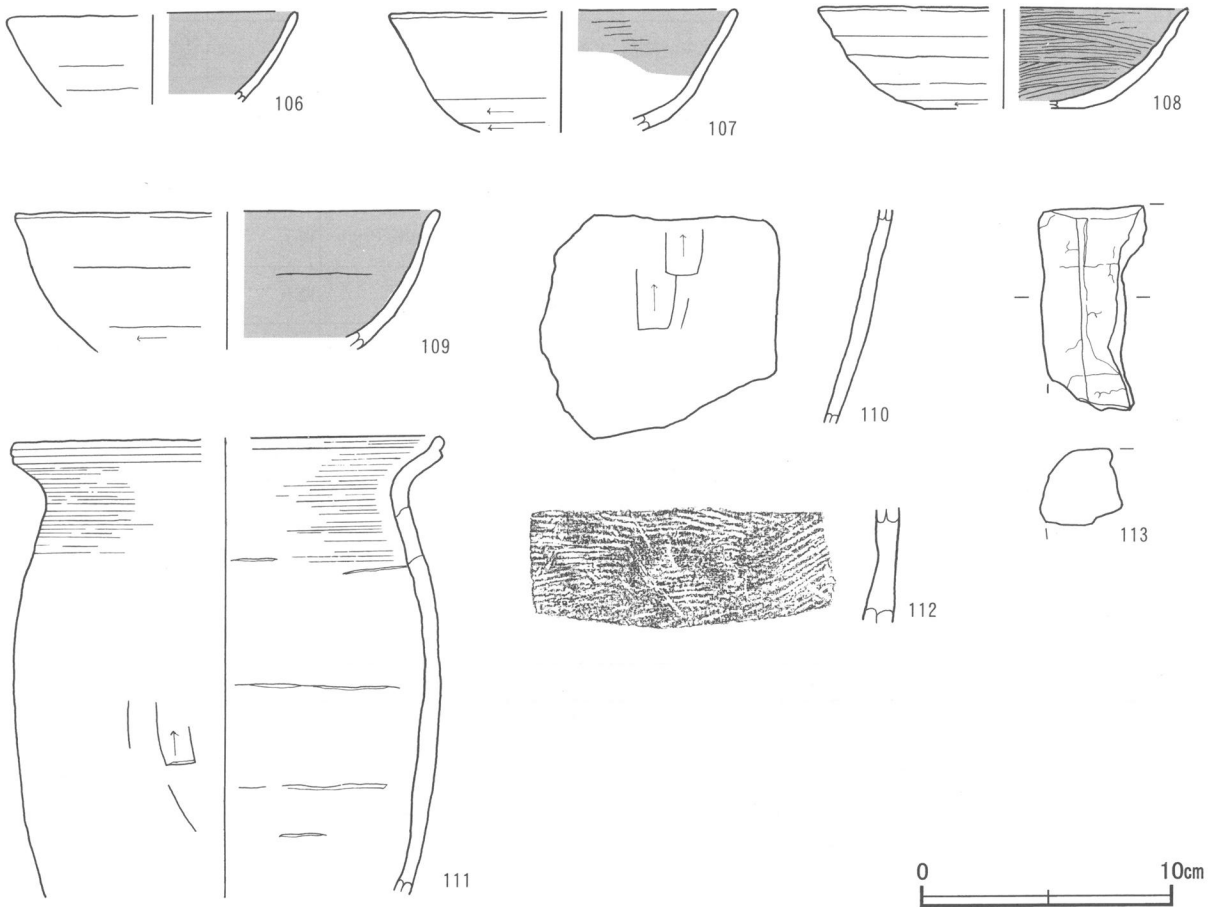
重複関係 第2号掘立柱建物のP5に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.28m、短径1.12mの東西にやや長い楕円形で主軸方向はN-58°-Eである。底部は平坦である。深さは約45cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層からなる。ブロック状に堆積していることや含有物から人為堆積と考えられる。



第58図 第40号土坑実測図



第59図 第40号土坑出土遺物実測図

土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 焼土ブロック中量

遺物出土状況 覆土上層から下層にかけて散布している状態で出土している。106・112は底面より若干浮いた位置から、107・108は覆土から、109・110・111・113は覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀代と考えられる。

第40号土坑出土遺物観察表(第59図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
106	土師器	坏	[11.6]	(3.5)	-	石英・長石・雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り	覆土下層	20% 内面黒色処理
107	土師器	坏	[13.8]	(4.8)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ、体部下端回転ヘラ削り	覆土	20% 内面黒色処理
108	土師器	坏	[14.8]	4.0	[6.2]	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ、体部下端回転ヘラ削り、底部回転ヘラ切り、底部内面一定方向ヘラミガキ	覆土	30% 内面黒色処理
109	土師器	椀	[16.8]	(5.6)	-	石英・長石・雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り	覆土上層	20% 内面黒色処理
110	土師器	甕	-	(8.5)	-	赤色粒子・雲母	橙	普通	外面ヘラ削り、内面ナデ	覆土上層	5% 外面焼土付着
111	土師器	甕	[17.2]	(18.3)	-	赤色粒子・雲母・小礫	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ、体部下半ヘラ削り、輪積み痕	覆土上層	35% 口縁部一部赤変 体部外面焼土付着 PL23
112	須恵器	甕	-	(4.6)	-	小礫	灰	普通	外面並行明き	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
113	支脚	(8.2)	(3.3)	(3.0)	(90)	粘土	胎土に石英・長石・小礫含む、ヘラ削り	覆土上層	全面赤変

2 近世の遺構と遺物

今回の調査では、掘立柱建物跡3棟、井戸跡1基が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第60・61図)

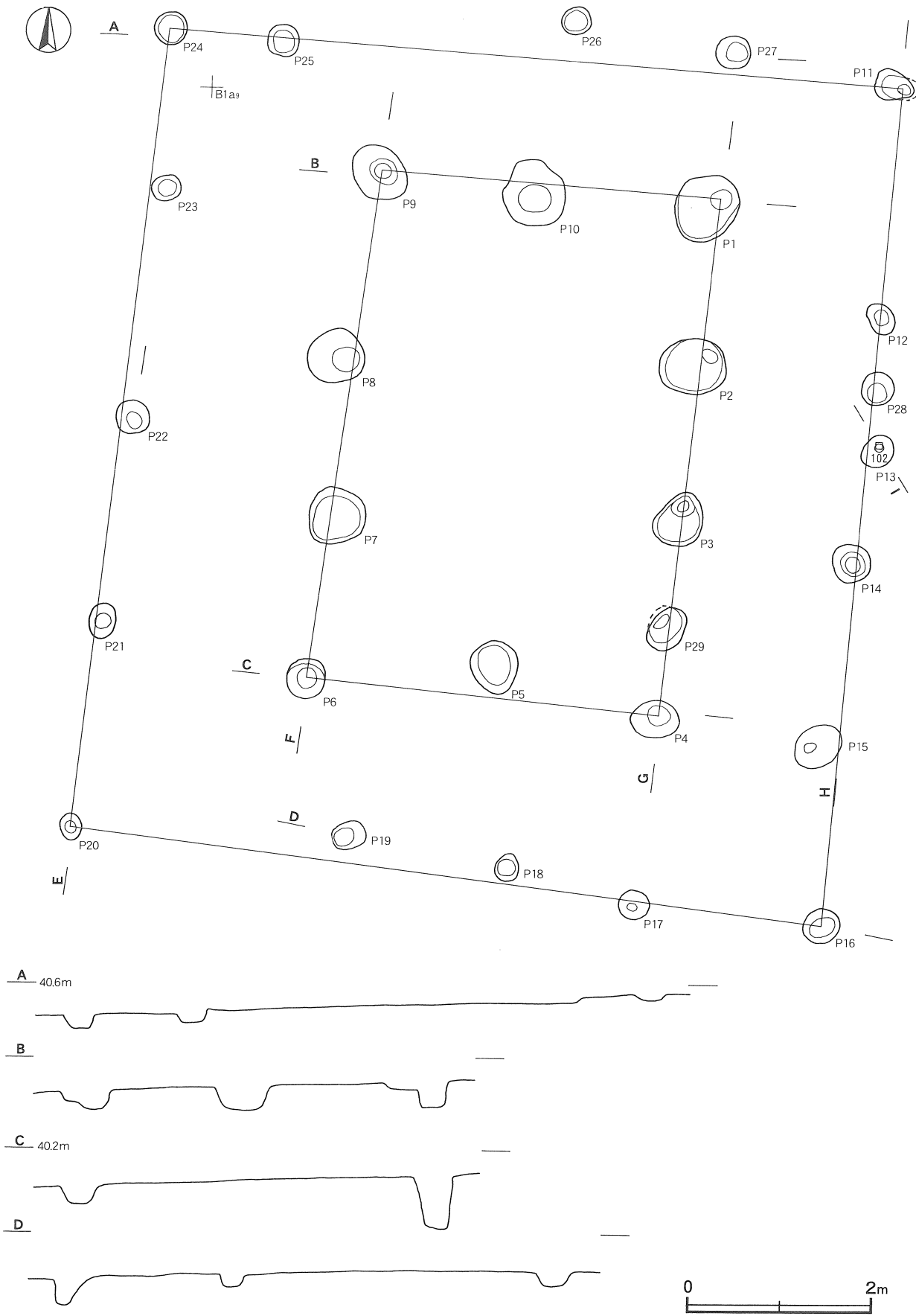
位置 B1a9区に位置し、丘陵裾部に立地している。

規模と構造 桁行4間、梁間2間の身舎に、四面庇が附属する建物跡で、桁行方向をN-5°-Eとする南北棟である。底部を含めた規模は桁行長9.69m、梁間長8.28mあり、柱間寸法は桁行1.00~3.00m、梁間1.70m~2.00mで、庇の柱間は0.80m~3.00mほどである。柱筋と間尺が揃わない構造である。第2号掘立柱建物跡と軸線がほぼ揃う。

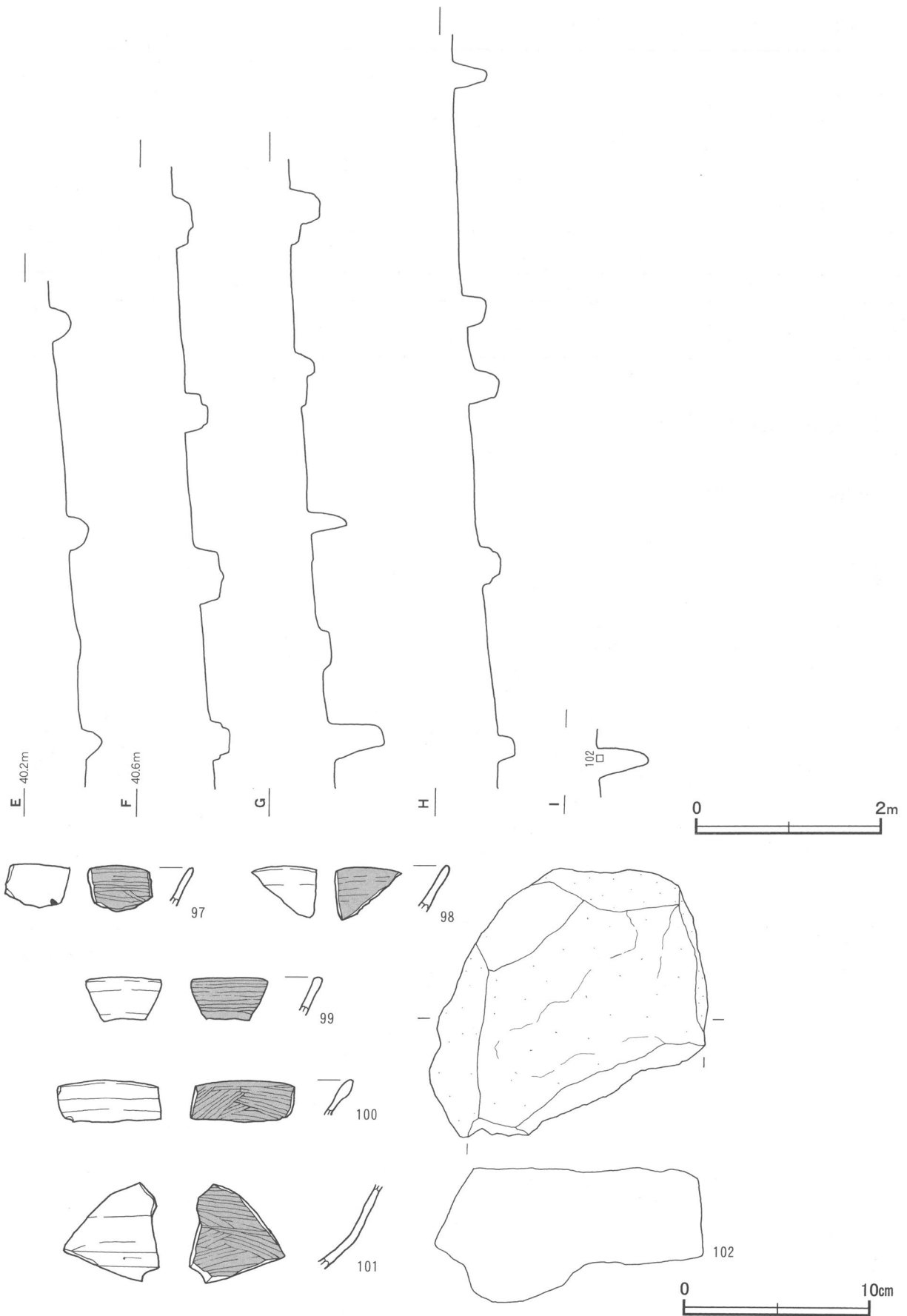
柱穴 平面形は円形を呈し、深さは10~48cmで一律ではない。

遺物出土状況 土師器片28点、縄文土器2点が出土しているがいずれも細片であり、流れ込んだものと考えられる。102がP13から出土しており、根石の可能性もある。

所見 出土遺物がないため時期は特定できないが、第2号掘立柱建物跡と桁行方向が揃っていることから関連性が考えられる。



第60图 第1号掘立柱建物跡実測図



第61図 第1号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第61図)

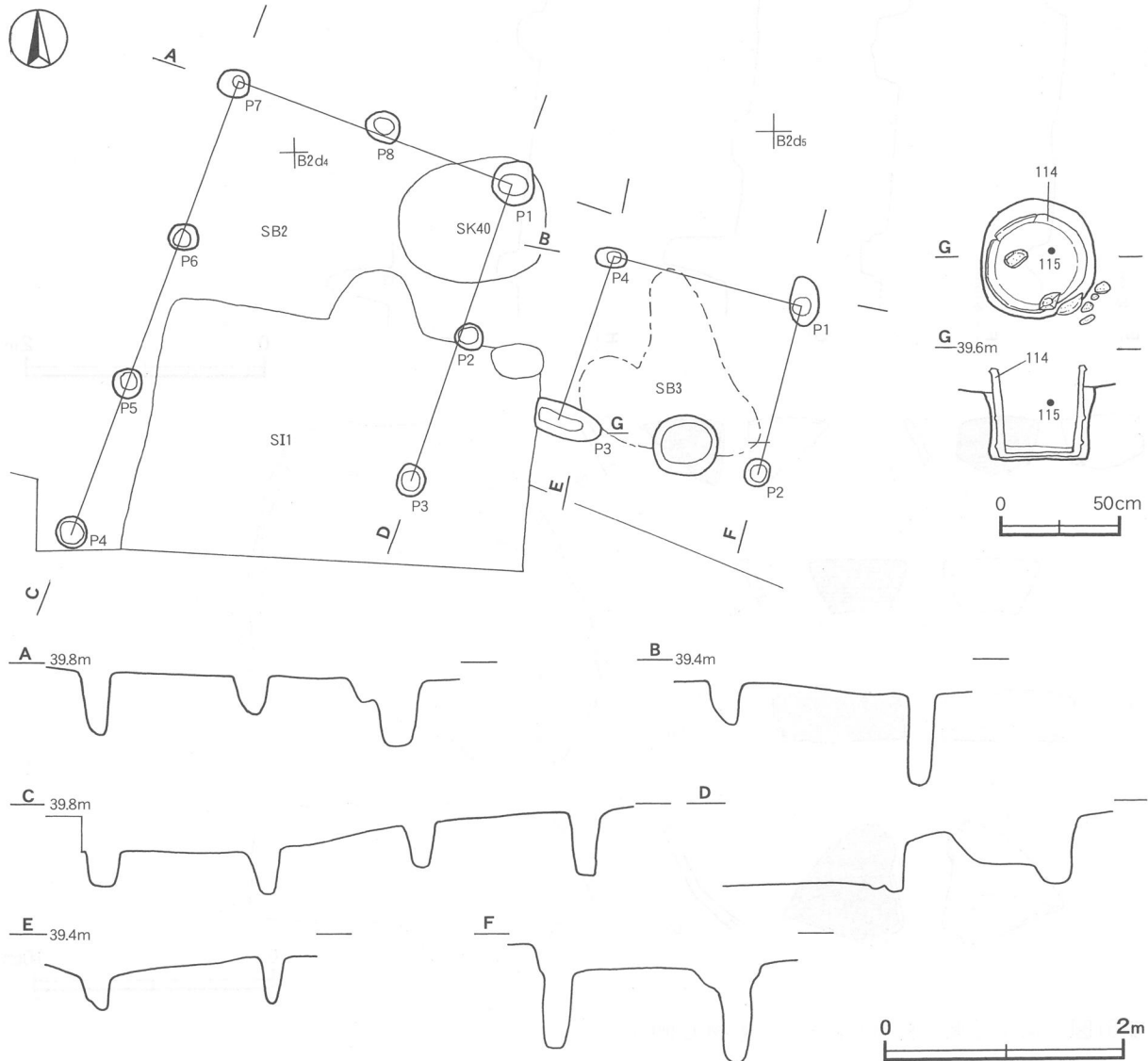
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
97	土師器	坏	-	(2.1)	-	小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土	5% 墨書 体部「□」 内面黒色処理
98	土師器	坏	-	(2.3)	-	石英・長石・雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土	5% 内面黒色処理
99	土師器	坏	-	(2.0)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土	5% 内面黒色処理
100	土師器	椀	-	(1.9)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土	5% 内面黒色処理 101と同一個体カ
101	土師器	椀	-	(4.6)	-	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り	覆土	5% 内面黒色処理 100と同一個体カ

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
102	根石	(14.5)	14.3	7.2	(1920)	チャート	1面が平坦に整形されている	P13覆土上面	

第2号掘立柱建物跡(第62図)

位置 B2d4区に位置し、丘陵裾部に立地している。

重複関係 第1号住居跡, 第40号土坑を掘り込んでいる。



第62図 第2・3号掘立柱建物跡実測図

規模と構造 桁行3間が確認され、さらに調査区域外に延びており、梁間は2間で、桁行方向をN-7°-Eとする南北棟である。確認された桁行長は3.8mで、梁間長は2.6mであり、柱間寸法は1.4mほどである。

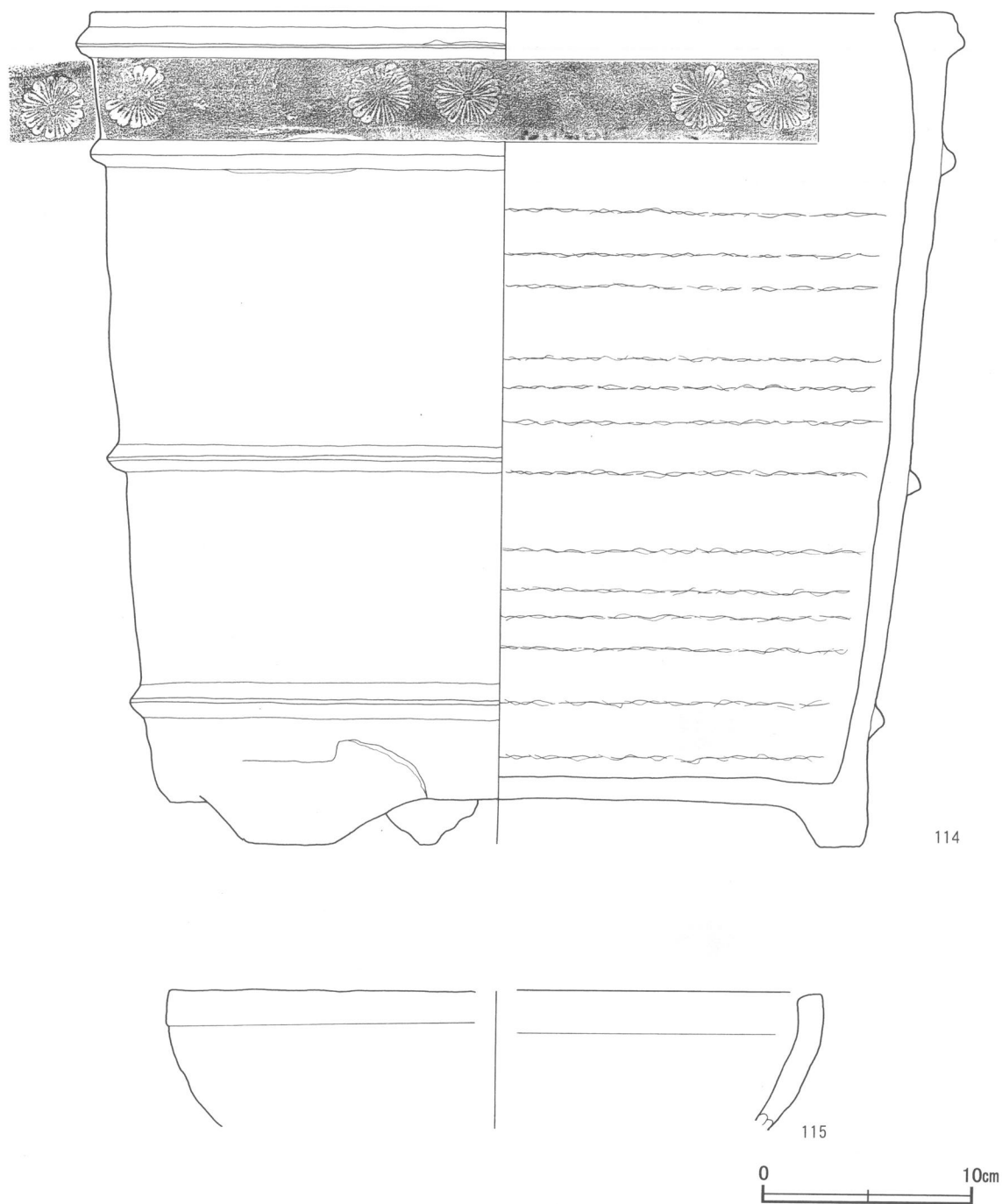
柱穴 平面形は円形を呈し、深さは約30~80cmで一律ではない。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 本跡は第1・3号掘立柱建物跡と桁行方向が揃っており、関連性が考えられる。

第3号掘立柱建物跡（第62・63図）

位置 B2d4区に位置し、丘陵裾部に立地している。



第63図 第3号掘立柱建物跡出土遺物実測図

規模と構造 桁行・梁間とも1間(1.7m)のみ確認されている。桁行は調査区域外に延びている可能性がある。内部に径0.5m、深さ0.3mの円形の掘り込みがあり、その中に114が埋設されている。円形の掘り込みの北側には踏み固めによる硬化面が確認されている。

柱穴 平面形は円形を呈し、深さが30~80cmと一様ではない。

遺物出土状況 円形の掘り込みから、114が正位で埋設された状態で出土している。115は114の覆土中から出土した。

所見 建物は、桁行2間、梁間が1間程度の厠と考えられ、その中に便槽に使用されたと推測される114が埋設されていた。硬化面は厠への出入りに伴う踏み固めと考えられる。時期は、瓦質土器から16世紀後半から17世紀初頭頃と考えられる。

第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第63図)

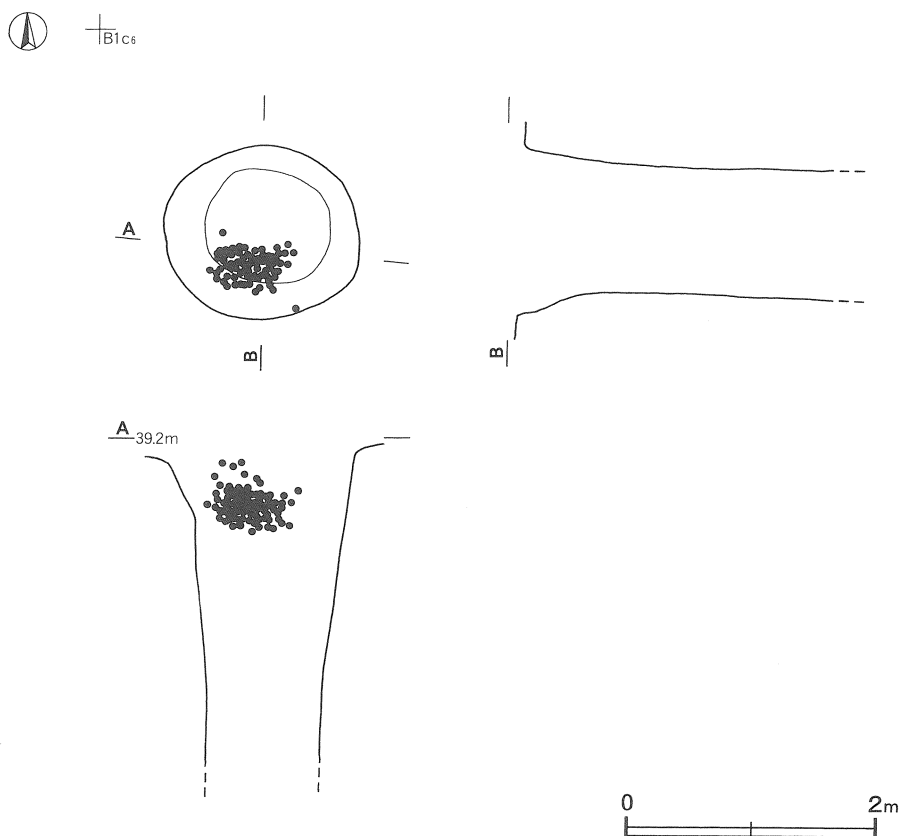
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
114	瓦質土器	鉢	40.9	39.6	38.0	石英・長石・雲母・小礫・海綿骨針	明青灰	普通	内外面ナデ突帯・三足貼り付け、口縁部に印花文(菊花)2個1組8単位	SB3内土坑	100%。在地系内面赤変・器面荒れ P124
115	瓦質土器	鉢	[31.0]	(6.5)	-	石英・長石・雲母・小礫	褐灰	普通	横ナデ	114内	10%

(2) 井戸跡

第1号井戸跡(第64・65図)

位置 B1c6区に位置し、丘陵裾部に立地している。

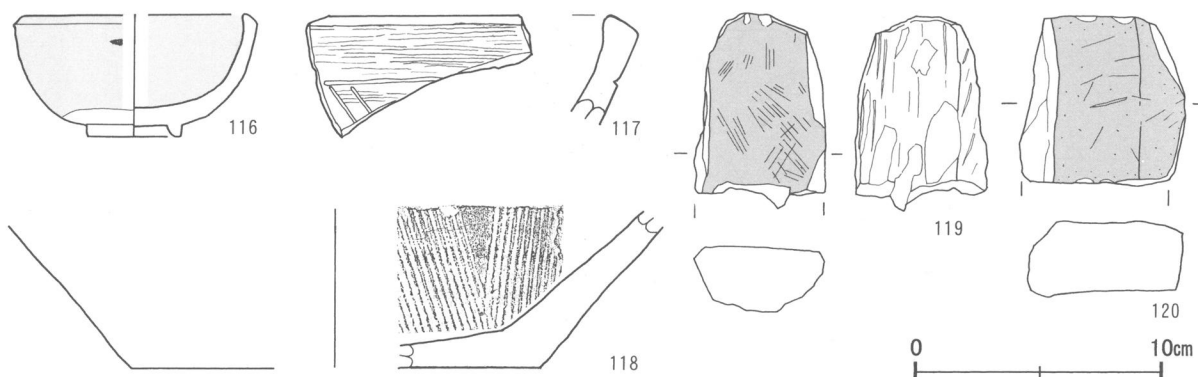
規模と構造 径1.60mほどの円形で、円筒状に掘りこまれている。深さは2.50mほど掘り下げたが、湧水のために下部の調査を断念した。



第64図 第1号井戸跡実測図

遺物出土状況 116・117・118・119・120や拳大の自然礫が覆土上層から多量に出土しており、一括して廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器や遺構の形状から近世と推定される。



第65図 第1号井戸跡出土遺物実測図

第1号井戸跡出土遺物観察表(第65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
116	陶器	碗	[9.0]	5.0	3.8	砂粒	灰白,灰	普通	削りだし高台, 灰釉漬け掛け, 高台周辺露胎, 錆絵付け	覆土上層	70% 瀬戸・美濃産
117	土師質土器	火鉢	-	(4.4)	-	石英・長石・赤色粒子・雲母・小礫	明赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ	覆土上層	10%
118	陶器	播鉢	-	(6.5)	[16.4]	石英・長石	にぶい黄橙, 暗赤褐	普通	体部・底部内面に櫛歯状工具による播目, 全面に錆釉	覆土上層	20% 瀬戸・美濃産

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
119	砥石	(7.9)	5.3	2.7	(140)	頁岩	砥面1面, 溝状の擦痕あり	覆土上層	PL24
120	砥石	(6.8)	6.3	3.0	(270)	凝灰質泥岩	砥面1面, 溝状の擦痕あり	覆土上層	PL24

3 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期および性格不明の土坑47基とピット群1か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。また、遺構に伴わない遺物が出土しており、以下、特色のある遺物を抽出し、実測図を掲載する。

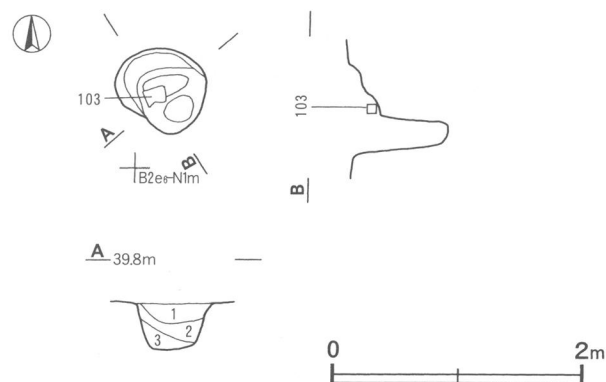
(1) 土坑

第36号土坑 (第66・67図)

位置 B2d6区に位置し、丘陵袖部に立地している。

規模と形状 長径0.74m, 短径0.63mの楕円形で、主軸方向はN-33°-Wである。底面は皿状である。深さは76cmで、壁は垂直に立ち上がっている。

覆土 3層からなり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。



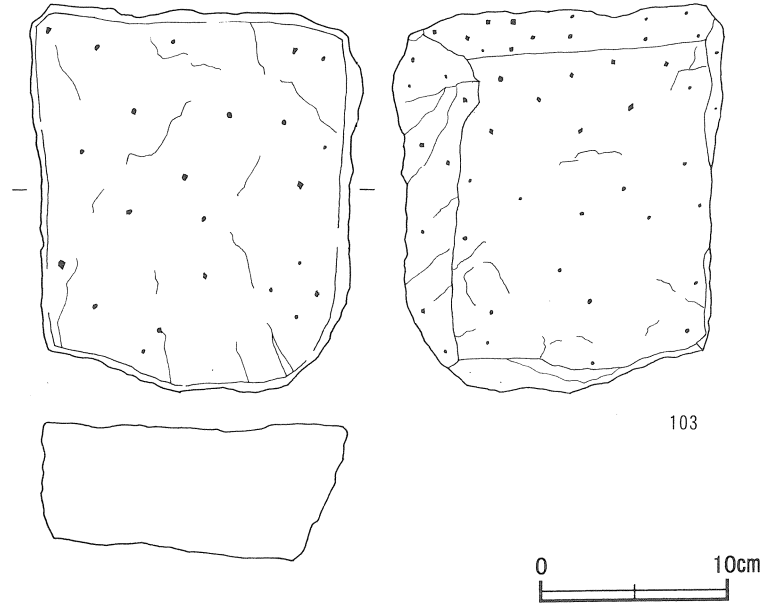
第66図 第1号土坑実測図

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 103が出土しており, 根石の可能性ある。

所見 土器が出土しておらず, 時期を判断することができなかった。



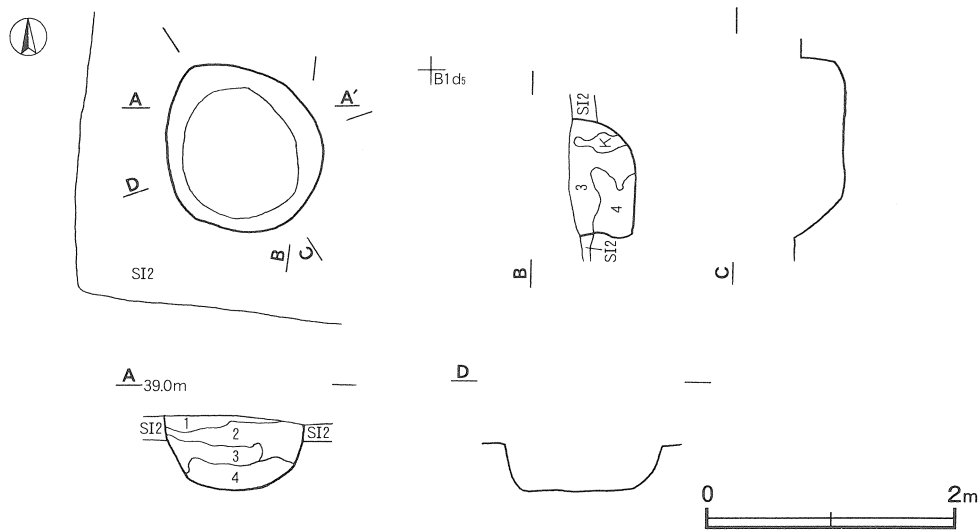
第67図 第36号土坑出土遺物実測図

第36号土坑出土遺物観察表(第67図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
103	根石	20.4	15.9	7.4	3960	花崗岩	4面を平坦に整形している	覆土上層	

第38号土坑 (第68・69図)

位置 B 1 d4 区に位置し, 丘陵袖部に立地している。



第68図 第38号土坑実測図

重複関係 第2号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.44m, 短径1.25mの楕円形で, 長径方向はN-25°-Wである。底面は皿状である。深さは45cmで, 壁は外傾して立ち上がっている。

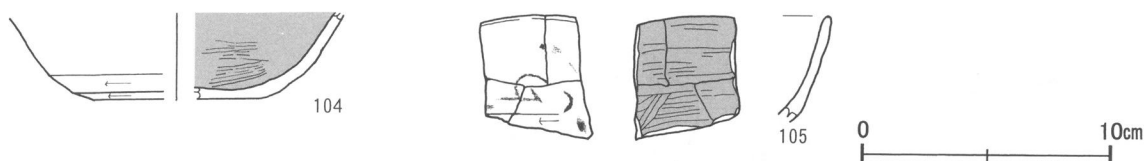
覆土 4層からなる。ロームブロックを多く含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 灰褐色 ロームブロック多量
- 3 黒褐色 ロームブロック多量, 粘土ブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量, 粘土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片8点(坏6, 甕2), 礫2点が出土している。土器はいずれも覆土中から出土しており, 人為堆積時の混入によるものと考えられる。

所見 9世紀末葉の第2号住居跡を掘り込んでいることから, 時期は9世紀末葉以降と考えられる。



第69図 第38号土坑出土遺物実測図

第38号土坑出土遺物観察表(第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
104	土師器	坏	-	(3.9)	[6.6]	石英・長石・赤色粒子・雲母・小礫	橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り	覆土	30% 内面黒色処理
105	土師器	碗	-	(4.2)	-	赤色粒子・雲母・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ削り	覆土	5% 墨書 体部 人面カ 内面黒色処理 PL21

(2) ピット群

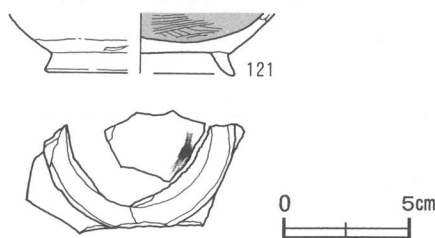
第1号ピット群(第70・72図)

位置 調査区東部のB1c0区からB2d6区に位置し, 丘陵裾部に立地している。

規模と形状 南北6m, 東西25mの範囲から13か所のピットを確認した。径10~15cmの円形で, 深さは15~45cmである。遺構図は全体図で示した。

遺物出土状況 121がP1から出土している。

所見 13か所のピットを確認したが配列に規則性は見られない。時期・性格ともに不明である。

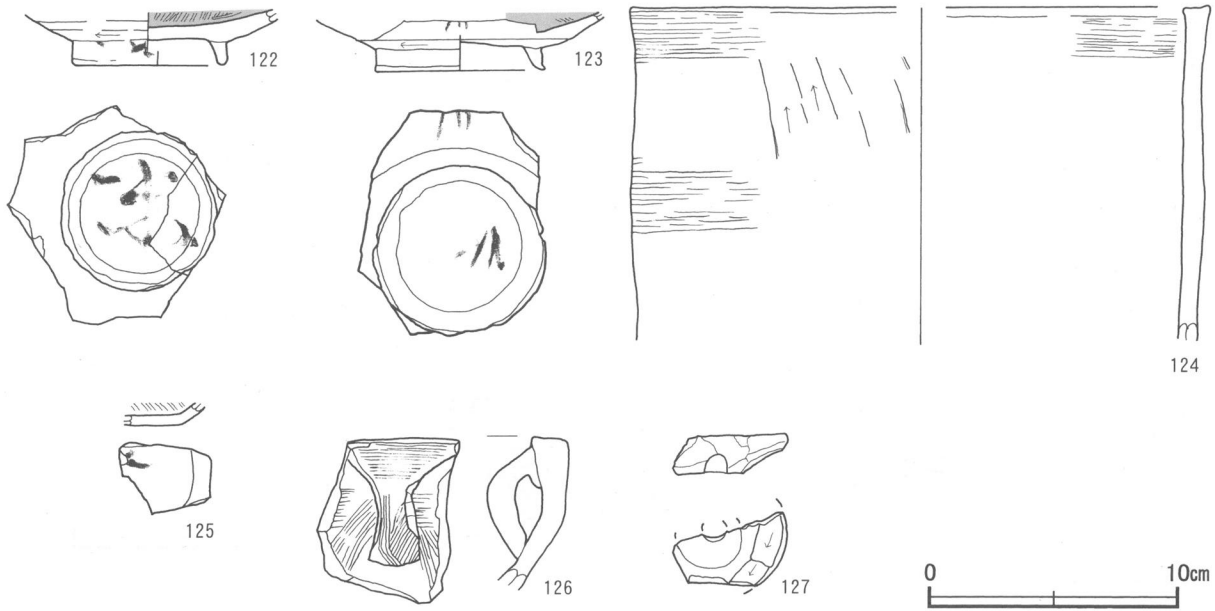


第70図 第1号ピット群出土遺物実測図

第1号ピット群出土遺物観察表(第70図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
121	土師器	高台付碗	-	(2.4)	[7.6]	石英・長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 底部回転ヘラ切り 後高台貼り付け, 底部内面不定方向ヘラミガキ	P1覆土	20% 底部外面墨痕 内面黒色処理

(3) 遺構外出土遺物



第71図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第71図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
122	土師器	高台付皿	-	(2.2)	5.8	石英・長石・赤色 粒子・雲母・小礫	明赤褐色	良好	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ 削り, 底部回転ヘラ切り後高台貼り 付け	表土	30% 墨書 底部外面 「末」 体部下端から高台 部「□□」内面黒色処 理 PL22
123	土師器	椀	-	(2.3)	6.5	長石・小礫・雲母	にぶい橙	良好	内面ヘラミガキ, 体部下端回転ヘラ 削り, 底部回転ヘラ切り後高台貼り 付け	表土	30% 墨書 底部外面 「矢」 体部「矢カ」内 面黒色処理 PL22
124	土師器	鉢	[23.3]	(13.4)	-	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 体部外面ヘラ 削り後横ナデ, 内面横ナデ	表土	30%
125	土師器	坏	-	(0.9)	-	石英・長石・雲母・ 砂粒	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 底部回転ヘラ切り	表土	5% 墨書 底部「□」
126	瓦質土器	内耳鍋	-	(6.9)	-	石英・長石・赤色 粒子	黒	普通	内外面ナデ, 耳部貼り付け	表土	10%

番号	器種	上径	下径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
127	紡錘車	[5.2]	[3.6]	1.5	(20)	粘土	孔径 1.0 cm, 側面ヘラ削り	表面採集	

表13 住居跡一覽表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)	壁高 (cm)	床面	内部施設						覆土	出土遺物	時代	備考 新旧関係(旧→新)
				長軸(m)×短軸(m)			壁溝	柱穴	貯蔵穴	ピット	出入口	竈				
1	B2d4	N-6°-E	[方形]	3.34 × (2.10)	40~45	平坦	[全周]	2	-	1	-	1	自然	土師器(坏, 碗, 高台付皿, 甕), 須惠器(甕)	9世紀末葉	本跡→SB2
2	B1c4	N-14°-E	方形	3.56 × 3.42	8~35	平坦	全周	4	-	4	1	1	人為	土師器(坏, 碗, 高台付皿, 甕), 須惠器(甕), 土製支脚	9世紀末葉	本跡→SK38
4	A1j7	N-5°-E	長方形	3.56 × 3.13	15~27	平坦	全周	4	-	-	1	1	自然	土師器(坏, 碗, 甕), 須惠器(坏, 高台付坏, 甕), 灰釉陶器(長頸瓶), 縄文土器, 陶器	9世紀末葉~10世紀初頭	SI6→本跡
5	A1j5	N-14°-E	[方形]	2.45 × (1.53)	47	平坦	-	-	-	-	-	1	人為	土師器(坏, 碗, 甕), 須惠器(甕)	9世紀末葉	
6	A1j7	N-9°-E	[方形]	2.74 × (2.10)	30~50	平坦	一部	2	-	-	-	1	人為	土師器(坏, 碗, 甕), 須惠器(甕)	9世紀末葉	本跡→SI4
7	A1i5	N-6°-E	方形	3.08 × 2.92	7~62	平坦	全周	4	-	-	-	1	自然	土師器(坏, 碗, 甕), 須惠器(坏, 甕), 石製支脚, 土製支脚	9世紀末葉	

表14 土坑一覽表

番号	位置	長径方向	平面形	規模	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	時代	備考 新旧関係(旧→新)
				長径(軸)(m)×短径(軸)(m)							
1	B2d3	N-0°	円形	0.97 × 0.89	44	外傾	皿状	人為	土師器片, 須惠器片		
2	B2c2	N-32°-E	舟形	0.78 × 0.48	58	外傾	皿状	人為	-		
3	B2d2	N-36°-E	楕円形	1.15 × 0.98	36	外傾・緩斜	皿状	人為	縄文土器片, 土師器片		
4	B2c1	N-42°-W	楕円形	1.46 × 1.20	60	外傾・緩斜	皿状	人為	-		
5	B1c0	N-41°-W	楕円形	0.74 × 0.53	82	垂直	平坦	人為	土師器片		
6	B1d0	N-36°-E	楕円形	0.62 × 0.50	52	垂直・外傾	平坦	人為	土師器片		
7	B1a8	N-0°	円形	0.52 × 0.52	68	垂直	平坦	人為	-		
8	A1j6	N-0°	舟形	1.10 × 0.67	22	外傾	皿状	人為	-		
10	B2d3	N-65°-E	楕円形	0.62 × (0.41)	25	緩斜・外傾	皿状	-	土師器片		SK34→本跡 →P10
12	B1c9	N-87°-E	不定形	1.30 × 0.74	16	外傾	平坦	-	土師器片		
17	B1b8	N-19°-W	不定形	0.91 × 0.77	17	外傾・緩斜	平坦	-	-		
18	B2d3	N-65°-E	円形	0.81 × (0.56)	18	緩斜	皿状	-	-		SK34→本跡 →SK1
19	B1c8	N-9°-W	楕円形	0.50 × 0.45	85	垂直	平坦	-	土師器片		
20	B1c8	N-27°-W	円形	1.00 × 0.96	18	外傾	皿状	-	土師器片		
21	B1d8	N-17°-E	楕円形	0.40 × (0.28)	9	緩斜	皿状	-	-		本跡→SK23
22	B1c8	N-0°	円形	0.28 × 0.28	107	垂直	平坦	-	-		
23	B1d8	N-0°	円形	0.97 × 0.90	24	緩斜	皿状	-	土師器片		SK21→本跡
24	B1c7	N-68°-E	円形	0.44 × 0.40	16	外傾	平坦	-	土師器片		SK25→本跡
25	B1c7	N-30°-W	楕円形	0.95 × 0.63	52	外傾	平坦	-	-		本跡→SK24
26	B1c7	N-18°-W	長楕円形	1.55 × 0.64	32	外傾	皿状	-	-		
27	B1d7	N-0°	楕円形	1.05 × 0.88	18	緩斜	皿状	-	縄文土器片		
28	B1c6	N-55°-W	円形	0.98 × 0.92	11	緩斜	平坦	-	-		
29	B2d5	N-84°-E	楕円形	1.13 × 0.84	48	外傾	平坦	-	土師器片		
30	B1d7	N-41°-W	円形	1.10 × 1.03	18	外傾・緩斜	皿状	-	-		
31	B1d7	N-57°-W	楕円形	0.85 × 0.69	14	外傾・緩斜	皿状	-	-		本跡→SK32
32	B1d7	N-23°-E	舟形	1.17 × 0.78	29	外傾	平坦	-	-		SK31→本跡
33	B1d6	N-57°-E	楕円形	1.08 × 0.87	129	垂直	皿状	-	-		

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	時代	備考 新旧関係(旧→新)
				長径(軸)m×短径(軸)m	深さ (cm)						
34	B2d3	N-65°-E	長楕円形	(0.84) × 0.69	16	緩斜	皿状	-	縄文土器片, 土師器片		本跡→SK10・18
36	B2d6	N-33°-W	楕円形	0.74 × 0.63	76	垂直	皿状	自然	-		
37	B1c9	N-22°-W	不定形	0.98 × 0.71	56	緩斜	皿状	-	-		
38	B1d4	N-25°-W	楕円形	1.44 × 1.25	45	外傾	皿状	人為	土師器片		S12→本跡
40	B2d4	N-58°-E	楕円形	1.28 × 1.12	45	外傾	平坦	人為	土師器片, 須恵器片, 土製品	9世紀代	本跡→SB2
44	B2d2	N-0°	円形	0.45 × 0.44	36	外傾	皿状	-	縄文土器片, 土師器片		
46	B1a4	N-58°-W	楕円形	1.30 × 0.78	22	外傾・緩斜	平坦	-	-		
47	B1a4	N-46°-W	円形	0.50 × 0.47	12	外傾	平坦	-	-		
48	B1a4	N-32°-W	楕円形	1.06 × 0.76	18	外傾	皿状	-	-		

表15 掘立柱建物跡一覽表

番号	位置	桁行方向	柱間数 (桁×梁)	規模(m)	面積(m ²)	構造	桁行柱間 (m)	梁間柱間 (m)	柱穴平面形	深さ(cm)	主な出土遺物	備考(時期)
1	B1a9	N-5°-E	4×2	9.69×8.28	80.23	側柱	1.0~3.0	1.7~2.0	円形	10~48	縄文土器片, 土師器片, 根石	近世力
2	B2d4	N-7°-E	(3)×2	3.8×2.6	9.88	側柱	1.5~1.8	1.4	円形	30~80	-	近世力
3	B2d4	N-7°-E	1×1	1.7×1.7	2.89	側柱	1.7	1.7	円形	25~65	瓦質土器(鉢)	近世力

表16 井戸跡一覽表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模		覆土	出土遺物	時代	備考 新旧関係(旧→新)
				長径(軸)m×短径(軸)m	深さ(cm)				
1	B1c6	N-66°-W	楕円形	1.58 × 1.40	(250)	-	土師質土器片(火鉢), 瓦質土器片(火鉢), 陶器片(碗, 播鉢), 石製品(砥石)	近世	

第4節 ま と め

今回の調査は上加賀田宮後東遺跡全体の一部分にすぎず、遺跡がさらに広がっていることは分布調査の経緯からも明らかである。ここでは、調査で出土した墨書土器を中心に取り上げ、若干の考察を加えてまとめたい。

今回の調査では、9世紀末葉の竪穴住居跡5軒と9世紀末葉から10世紀初頭の竪穴住居跡1軒が確認された。出土土器に時期差が見られないことから、短期間に集落が営まれ、廃絶されていった小規模な集落と考えられる。確認された遺構件数は少ないが、墨書土器および墨痕がある土器が多量に出土しており、その総数は35点である。その他、篋書土器3点、刻書土器2点が確認されている。遺構ごとに見てみると、墨書土器および墨痕がある土器は第1号住居跡から6点、第2号住居跡から9点、第4号住居跡から10点、第6号住居跡から1点、7号住居跡から3点であり、その他の遺構への流れ込み・混入したものと考えられるものは3点、遺構外から3点である。篋書土器は第1号住居跡から1点、第2号住居跡から1点、刻書土器は第2号住居跡から2点である。

墨書された土師器の器種は、坏・碗・高台付皿の供膳具であり、煮炊具である甕には確認されなかった。墨書の部位は、底部外面に書かれたのは2点であり、その他はすべて体部外面である。使用時に見える場所に書かれており、「見ることを意識している」ということが指摘¹⁾されており、当遺跡の墨書土器もこれに当てはまる。使用者に常に認識させることができ、そのことが目的であったと考えられる。

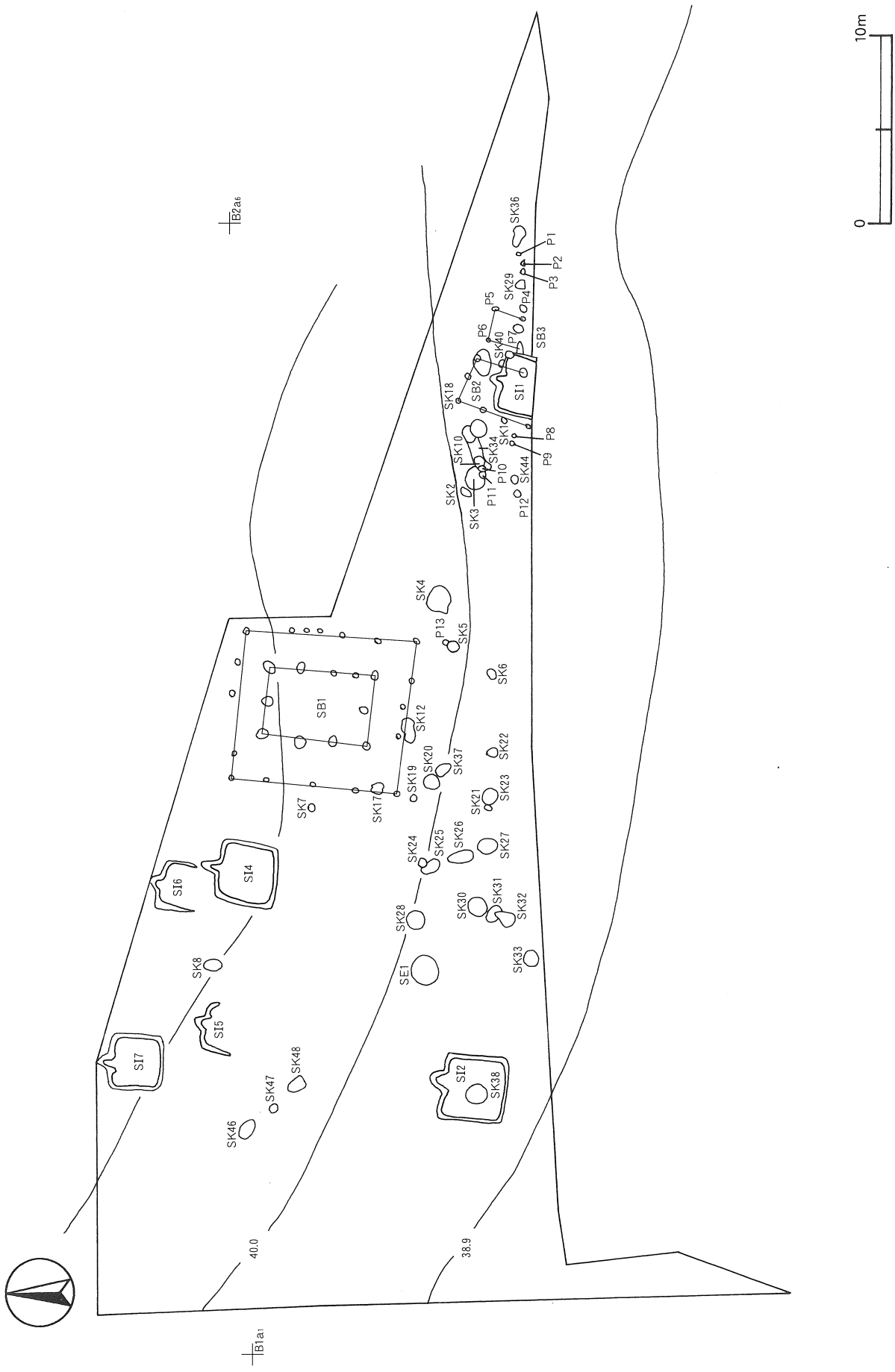
文字の種類であるが、判読が可能なものでは「久寶」・「千」・「仟」・「矢」・「峯」・「末」の6種類である。「久」や「寶」の一文字については、破片資料であることから「久寶」の一字である可能性が高い。遺跡の性格を示唆するような文字・語句は見ることができず、その意味を解することができない。

文字資料の出土分布を見ると、6軒の竪穴住居跡中5軒から出土しており、出土していない第5号竪穴住居跡は、出土遺物も少ない。同じ文字が複数の住居跡から出土しており、1軒の住居跡のみから出土する特定の文字は見られない。集落の全域は調査されてないため分布の様相をすべて把握できないが、一集落からの文字資料の絶対量は高いことが推測でき、集落の全域に広がっていた可能性は高い。

竪穴住居跡内での文字資料の出土状況を見ると、覆土中からの出土が大半であり、床面からの出土はわずかである。また、破片資料がほとんどで接合するのはわずかであり、土器片を観察すると、口縁部内面や底部内面の摩滅が著しい。さらに、墨が薄くなっており、現在までの時間の経過を考慮する必要もあるが、これらの土器は墨書されてからある程度の期間、日常の食器として使用されていたと考えられる。そして、住居廃絶時に不用になった土器などとともに、廃棄されたものと考えられる。竈袖部内から出土している墨痕が見られる破片は、何らかの祭祀行為ではなく、使用後に破損した墨書土器を竈補強材に利用したのと考えられる。

本遺跡は9世紀末～10世紀初頭に突如出現し、短期間で廃絶された集落である。集落が形成された理由を示唆する資料は、今回の調査では確認されなかったため定かではないが、多量に出土した墨書土器は、この地域を開発した集団の標識文字としての固有の文字だったと考えられる。

1) 奈良・平安時代班「茨城県域における文字資料集成2」『研究ノート』10号 茨城県教育財団 2001年6月



第72図 上加賀田宮後東遺跡遺構全体図

写 真 図 版

中 山 遺 跡
福 原 打 越 塚 群
上加賀田宮後東遺跡



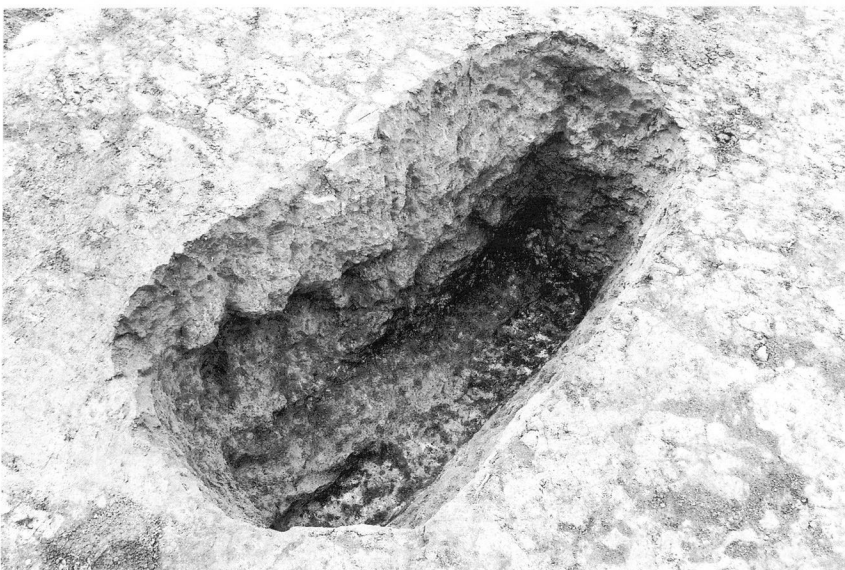
遺構確認状況



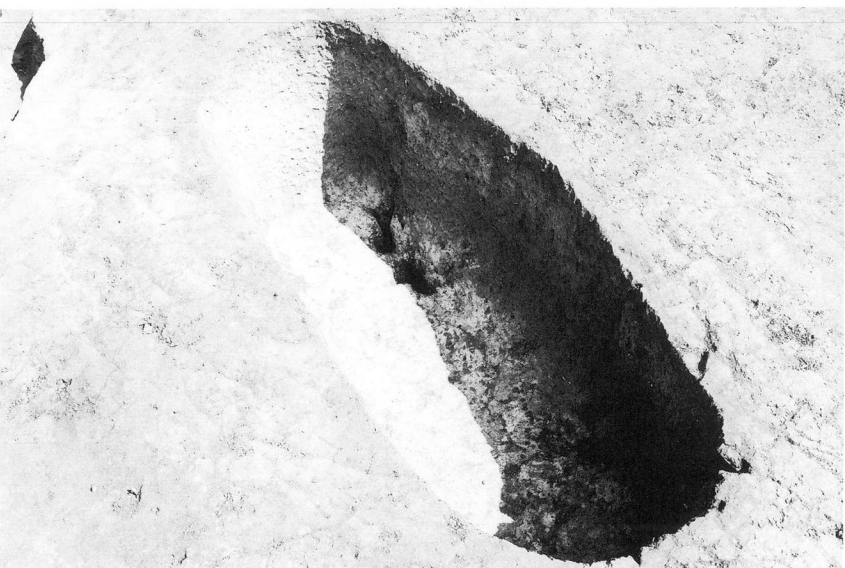
完掘全景（南西側より）



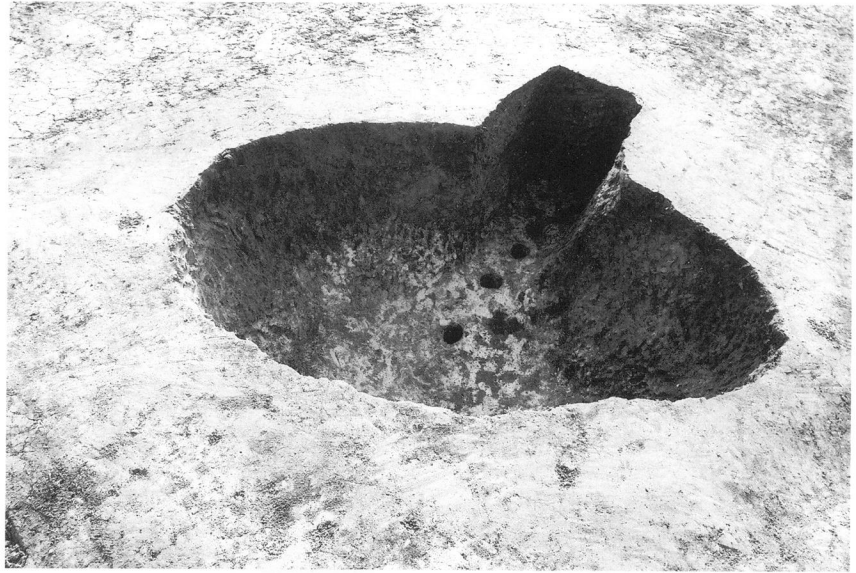
第1号住居跡
完掘状況



第3号陥し穴
完掘状況



第4号陥し穴
完掘状況



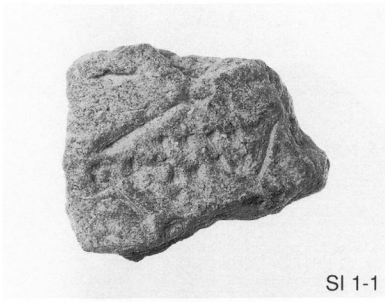
第6号陥し穴
第34号土坑
完掘状況



第32号土坑
遺物出土状況



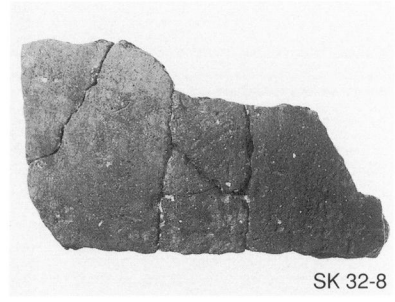
第32号土坑
遺物出土状況



SI 1-1



SK 20-2



SK 32-8



遺構外-23



遺構外-22



SK 32-9



SK 36-20



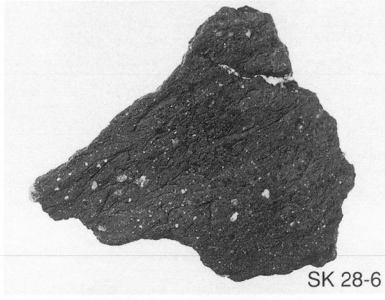
遺構外-25



遺構外-27



SK 24-4



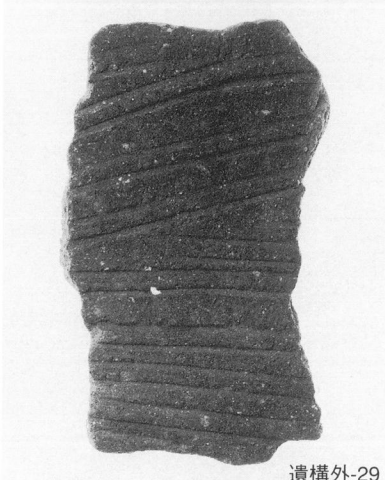
SK 28-6



遺構外-24



SK 32-13



遺構外-29

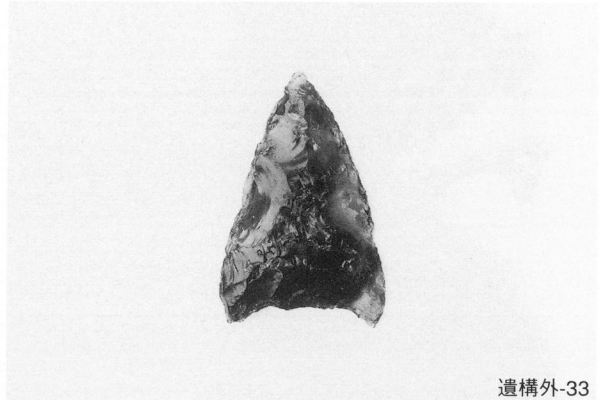


SK 36-19

第1号住居跡，第20・24・28・32・36号土坑，遺構外出土遺物



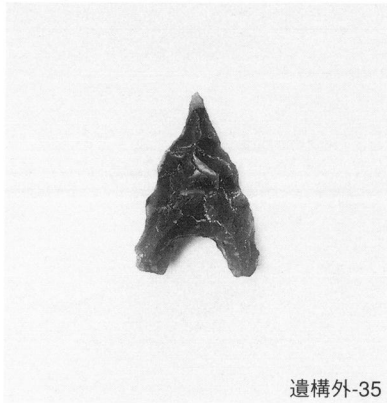
SK 38-21



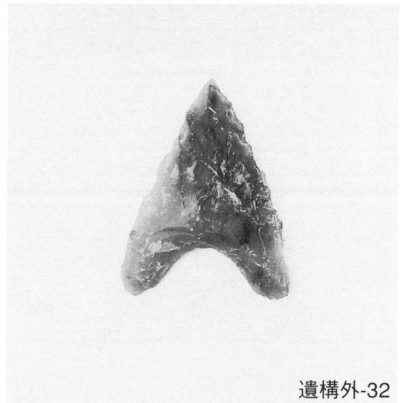
遺構外-33



遺構外-34



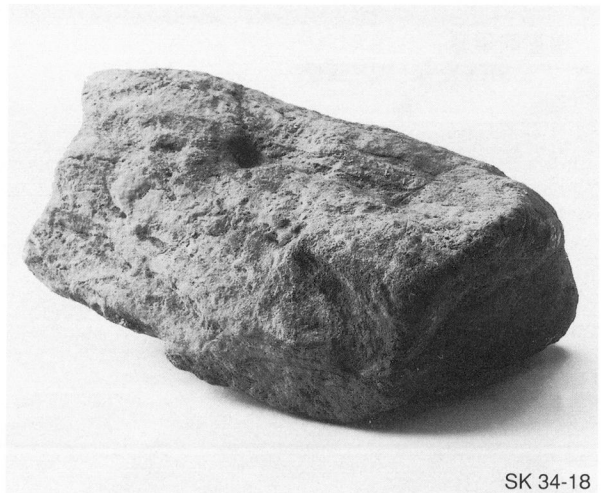
遺構外-35



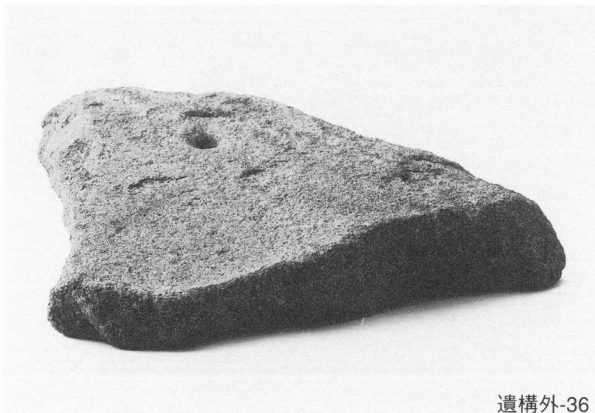
遺構外-32



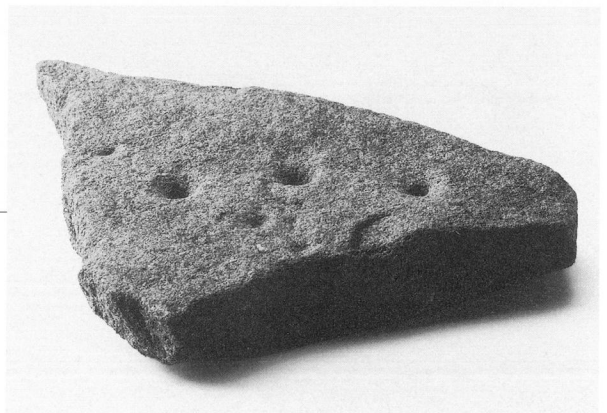
SK 43-37



SK 34-18



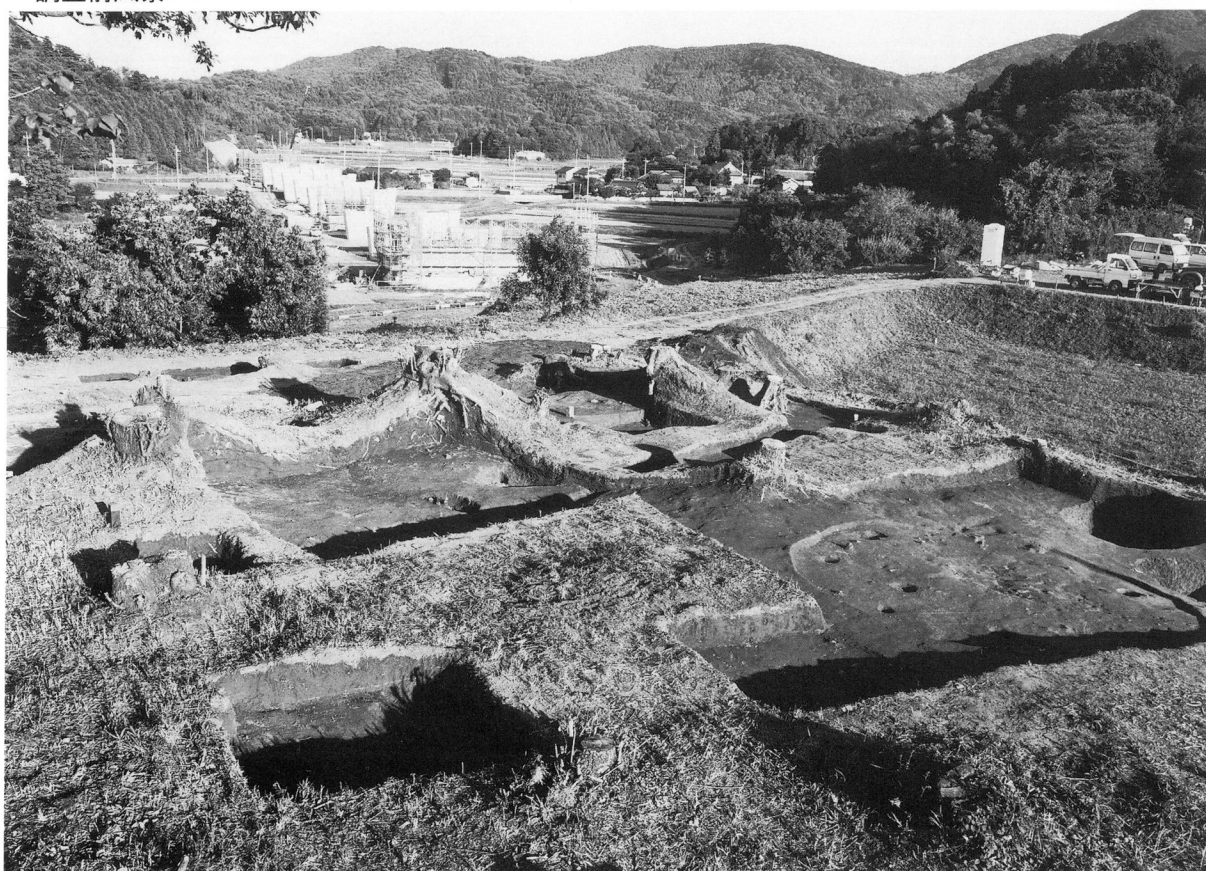
遺構外-36



第34・38・43号土坑，遺構外出土遺物

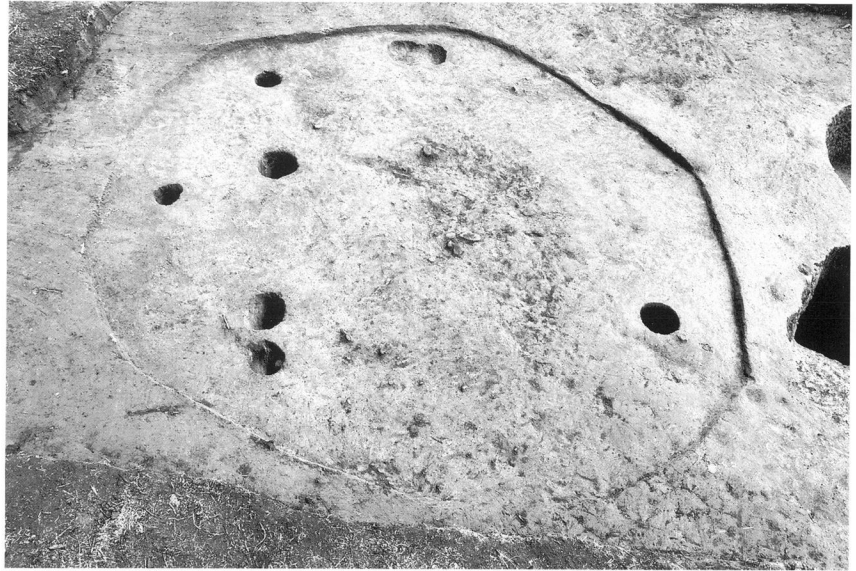


調査前風景



完掘全景（西側より）

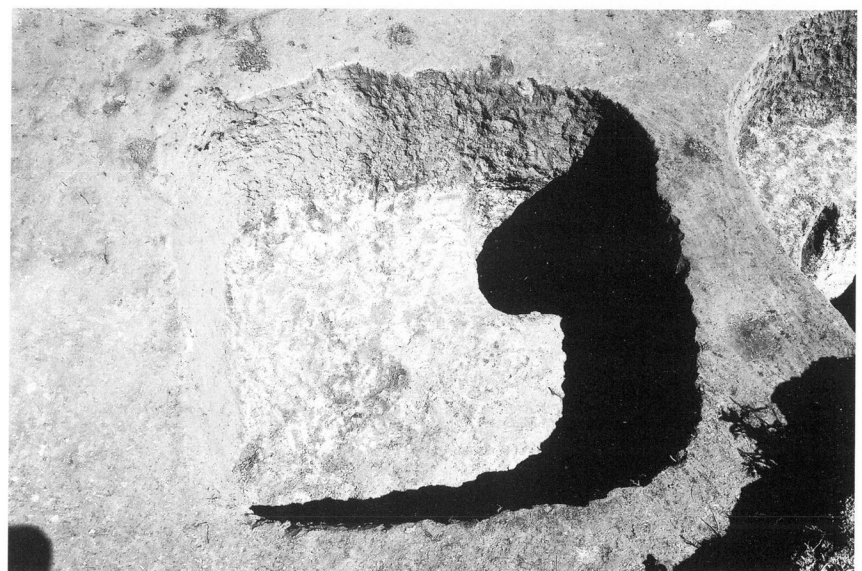
第1号住居跡
完掘状況

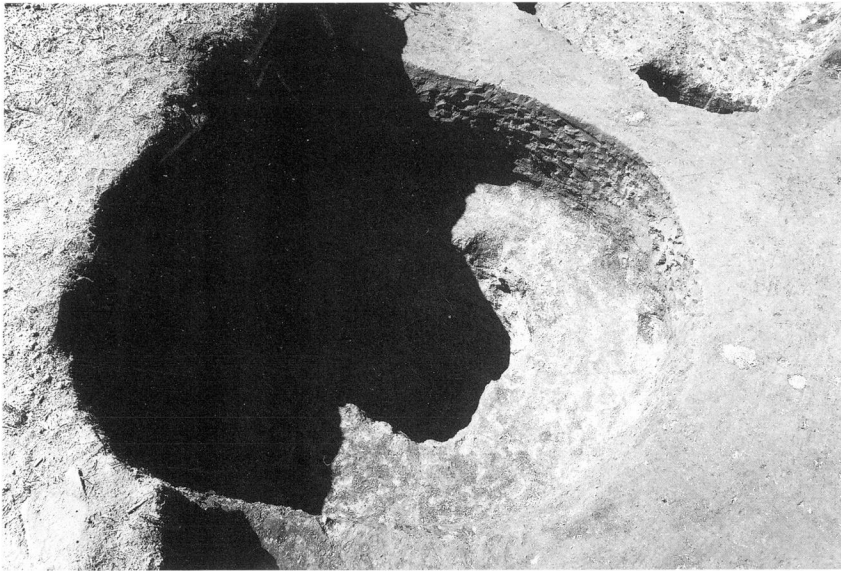


第2号住居跡
完掘状況



第1号墓壙
完掘状況





第2号墓壙
完掘状況



第1・2号塚
調査前風景



第1号塚
土層断面



第 2 号 塚
石組確認状況



第 2 号 塚
遺物出土状況



第 4 号塚土層断面



遺構外-20



遺構外-19



遺構外-14



遺構外-16



遺構外-21



遺構外-18



遺構外-15



SI 1-4



SI 1-11



遺構外-17



遺構外-28



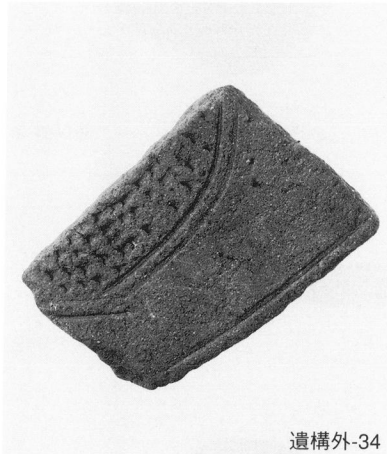
遺構外-27



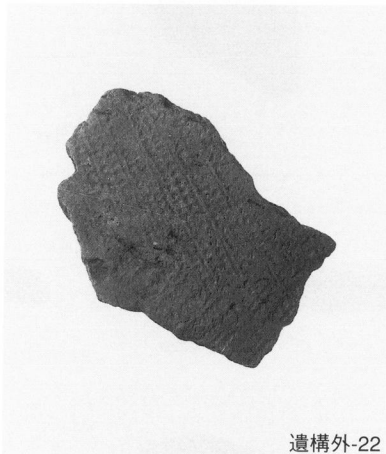
遺構外-23



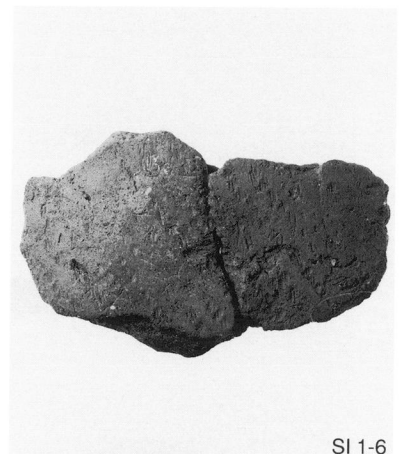
SI 1-7



遺構外-34



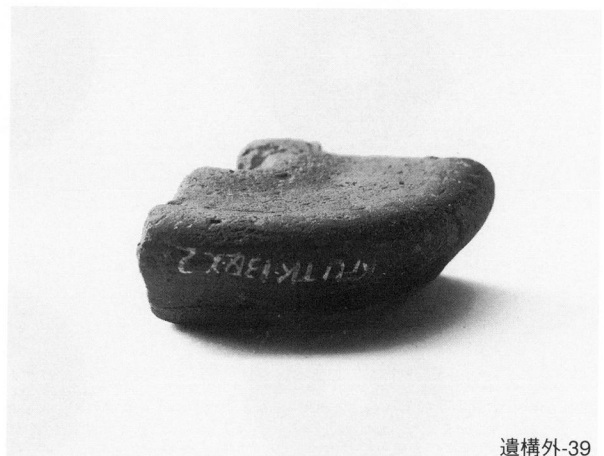
遺構外-22



SI 1-6



TK 2-40



遺構外-39



遺構外-51



TK 2-41



遺構外-52

第1号住居跡, 第2号塚, 遺構外出土遺物



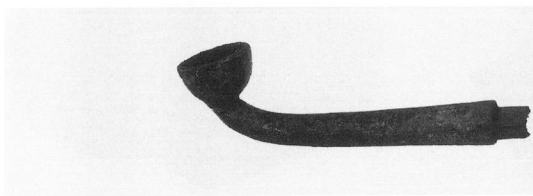
SI 2-13



遺構外-1



遺構外-2



SK 2-44A



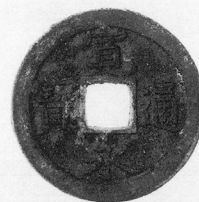
SK 2-44B



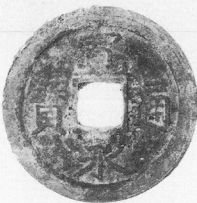
SK 2-45



SK 2-46



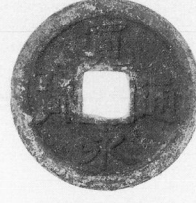
SK 2-47



SK 2-48



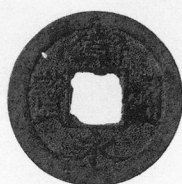
SK 2-49



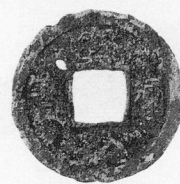
SK 2-50



遺構外-53



遺構外-54



遺構外-55

第2号住居跡，第2号墓壙，遺構外出土遺物

完掘全景
(西側より)



第1号住居跡
完掘状況



第1号住居跡
遺物出土状況





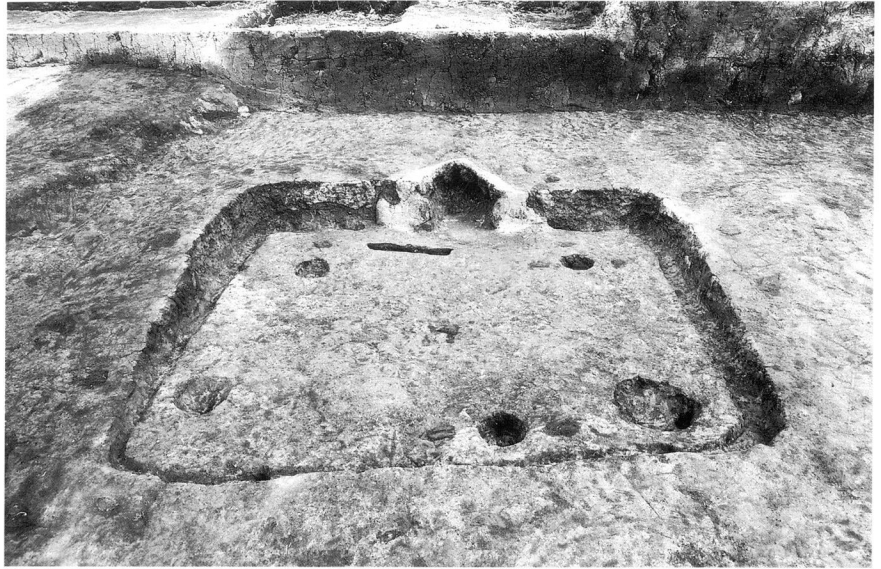
第1号住居跡
遺物出土状況



第2号住居跡
完掘状況



第2号住居跡
竈遺物出土状況



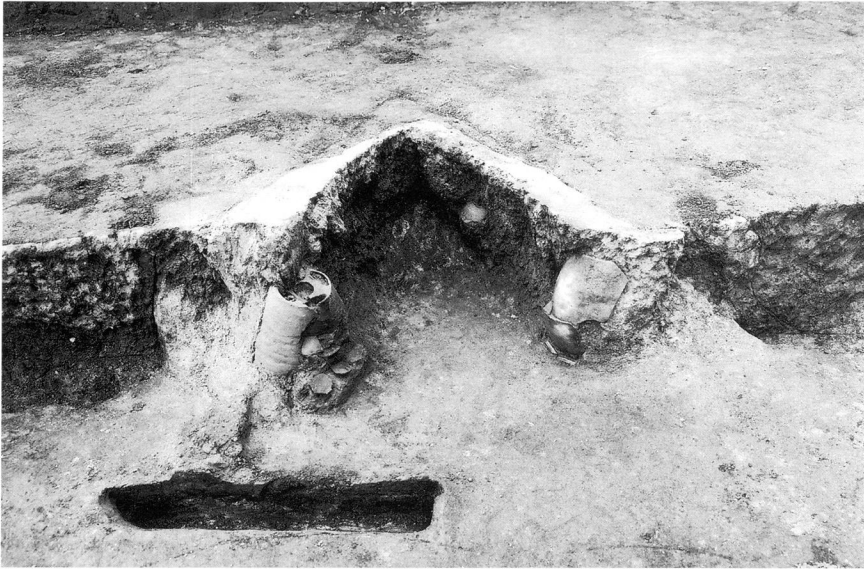
第4号住居跡
完掘状況



第4号住居跡
遺物出土状況



第4号住居跡
竈遺物出土状況



第4号住居跡
竈袖部補強材出土状況



第5号住居跡
完掘状況



第5号住居跡
遺物出土状況



第5号住居跡
遺物出土状況



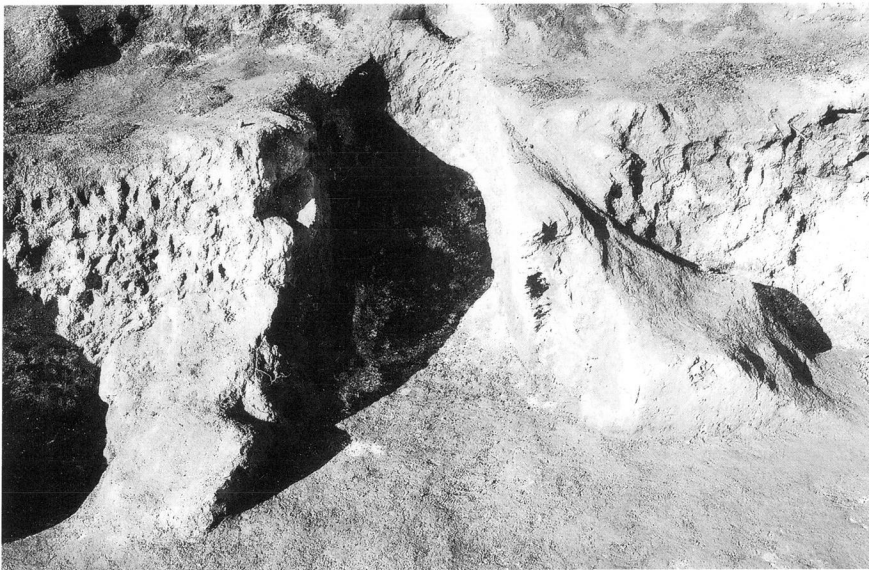
第6号住居跡
遺物出土状況



第6号住居跡
遺物出土状況



第7号住居跡
竈完掘状況



第7号住居跡
竈完掘状況



第7号住居跡
竈遺物出土状況

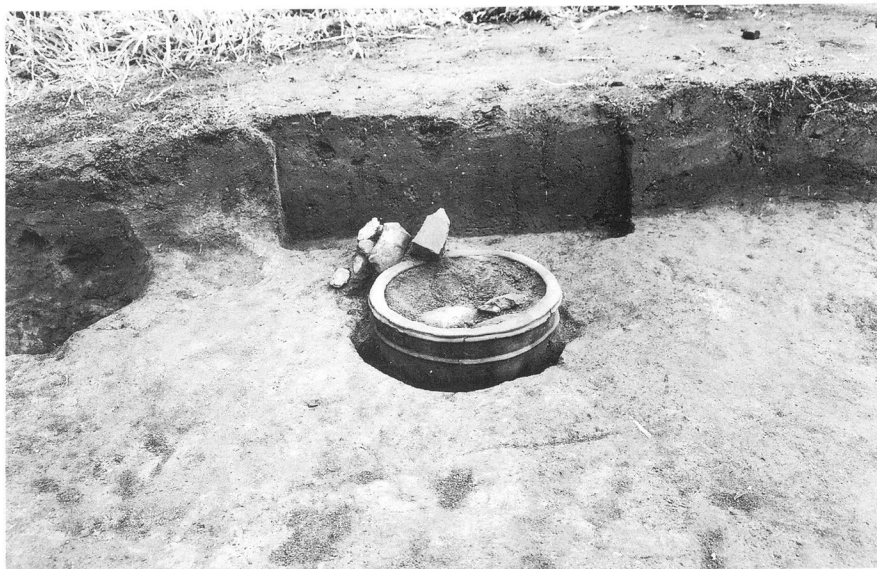
第1号掘立柱建物跡
完掘状況



第2号掘立柱建物跡
完掘状況



第3号掘立柱建物跡
鉢埋設状況

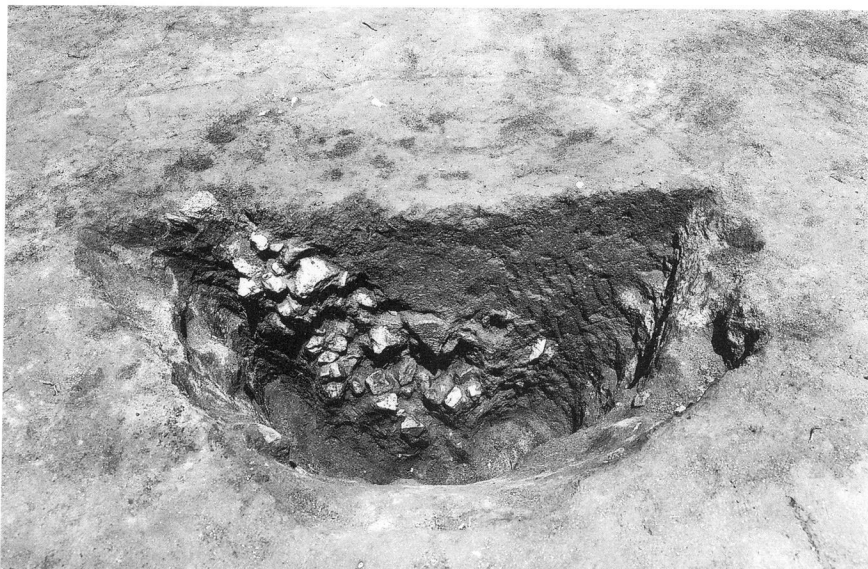




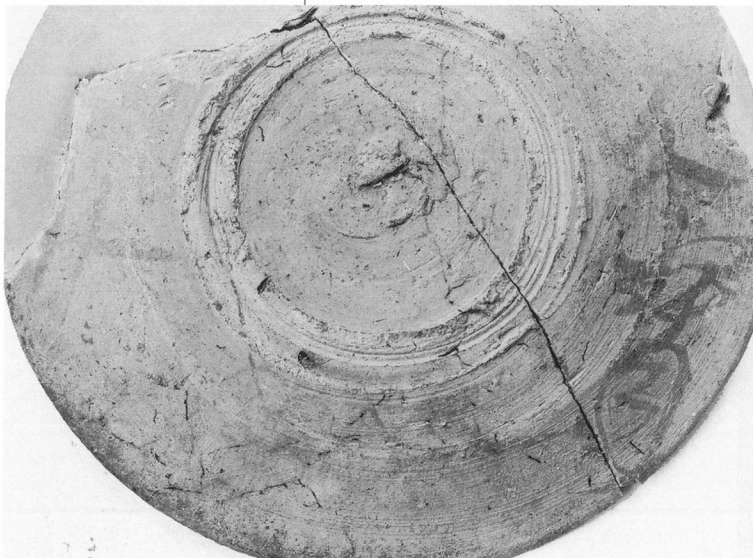
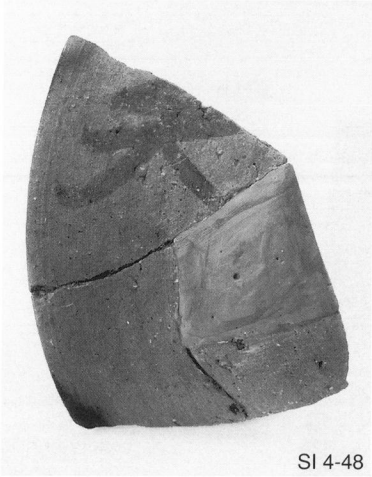
第40号土坑
完掘状況



第40号土坑
遺物出土状況



第1号井戸跡
遺物出土状況



第1・2・4・6号住居跡，第38号土坑出土遺物



第2号住居跡，遺構外出土遺物



SI 4-42



SI 7-76



SI 2-18



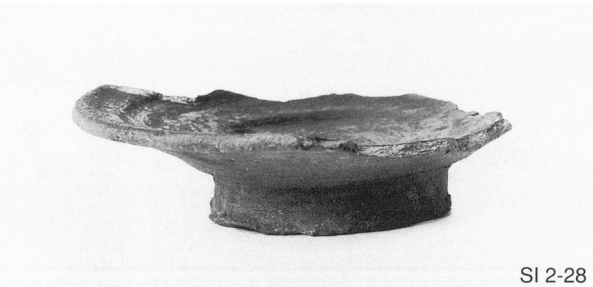
SI 7-78



SI 1-5



SI 7-77



SI 2-28



SI 4-44



SI 4-56



SK 40-111



SE 1-120



SE 1-119



SI 4-59



SI 7-95



SI 7-96



SB 3-114

第4・7号住居跡, 第3号掘立柱建物跡, 第1号井戸跡出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第227集

中山遺跡
福原打越塚群
上加賀田宮後東遺跡

平成 16(2004)年 3月 24日印刷

平成 16(2004)年 3月 26日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社
〒311-4153 水戸市河和田町4433の33
TEL 029-252-8481